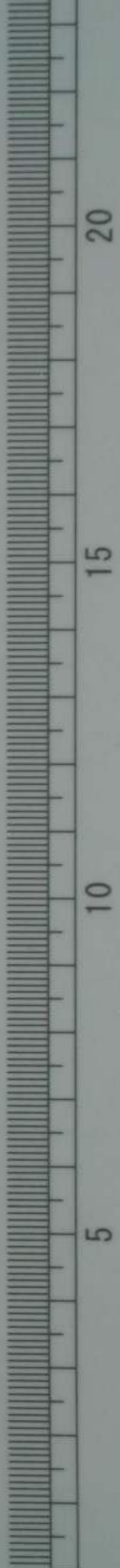


牧野信一

南風譜





牧野信一遺作集



東京  
甲  
鳥  
書  
林

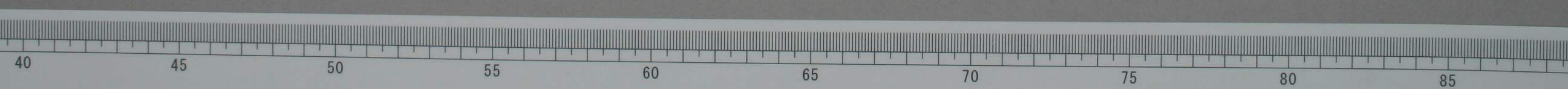


練  
都  
京  
甲  
鳥  
書  
林

牧野信一遺作集

牧野信一

南風譜





牧野信一

南風譜

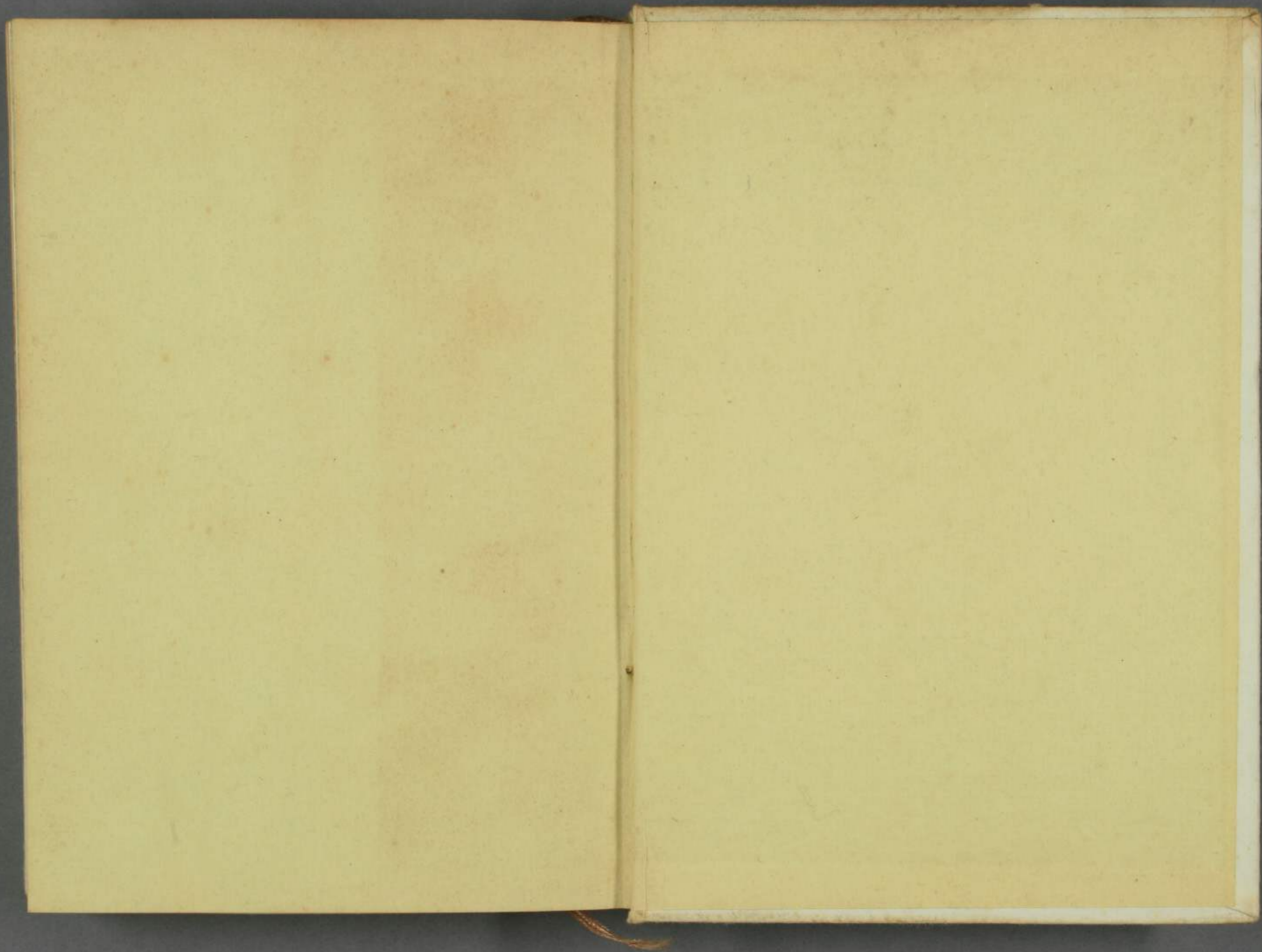


牧野信一遺作集











南風譜

牧野信一遺稿

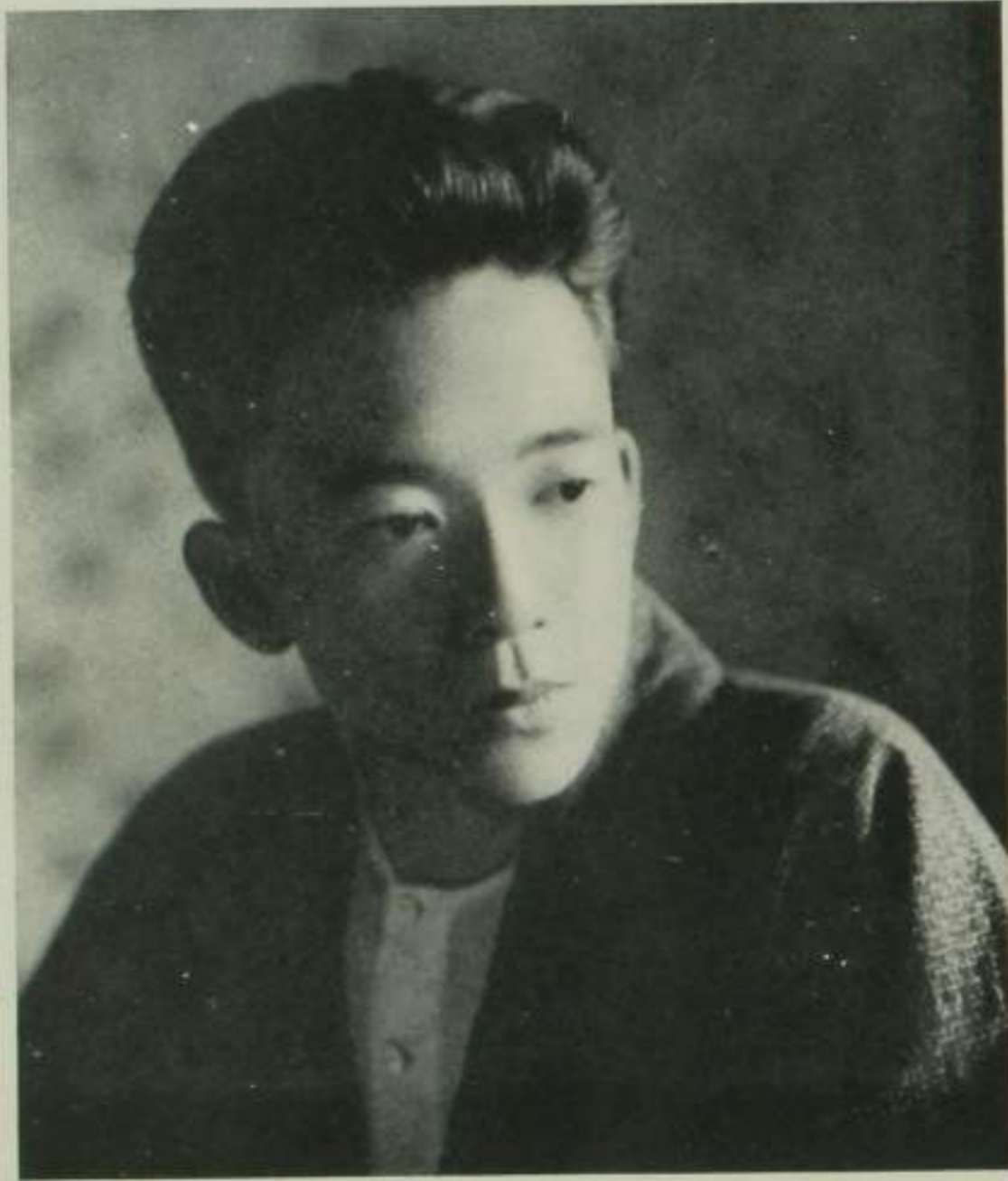
東京・京東  
版林書鳥甲



南風集

第一集

上海  
某某書局



著  
者



## 序

牧野信一君を語るには、その自叙傳に行くのが一番の近道と思はれる。君が書きのこして置いた自叙傳は文學的といふ言葉が添へてあるが、作家として平靜でゐられる時に思ひ立つたやうな性質のものではなくて、むしろ激しい精神の動搖から生れて來てゐる。おそらく壯年の危機は君の生涯にも訪れて來て、あれほど豊富な才能もたのむに足りないことを味はせ、もう一度自己の生命の源にさかのぼらうとする心を起させたであらう。君の自叙傳はさういふ危機の體驗から生れて來たらしく、更に新たなる生への希望をもつて筆を執つたものらしい。これはただの自叙傳でもない。そのことをすこしここに書きつけ君を追想するたよりも、またこれを序の言葉に代へようと思ふ。



前に記したやうな意味から、君の文學的自叙傳はおもに少年時代を叙してある。一つの生ひ立ちの記である。これから大人の世界に入つて見たことを書きはじめようといふところで筆が止めてある。止めてあるといふよりは、むしろそこで筆が進まなくなつて、自然に止まつてしまつたといふ趣のものだ。文學的な自叙傳としてはそんな端緒に過ぎないやうなものであるが、自然と文學へ赴くより他に結局道もなかつたかの感を抱かせ、一家の生ひ立を思はせるには十分なほどに出来るだけの壓縮もその筆に加へてあつて、少年時代のどの一片をとりあげても、いづれも意味深く語つてある。その中に、君は小學でも中學でも凡ゆる學科のうちで綴り方と作文が何より不得手で、幾度も零點を取り、旅先などから母親に宛てる手紙も書きにくかつたといふ一節がある。君はそれに續けて次のやうに書いてゐる。

『母は私のハガキでも、私が戻るとそれを目の前に突きつけて、凡ゆる誤字文

法を指摘した。第一文章が恰で成つて居らず、加げに無禮な調子であると訂正されるうちに、作文でも手紙でも私は、眞に考へたことや感じたことを、そのまま書くべきものではなく、左ういふことを餘程六ヶ敷い言葉を用ひて書くべきだ、さういふ窮屈を忍んで、決りきつたやうな眞面目さうな、そして思ひもよらぬ大袈裟な美しさうな言葉を連ねなければならぬのかと考へると、文字が亦、これがまた言語同断といふ程拙劣であつて私は途方に暮れた。親戚などに父の代理として時候見舞などを書かされる場合に、母が傍で視張つてゐるのであるが、私には何うしても、末筆ながら御一同様へも何卒宜しく御鳳聲の程を――などとは書けぬのであつた。』

とある。

眞に考へたことや感じたことは、どうしてそのまま書くべきものではないかの疑問が、早くも牧野少年の胸に宿つたのであらう。君自身の語るところによる



と、君は結婚以前に三度も戀愛を経験したが、手紙はまるで駄目で、どんな類ひの手紙を相手の娘から貰つても容易にそれに匹敵するやうなことが書けず、それでも夢中になつて書くには書いたが読み返すと、いつも全身が砥石にかゝつたやうな堪らぬ冷汗にすり減つたといふ。さういふ情人を見る時の君はまた、つい黙り勝ちで、思はず欠伸をするやうなことになつたり、眞面目なことを言はなければならぬ場合にも、つい空呆けて横を向いたりするやうな始末であつて、そのために君の求めるものは酬いられず、皆失戀に終つたとも語つてある。

『どんなに熱烈に思つてゐても、四角張つた時に拙い漢字で、戀しき君よ……などとは書けず、また徹底的に眞面目な表情で、屹度結婚しようネ——などとさゝやいて、手などは握れなかつた。私は、あのアメリカの娘（中學を終る頃にさかんに手紙のやりとりをしたアメリカ人の娘）に示した態度や言葉の十分の一でも、この敬ふべき郷土の言葉をもつて驅使成し得るならば、と悲嘆に暮

れた。思へば思ふほど、われ／＼の言葉や文字は、尊嚴に過ぎて、到底犯し得ぬ貴重なものに變つた。』

新時代の作家として牧野君が出發はこゝに萌してゐる。君はその言葉や文字の『尊嚴』や、到底犯し得ぬ『貴重』やを打ち砕くだけの才能と勇氣とをめぐまされた。あれほど少年時代に、あらゆる學科のうちで綴り方と作文が何より不得手で、母親に宛てる手紙すら思ふやうには書けなかつたと言ふ君が、その意味を悟る時を迎へたのだと思はれる。さてこそ、君が藝術には感情の解放ともいふべきものが強く働いてゐて、その特色が君の作の字々句々の上にはあらはれ、わたしたちの心をひかれるのも主としてその點にある。あの雑誌『十三人』に載つた短篇『爪』などは君の學生時代の作ださうだが、君は戸外に飛び出し、君が手と足とを持つてゐることを、初めて感じたと言つてもいゝほどのものであつたとか。不思議な縁故から、わたしは牧野君を引き出す役割をつとめたやうなものの、



あの『十三人』時代の君は早晚頭角をあらはすべき人で、わたしは割合に早く君を見つけたといふに過ぎない。君の自叙傳によると、君は自身を裸島へ泳ぎついた漂流者に譬へてゐる。この漂流者は日々の營みを怠らすあちこちと移り住んだが、わづかな風にさへそのうち建てた小屋は忽ち吹き飛んで未だに家を成さないとも言つてゐる。それを君は運命的であると考へるやうになつて行つた人のやうでもあるし、またそんな昨日の自己を絶対の姿と考へたくないと云ふ人で、もあつた。君はいつも自身の文章を読み返すと、凡ての過去そのものゝ如く、いつそ自烈つたいといふ氣を起した。君は一切の過去を棄却しなければならぬといふ。容易ならぬ人間の脱皮だ。それには身をもつて當らねばならない。君はその邊の深い消息を僅かに文學的自叙傳の終の方に泄らして置いて、それぎり歸つて來ない人のやうになつてしまつた。

何としても君は惜しい人だ。わたしのやうにして君の出發を迎へたものが、今

またこんな記念の言葉をこゝに書きつけるといふことは、これも何かの縁かと思ふ。生前の君が泳ぎついたその裸島にゐて、絶望と陶醉との感から身をも心をも起さうとしたといふことは、どんな新しい文學を豫感しての結果であつたか、それは推しはかれるかぎりでもないが、君が残したかす／＼の新鮮な作品と、この世に盡し得なかつた抱懷とは、わたしなぞのやうに長く文筆に従事するものゝ垢を洗つて呉れるであらう。

昭和十六年初夏の日、

牧野信一君が作品集の新たなるかたちで世に出づるをよろこびて

島 崎 藤 村



目次

序

島崎藤村

ダニユーヅの花嫁……………	三
パンアテナイア祭の夢……………	三五
昔の歌留多……………	五三
變装綺譚……………	七五
早春のひとところ……………	一一一

夏ちかき頃……………	一四二
ランプの便り……………	一八七
黄昏の堤……………	二〇一
波の戯れ……………	二二五
籠村記……………	二二七
痴醉記……………	二五七
南風譜……………	二八一



南風譜



ダニユーヴの花嫁



白雪は盡くる時無からん、白雲は盡くる時無からん……白雲は——

おお、あの歌はどこの人がうたつてゐるのであらう、何といふ朗朗たる音聲であらうよ、その聲がそのまま雲のやうだ、ああ、ああ、あれを御覽、あれを御覽、雲が雲が……

そんなに思つて、うっとり口をあけてゐると、みるみるうちに青空はるかに棚引いてゐる白い雲が、ハラハラと雪のやうに飛び散つて、降つて来る！ 降つて来る！ こんこんこんと飛び散つて、降つて来る！ 降つて来る！ こんこんこんと飛び散つて来るかと思ふと、私の眼蓋の上に来て、ほとほとと愛らしい音を立てながら小鳥のやうに羽ばたくのであつた——それにして、その羽ばたきの觸感が、冷たくも何ともなくて更に更に甘い睡氣を誘ふのであつた……

「面白い、面白い！」



と私は呟いた。

——夢から醒めた。

私は、河畔の葦の洲の上で、一方の腕をたくみに水の上にのばせてゐる茱萸の樹の枝から枝へ吊つたハムモックで、うたた寝の夢に鳥頂天となつてゐた。

「はははは……ここまで来れば、例によつて先生の風琴の音が聞えるだらう、そいつに勢ひを得て一ト息に矢の倉までのしてしまはうと思つてゐたところが、ぐつすりとおやすみちや仕方がないや……」

「誰にしたつて、この陽氣ぢや眠くもならうと云ふものさ、なあ兄さん——未だ、じぶん時には少少早からうが、俺らも此處であつさりと辨當をつかはうちやないか。」

「さうださうだ——よいいとまけよいいとまけ……」

ありのままの言葉づかひにしては、あまり間のびがしてゐて、恰度この河の流れのやうに悠長すぎるではないか——だから、それも私は、夢の中の歌ぢやないかな？　といふやうな思ひにうとうとしてゐると、間もなくギイツといふ舵をまげる音がして、やがて舟は舳枝につな

れた。そして雪太郎と雪二郎がこのこと私の下に現れた。

「やはッ！ やつぱり左うだつたのか……君達の話聲が、あんまり朗らかなので、僕は夢の中で天狗と散歩をしてゐたんだが、そいつがそのまま天狗の聲と響いてゐた。はつはつは……麗らかな天氣ぢやな！」

私は、吊床に腰をかけて二つ三つ大きく揺り動かせながら、それと同じやうに大きくわらつて、ばさりと兄弟の前に飛び降りた。そして、ひょうきんさうに鼻高のシラノのやうな見得を切つて、胸をひろげた。

「そいつは、どうも——」

兄弟は同時に肩をゆすつた。

「折角の素晴らしい夢をお騒がせ申して、何とも、いやはや申しわけがありませんでしたな、あつはつは……」

「一處に登らうよ。斯んなところで辨當を喰ふのも張り合ひがないと云ふものだ。」

云ひながら私は、二人の間を割つて夫々の肩に翼のやうに腕をかけて歩き出しながら、脚も



との田舟を指差した。

「矢の倉まで行かう、風琴は持ち合さなかつたが、舟歌は一手に引きうけたぞ、ヘツヅ・ハウ  
ヘツヅ・ハウ Myheartfull sky……wearing my solitary heart upon thy sleeve ……」  
なもんだい。待つてゐたんだよ、彼處までたどり着けば、もう君達は今日は用事はないんだら  
う。ともかく僕は愉快なんだ。斯う天氣が好いと、僕は、今、この場で息を引きとつても、さ  
らさら心残りは覚えぬといふ位ひ、事ほど左様に僕はこの天氣が愉快なんだよ。」

そんなに愉快のなら、晝寝なんかしてゐないでも好さうなものに——と聴く者の耳を  
疑はしめたほど、急に私は浮々として、おしやべりを続けながら猶豫なく舟のなかへ飛び込む  
と段段になつて積みあげてある米俵の頂上に馬乗りとなり、額に手を翳して、四方の景色を見  
渡しながら、

「もう春だな……」  
などと唸つた。

その河畔の丘の上に私の部屋の窓がのぞいてゐたので、私達は何時もその窓枠に竝んで手風

琴を弾きながら、下を通ふ田舟と呼應した。

——だが私の妻君が、ひとまづ先へ都へ登つてしまつてからは、手風琴の蛇腹に風穴でもが  
あいたかのやうに、私は力が抜けて、そぞろに白白しく瑟瑟たる風に襲はれてゐた。

だから、私は稍ともすれば河畔に降りて、友達が通りかかるのを待ち伏せてゐるのであつた。  
中には私のさしまねく姿を見ると、醜おしの腕を急に速めて、せっせつと行き過ぎてしまふ舟  
もあつた。無理もないのだ。何故なら、うっかり私の甘言にさそはれて錨を降さうものなら、  
大事な辨當を分捕られてしまふおそれがあつたから——。

ここは車も通らぬ山坂の通ばかりで、河のみが往來の大通りに使はれてゐる私達の小さな龍  
巻村であつた。

雪太郎は、うむうむと合點して舳を解くと、舳先に立つて竿を構へ、弟は醜の座席に着い  
て發動機のスキツチをいれた。ランプほどの容量のエンチンは、重い積荷のために水中ふかく  
姿を没してゐる推進器の翼を、水底に音を吸はせて、徐ろに廻轉しはじめた。

「おやおや！」



と雪太郎が眼を丸くして、汀に竿を突きながら私の窓を見あげた。「お宅の窓は明けっ放しぢやありませんか？」

「それにしても……あッ、誰かが窓を閉めてゐるよ、桐渡さんぢやないかな！」

「云つて呉れるな。」

不圖私は眉をくもらせて、あらぬ方へ眼を反向けた。「百鬼夜行の有様なんだよ——文學に没頭してゐる俺を、寧ろ幸ひにして、恰も氣狂ひ扱ひにしてゐる、然し僕だつて、ものの事情位ひは解るんだけど、そんな事に關つて、やれ、それは俺の財産だぞ——とか、俺は斯んな借金をした覚えはないよ——などと云ひ出したひには、單にそれだけのことが、充分に俺の仕事になつてしまふ、それが俺の生きる道になつてしまふ、文學に没頭する暇などはなくなつてしまふ——やがて、好い加減な田舎の紳士にはなれるかも知れないが……」

夫婦は分れる、着物も無くなる、住居の定めも怪しい、それで何が文學か——なれるものなら、好い加減であらうと、しみつたれであらうと、田舎の紳士となつて鬚でも生したら結構な

ものであらうのに——雪太郎は、まさしくそんな風な思ひで首を傾げながら、破れ靴にインヂアン・ジャケットといふいでたちの私の様子を氣の毒さうに振り返つた。

「何だい、雪太郎、その眼つきは——。今夜から俺は、ほんとうの自分の仕事が出来るといふことになつてゐるところだといふのに、憐れ、ばい眼つきは禁物だよ。」

「ほんとうですか？」

と體の方から雪二郎が聲をかけた。「仁王門の裏二階は、もう一ト月前から準備が整つて、

先生の御入來を待つばかりですぜ。」

「奴等が俺の歸來を希はぬのを逆用して、さうだ、このまま俺は仁王門の住人となつてしまはう——」

矢の倉の鎮守の森では、社の御神體は二、三年前に桐渡鎌通達の村會議員の膽入りで、彼等の村社に合體されて、空社となつてゐたが、近郊の音に響いた有名な仁王門は、昔ながらに森蔭の正面で逞ましい見得を切つてゐた。村費をもつて、それもそのまま隣村へ移轉させようといふ議もあつたが、意外に嵩む移轉費の捻出に事缺いて、當分沙汰止みとなつてゐたところだ



あつた。また桐渡等は、この仁王の作者が或る名工の腕に成つたものであるといふ鑑定をつけて埠頭場の美術商に賣却して、村境ひの木橋をコンクリートに架け代へようといふ議が起つてゐたけれど、桐渡の加名を知つて不信任を叫ぶ一黨が現はれ、これも當分見合せとなつてゐた。桐渡派彈劾の連判書には、私もあさやかな拇印を捺してゐるのである。

それは左うとして、雪太郎の叔母が仁王門の裏で代代の休み茶屋を営んでゐる。社は空屋となつたが、國境の山を越へて遠く商ひに行く車馬の一隊は昔のままにこの休み茶屋で息を容れる慣ひであつたから、經營の困難もなかつたし、その上、桐渡派とその彈劾派の争ひが世間の注目を惹いて、仁王門に關する様様な迷信的の流言蜚語が飛び、見物人が日に日に絶ゆる事もない繁昌振りを示してゐた。もう一息、この噂が人氣を呼ぶやうになつたら、雪太郎達は米運びの合ひ間に案内船を仕立てようかといふ話まで持ち上つてゐた。いっぞや、その相談役に招かれて、私が仁王の茶屋を訪れた事があつた。相談は何うなつたか、議長格の私が今は忘れてしまつてゐるが、何でも私はその晩わけもなく大ざつばな太平樂を竝べて、ぐでんぐでんに酔つ拂つて歸途を失つてしまつた。

「ぢやお雪や、先生はお二階へ御案内申すかね。」

手傳ひに来てゐる兄弟の妹に、お婆さんが左う云ふと、お雪が、夜中に目を醒しにでもなつて、先生が驚きはしなからうかと逡巡した記憶が私にあつた。店と、爐のある部屋がつづいてゐるだけの家なのに、二階とは不思議だな——と思ひながら、お雪に従いて眞つ黒なカーテンをくぐると、段々を二つ三つ上つたかと思ふと、眞四角な箱のやうな部屋に達した。翌朝、私が目を醒して見ると、その部屋の三方には祝入營龍卷雪太郎君と筆太に認められた幟の幕に圍まれてゐた。それにしても、朱塗の逞しい柱や格子がうかがはれると思つて、首を上げて見ると、一方の幟の向側に大岩のやうな仁王の背中が接し、天井と幟の合ひ間から大腕を揮つて虚空をきつてゐる仁王の肩から上が奇峭となつて眺められた。つまり、私の寢室は仁王堂の中の恰度門番が住むやうな二段となつた「樂屋」見たいな二階であつた。同じ廣さの階下は、お雪の寢室で、二階は客用に使はれてゐるといふことを朝になつて知らされた。

片方の三柱の格子からは、門を出入する人人の姿が見降せる、仰いでも、此方は薄暗いからその上、チラ／＼する格子を透しては中の様子は解らぬ。私は驗しに下に降りて仰いで見たけ



れど、若しあの中に住む者があれば、囚はれ人か盗人の晝寝の洞にふさはしい——と思はれた。片方に仁王の肩巾を屏風として、金網に囲まれ、そしてこの格子の下に机を据えたならば、實に私が人に秘れてもくろんでゐる規模雄大なローマンズの筆を執るには世にも適當な仕事部屋であると、深く吾が意を得た次第である。

私が、あの河岸の丘の部屋にゐると、それとなく桐渡やその部下の者が訪れて来て、東京へ赴くのは何時か、何日か、私は直ぐにも貴君がここを空け渡すと聞いて、既に貴君の母堂から借用してしまつたのであるが、一體、そのローマンズとやらは何時になつたら出來上がるのか——などといふ風に、それでも私の機嫌を正面から苛立たせてしまつては、いろいろと不首尾の事情があるもので、適度に諷諷の笑みを含めて云ひ寄るのであつたが、さうと氣づけば、私も仲仲さる者であつて、どつこい、その手に易易と乗る者でもなかつた。

桐渡達は、人里を遠く離れた丘の家を根城として、仁王門掠奪の議を回らせたり、車座となつて丁半の博奕を打つたりしたいばかりで、私の出立を急いでゐるのであつたが、さうなると私は寧ろ陰氣な興味が起つて来て、わざと、夜晝の別をとり違へて、ぎろゝとして、彼等の酒

盛りの部屋の前を往行したり、また、私が寢臺にもぐつてゐるのを見届けて、そろそろと悪事の相談會を開かうとすると、突然私の大きな咳ばらひにおどかされて、散會させられたりしてしまふのであつた。

さつきもさつき私がハムモツクの上で、うと／＼してゐると、彼等の仲間が様子を窺ひに來て、

「御散策にでもお出かけかと思つたら、斯んなところでおやすみですか、お仕事の方は如何ですか、お部屋が大分綺麗に片づいて居りますな。御出發のお手傳ひなら、私共にお命じなさいませんか。」

などと云ふのであつた。

「なあに僕は——」

と私は故意に飄飄と云ふのであつた。何故なら彼等は、夙に私を目して風來的な素質に富んだ詩人と断定して、私が吐く言葉は決して他の心根を藏さぬものと信じてゐた。「行かうと思へば、このまま、ぶらりと——誰に、何の挨拶もなく行つてしまふよ。あまり天氣が好いので、



今、それを考へてゐたところさ。」

全く彼等との敵對行爲は私に幾分の興味を呼び起してはゐたが、そんな氣分にはかり關はり合つてゐると、つい、それも面白くなつて容易に仕事に手が出さうもなかつたから、一層舟をつかまへて、このまま出發してしまはうかとも考へてゐたのである。

「それはそれは！」

と彼等は思はず乗り出して、藏する限りの愛嬌を浮べた。「何しろ私達、畑違ひの者がいろいろと出入りしては、御氣分に觸つて大事なお仕事の方が留守にでもなるでせうから、私達も、もう、そればかりが心配で心配で恰もハレモノにでもさわるやうな思ひで、はらはらしてゐるんですもの。」

「僕も、いつまで愚圖愚圖しては居れんのさ、構想も、もう充分となつたから、仕事は都のアルバイトにでも行つて……」

「待つてゐますよ。先生の本が出ましたら、私達にも屹度讀ませて下さいね。——楽しみだな。先生がこれから何んな立派な小説をお書きになるかと思ふと、私達はもう今から胸がぞくぞく

してまゐりますよ。」

私のそれは時代を遠く戦亂の世にかりた傳奇小説ではあるものの、巻中に出現する多くの悪黨共は、悉く奴等の姿をありのまま描破して、祕かに作者たる私が積年の鬱憤を晴さうといふ仕組みであつた。就中私は、それ自らが豪勇無比な荒武者となつて、從横無盡に花花しい筆端の刃を揮つて、群がる者共を手玉にとつて薙ぎ倒し、こばから首をちよん切つて、さしもの龍巻村に平和の風を吹かせるといふ、痛快至極な冒險譚であることを知らずに、彼等は、左う云ふと、一様に恍惚の眼を細めて深深と息を吸ひ込んだ。

「出かけたくなつたぞ。」

私は、何か深い思惑でもあり氣に、凝つと雲の彼方を睨めながら重重しく唸つた。すると、彼等は私の氣分に逆ふことを、暴君の下僕のやうに怖れて

「然し、そのまゝの姿でも、まさか出發は出来ぬでせう。なんなら今直ぐにでもお召物の用意は致しますが……」

「着物は、矢の倉に預けてある——新調の背廣が一ト揃ひ——」



「ほほう——さすがにお手回しのほどは萬端行きとどいてゐるんだな。何でも先生は、業業しい出發の騒ぎなどといふありふれた習慣は、きついお嫌ひの由で、何でもその日の風の向き次第、御氣分の帆のあたり次第、時刻も關はず出發してしまふといふのが常常からのお心掛けのさうだが、さすが詩人だ、偉い變り振りだ——と皆なもうそれを聞いて感嘆の舌を巻いてゐるんですよ。」

「あまり、傍から兎や角云ふと、朗らかなインスピレーションが消えてしまつて、元の部屋へ戻つて寢てしまふより他に始末がつかなくなるかも知れないよ。」

「やッ、それは大變だ。……然し、その路金の工面は？」

「煩いな。それも矢の倉にあるんだよ。」

と私は眉をひそめた。——そして私が、再び瞑想的な面持ちで靜かに眼をつむると、彼等は口口に、口のうちに、

「叱ッ、靜かに靜かに！」

「あぶねえ瀬戸きわだぞ！」

「ひやひやさせるねえ！」

などと吹きながら、抜きあし、差しあしでその場を立ち去つた。

そつと私が薄眼を開いて見ると、三人の男が薄氷を踏むやうな眞面目な滑稽な脚どりで、そこそと葦をわけながら汀を離れると、ブラボウ！ と叫ぶが如く翼を擴げて、まつしぐらに丘を駆け昇つて行つた。

……舟が、流れのままに大きく迂回して、木立の蔭にかくれやうとする角に差しかかつた時、私が彼方の丘を振り返つて見ると、さつき慌てて閉められたあの家の窓から、幾人もの悪人が重り合つて、切りと帽子やハンカチを打ち振りながら、恰も出陣の首途についた荒武者との別れを惜しんでゐるかの模様であつた。

二

「祝入營」の幟の中の私は、晝となく夜となく小さな古ぼけた經机の前で、鈍重な眼を据えて



のだが、言葉に變へるべく未だ腦裏の猛猛しい情熱の渦巻きが餘りに生生し過ぎるのを感じた。換言するならば、篇中に活躍すべき多く登場人物を扱ふべき私の態度に、作者としての襟度と夢の不足を知つた。——續いて未だ少くとも二三ヶ月の「ウオーミング」の要を私は覺えた。

朝、目が醒めると私の脚もとから胸先へかけて麗らかな陽が射してゐるかと思ふと、頭上の帷に大白にも増した仁王の頭が、くつきりと映つてゐることがある。また陽の加減に依つては大蛇が雲を呼んだやうに見える仁王の腕の影が、帷の一方から天井に抜けて駆け登つてゐることもあるし、脚もとのスクリーンに、はつと開かれた仁王の掌が、小さな私をその中に一と掴みにしてしまふ勢ひで迫つてゐるのに仰天させられることもあつた。私は時計などは持つてゐなかつたが、それらの仁王の影の部分的位置の具合で、誤りなく午前の時間を云ひ當てること出来るのであつた。

私は目を醒ますと、先づ呼鈴の代用として使つてゐる枕もとの木魚を叩くのであつた。

「思はず寝過してしまつたよ。仁王様の掌が、恰度僕の胸先まで伸びてゐる、九時半だな。——雪ちゃん、今日から俺は、平氣で、爐端へ出て飯を喰ふことにするよ。もう、人の眼を避け

るといふ必要を感じなくなつたから——そして、また暫く、机の前の營みは打ち絶つて、いろいろな運動をしなければならなくなつたから——どれ、一つ顔でも洗ひに出掛けるとしたいがお前の手は空いてゐるかね？」

「いつもの通り、今頃ならば——もう、朝の仕事が終へて、お晝まではあたしの時間ですもの——さあ、お伴ませう。さつき雉の聲をききましたよ。」

「今日こそ手なみを見せてやらうかね。」

私がお雪が持つて來たコップの水を一息に呑んで起ちあがるのであつた。

裏口から深い櫟林を抜けて、澤へ降りて私は朝の嗽ひをするのが習慣だつたが、澤までは凡そ三四丁の道程があるので、いつも私は鐵砲を携へて出掛けるのであつた。

いつもならば裏口からの出入でも店先に人影の絶へたところをお雪に見とどけさせて、私は仇打ちの浪人者のやうに人眼を忍んでゐたが、すっかり態度を改めて、花模様をついたタオルを襟卷のやうに首に巻きつけながら鐵砲をとりあげると

「おばあさん——これこそたとへの通り朝飯前に獲物をぶらさけて來るから、ロースの用意を



しておいてお呉れ。」

などと云ひながら、洗面の道具や、氣紛れなハーモニカや一組のトランプなど入つてゐるズツクのバケツを携へたお雪を従へて、私は陽が極くまばらに散つてゐる朝の林の中へ靴音高く駆け込んだ。私は鐵砲は持つてゐるもの、これまで一度も獲物を打ち落した経験はなかつた。——ただ、梢を目がけて、虚砲の音を轟ろかせては、いんいんと谿をわたつて打ち響く山彦の夢に耳を傾けるのが、云はば私の朝の祈りであつたのだ。

「——打つては駄目ですよ。ほんとうにさつき雉を見たんだから……」

お雪は、ゴムの長靴で朝露を含んだ齒朶を踏みながら私の後を追ふて來た。「お前がこれを持ちなさいな。そして、一度私にそれを貸して御覽……あッ！」

とお雪は、息を殺したかと思ふと素早く私の腕から鐵砲をもぎとつた。

「居る居る！」

そして彼女は、私を駆け抜けると行手の樞の大木の蔭に背をかゞめて身を忍ばせた。私は、妻が残して行つた橙色のジャケットを着て、この朝の寒さも厭はず細く長く素足に長靴を穿いた

お雪が凝つと獲物を狙つてゐる様子を、うしろから眺めてゐると、何とも得體の知れぬ、凡そ今迄感じもしなかつた胸を颯つと引き絞められる花やかな香氣に打たれた。未だあたりには朝霧の煙りが水のやうに流れてゐる草の中に立つた彼女の姿が——その上着の明るい色彩が、とところどころに點點として梢から洩れ落ちてゐる陽だまりの一つのやうに、そして巨大な蝶蝶のやうに、凝つと羽根を休めてゐた。

と彼女は、慌てて振り向きながら私をさしまねくと、更に繁みをくぐつて先へ進んだ。鳥が枝を渡つたのか、それとも照尺を縮めたのか——私には鳥の姿は見へなかつたが、何だか私は、厭に生眞面目にてれ臭つたやうなあまりに能なし氣な思ひで、よた／＼と伴いて行くと、待つ間もなく、間一發、發砲の音で私は、思はず、ドキッとして蛙のやうに飛びあがつた。

また、振り返つた彼女の顔を瞥見すると青白い興奮の氣色が見られた。——私は、或ひは私が未だ彼女が引金を引く間もない前に、飛びあがつたのではなからうか？ その音で、鳥が逃げてしまつたのぢやなからうか、そしてお雪が憤つたのではなからうか？ そんな臆病さに打たれたかと思ふと、いつか、もう彼女の姿は私の眼界から去つてゐて、繁みの彼方からさかん



に私を呼ぶ聲が起つた。

「わあい——獲れたよ。」

お雪は鳥の脚を掴んで宙に打ち振つてゐた。さつぱり興奮してゐるわけではなかつた。それなのに私は、非常に興奮して、バケツを投げ出してその傍らへ駆け寄ると

「やあ、偉い偉い。素晴らしい——」

さう叫ぶと一處に、思はず娘を腕に載せて、激浪のやうにゆすつた。ほんとに私は、相當の専門家でない限りそんな鳥などは打てるものではないとばかり思つてゐたので、酷く彼女の腕なみに驚嘆したのである。

お雪は私があまり真心から感嘆しつづけるので、すつかりあかくなつて——いつも私の食膳にのぼす鳥料理は悉く彼女自身が打つて來ることや、だが近頃私が朝な朝な出鱈目な空砲ばかり鳴らすので、次第に鳥共が森の奥へ奥へと逃げ去つて了ひ、仲仲この邊には現れなくなつた由などを述べた。

「知らなかつたな、それは——。昨夜もたしか鳥の御馳走があつたぢやないか。」

「ええあれ山鳥よ——谷の向ふ側へ行つて打つて來たのよ。」

「ひとりで……」

徑の在所も知れぬ熊笹の崖である、流れの岩を飛んで胸突き崖をよち登ると、國境の山山を見晴らす明るい芝の野原に出るが、私は何時かの春の蕨狩りに出掛けた時、崖を這ひ登りながら臆を冷したのを思ひ出して、銃を擔いだ娘がひとりであれを登るさまは想像が困難だつた。

「あたり前だわ。」

お雪は苦笑してゐた。「今朝だつて、もう、一度行つて來たのよ、霧が深くつて生憎不漁だつたけれど。ちや、お店に時時ならんでゐる雉や山鳥は、皆なあたしが打つて來るんだと云つたら、何んなにお前は驚くだらう？」

「賣つてゐる、あれ！」

季節季節の川魚の干したのを藁づとにして軒先にぶらさけてあるのに並べて、いつも小鳥の束が商はれてゐるのを私は知つてゐる。

「そのお金がもう二十圓もたまつてゐる。」



「——この鐵砲は勿論雪ちゃんに進呈するけれど、僕が東京へ行つたら、もつと新式の輕いのを買つて、屹度送つてあげるよ。」

「何時東京へ行くの？」

「……………」

「新しい鐵砲なんて要らないや。——行つてはいけないよ。」

——澤に降りると、私はシャツも下着も脱ぎ棄てた半裸體となつて、口を嗽ぎ顔を洗つてから、流れのまん中で巨大な牛が沐浴をしてゐるかのやうな姿の岩に飛び移ると、カルデアの蠻族の牧歌を高唱しながら勇ましい體操をはじめるのであつた。

これらの山々の谷間を流れる三條の谿流が麓の村境ひに合して、あれらの舟を泛べる河となるのだ。

私は、流れに向つて、つたへよや、かの窓に屯ろする人人に——

涼風夜雨を吹き

蕭瑟として寒林を動かせり

などと歌つて、切りに復讐の體操を續けてゐたが、汀を眺めると、恰度寢椅子に似たかたちの石に鳥のやうにその身を横へて、私の體操の終るのを待つてゐるお雪が、水鏡に凝つと視入つてゐた。寢椅子の裾には深深として孔雀齒袋が、絨毯のやうに生ひ繁つてゐた。もう聞き飽きてゐるためか彼女は、私が次第次第に何んなに歌の調子を高めても、身動きもしなかつた。彼女は、さつきの獲物の羽毛を花びらのやうに水に浮べながら、もの思ひに耽つてゐるかのやうに見えた。

そして私は、私の歌の絶え間にそつと耳をそばだてると、それは娘のうたふ聲に違ひない——

With outstretched arms upon the shore stood,

With tearful eye she gazed upon the flood,

と聞えた。——崖の上に私達の狼犬セウファウズが現れて、空に向つて口腔クチを開けてゐたが、やがて飼主を發見すると、ほんとうの狼のやうに猛猛しく落葉を蹴散らせながら、汀を目がけて駆け降りた。

Whose swelling tide now seemed as if it would sever



——歌は續いてゐた。

「あれは、ダニユーヴの花嫁の歌だ！」

私は、今が今迄あの窓に向つて不斷に身構へつづけてゐた颯々たる劍舞の夢が、恰も「白雲去つて悠悠たり」といふが如き風情で、靜かに拭はれて行く和やかさを覺えた。

きらめく水の戯れに娘の影の浮ぶさま、流れよ、波よ、しばし彼女の面影を……

私は思はずその歌の續きを口吟みながら、反對の汀に飛び移ると、齒朶の群れのなかに咲いてゐた山水仙を折つて、

「おうい——ベルター！」

と稱んでしまつた。「投げるからうけとつて御覽……」Those young flowerets there, shall form a braid for thy sunny hair; I yet will save one, if but one, soft smile reward me when it is done,」

三

纜網が解かれると舟はゆるゆると降りはじめた。私はトランクに凭り掛つて、雲を眺めてゐた。舟の後先では雪太郎と雪二郎が、黙々として竿を操つてゐた。

「おお、お雪が来る——名残りを惜んで」

誰かが左う云ふので私は岸の方へ眼を向けると、明るい橙色の上着を着た娘が、流れに平行した畦道を山鳥のやうに飛んでゐた。

汀の野花をひきちぎつては、切りに舟を目がけて投げてゐたが、そこまでもとどかず花片は

吹雪となつて水の上に散つてゐた。——飛びはねる毎に明るい翼がきらきらと陽に映えては、

また草の中に姿をかくす……

「あれは山鳥だよ、やはり……」

と私は呟いた。然し鳥は、私達に向つて切りと何か呼びかけてゐる。

「鳥だらうか、お雪だらうか」

私達は二三言云ひ争ふてゐたが、何故か私は、

「それならば——」



と自信のありさうに唸つた。だが私は、それが鳥であらうとお雪であらうと頓着はなかつたが、無性に悲しくなつて、それならば試して見ようと點頭いて、

「一身輕舟と爲る——」

と胸を擴げて歌つた。すると一人の舟人が聲をそろへて

「落日西山の際——」

と和した。そして私達が、そぞろに陶然として

「常に帆影に隨ひて去り

遠く長天の勢ひに接す——」

斯う高らかに合唱すると、私達の舟を追つて驅けつづけてゐる鳥のやうな影が、綺麗な叫び聲を擧げて空高く舞ひ上るのであつた。

「御覽、やはり山鳥ぢやないか！」

私かわけもなく得意さうに云ふと

「いいえ、あの通り——お雪ですよ。」

二人は更に強情を張るのであつた。

すると舟が柳の木蔭を回つた頃から急に勢ひを増して流れはじめた。私はよろよろとして舟ばたに凭りかかりながら、後ろの空を見返へると柳の上を飛んでゐる山鳥が突然翼を翻して轉落する有様であつた。

私は思はず手に汗を握つて、悲鳴を擧げてしまつた。——と、私は帷の中で夢から醒めてゐた。

うらうらとした朝なのだらう。脚もとの幕に仁王の見事に開かれた片手が鮮やかに逸曳してゐる。恰度、その影を壁飾りの位置にして、お雪は天井から吊した投網の破れ目を繕つてゐた。

私は、ぼんやりと油繪のやうなお雪の姿を眺めた。

間もなく街道の坂下の方角から物物しい法螺貝の音が響いたかと思ふと、がやがやといふ人の喚き聲が次第に仁王門を目掛けて繰り込んで來るのであつた。——貝殼の音があたりの楯に陰陰とこだまして、やがて行列は門をくぐりはじめた様子なので、そつと私は幕の間から見降すると、村長、助役、議員達をはじめとして矢の倉村の人人が、てんでんに赤禪白禪の見るも



甲斐甲斐しいでたちで、どつとばかりにおし寄せて来るのであつた。

「村の人達は此處に勢ぞろひをして、これから舟で龍卷村へ降りるんです。」

「一體、それは……」

訊ねやうとした時に私は彼等がおし立ててゐる職の文字に「矢ノ倉仁王門撤廢反對運動」とか「古跡を保存すべし」とかその他、代議士候補桐渡一派を弾劾する様様な檄文を読みとつた。一隊はどやどやと私達の茶屋の前集ると、爆竹の火花を擧げ、鬨の聲を擧げて、天に沖する威氣であつた。

「皆なが、先生を呼んでゐる——私達も出掛けるんですよ、私達の娘子軍も……」

お雪は、投網を疊んで登山袋に詰めはじめた。みちみち、網を打つて、糧食を求めるのがアマゾンの役目の由であつた。

「それぢや恰るで、去年の春の川遊び見たいぢやないか……」

「ええ——毎年川遊びに事寄せて、龍卷村へ乗り込まうといふのが、私達の計畫なんですつて！」

さうしてゐる間にも、村人は次第に數を増して来て、店は時ならぬ繁昌を呈してゐるらしかつた。——雪太郎が酒樽の車を曳いて、門をくぐつて来るのが見えた。

「お雪は何うした、おういお雪——出陣の盃に酒を注いで呉れ」村長の亢奮の聲がした。「僕は——」

と私はベルタの手を執つて起きあがつた。

「朝の沐浴を済せて、直ぐ後を追ふから——と村長へ傳へて呉れないか。」

私は、斯んな場合に、斯んなことを申し出る自分を、ベルタに對して耻らひを覺へたので、云ふと同時に彼女の不機嫌を期待したのだつたが、彼女は、不圖私の顔を凝つと眺めたかと思ふと、投網の袋を背につけたまま、私の胸の中に顔を伏せて、わけもなくうむむと點頭いてゐた。その時、私の眼底には、あの龍卷村の、あの窓の下を、矢のやうに降つて行く一艘の小舟が映つてゐた。小舟では、鐵砲を抱へた私と、網を携へたベルタが肩を組んで「白雲」の歌をうたつてゐた。

仁王の腕の影が、私達の脚もとまで伸びてゐた。その影の中に寝轉んで、外の騒ぎに耳を傾



けてみると、私はやがて、遠くこの地上を離れて、今や私のロマンスの世界に到達したかのやうな鮮やかな夢心地に陶然としてゐた。

32

——私が書かうと試みてゐる物語の冒頭は、出陣の首途にあたつて戀人との別離を惜む勇士の姿であつたが、はからずも、その空想が眼の先の影の中に吾身をもつて髣髴として來た。その一節を私は「ダニユーヴの花嫁」と題することに決めて、仁王の影の中から身支度をととのへて、やをら立ちあがつた。

パンアテナイア祭の夢



### 堤の白明

野菜を積んだ馬車を驅つて、朝毎に遠い町の市場へ通ふのが若者の仕事だつた。

村を出はづれると、白い川の堤に沿つて隣りの村に入り、手おし車ならばそのまま堤づたひに眞ツすぐに、また次の村に入れるのだが、そのあたりから道が急に狭くなつてゐるので、馬車だと迂回して、鎮守の森の裏手から、村宿を通り抜け、鍛冶屋と水車小屋に、朝の挨拶をかけて、橋を渡るのであつた。

「お前の槌の音が聞えると、タイキ（馬）は、きつと脚を速くするぜ。」

「その脚音は此方にもちやんと聞えるわよ。斯んな勤勉家のお前と私とが、萬一夫婦になつたら村一番の金持になるだらうね。」

鍛冶屋の娘と若者は斯んな話を、大聲でとり交したことがあつた。

娘のあんな戯談を若者は、どうかして思ひ出すと屹度悲しくなつた。何故だか若者には好く



解りもしなかつたし、また、深く考へて見もしなかつたが……。そして若者は、この頃では、鍛冶屋の前を通る時には、

「お早よう！」

と叫んで、振り向きもせずには駆け抜けるやうにしてゐた。

と、屹度、娘も、槌を止めて、何か云つた。——「ヒツプ！ ヒツピ！」と、口笛のやうな聲をおくることもあつた。

「靴を買つて来てお呉れ！ そら、お金よ。」などと、駆け寄つて来て、若者の胸先きに財布を投げつけることもあつた。

「オーライ！」

と、云へることと、云へぬことがあつた、若者は……。だが、娘からの頼みを忘れたことはない。

三つの村を通り、二つの橋を渡つた後に漸く若者の馬車は市場のある町に着くのであつた。

……夏だと、白い川の堤に差しかかつた時分に夜が明けるのがならひだつた。屹度、そこで

白白と空が明るくなるのが常だつた。そして若者の胸に、娘の映像がはつきりと現れ出すのが例だつた。——白い川の堤を、ゆたゆたと進みながら、娘の白い幻をあさやかに空に描くのが、若者の祕やかな悦びだつた。

曙の薄明りの中で若者は、娘を堅く抱き締めた。

明方の白い川である。若者は、寢屋の夢でも屢屢この堤を見た。御者臺に娘と肩を組んで並びながら堤を進んで行く白い夢を、若者は屢屢見た。

いつの頃からか若者は、その川のことを「白い川」と獨りきめに稱んでゐた。或日、市場からの歸りに、旅人に村へ行く近道を尋ねられると若者は思はず

「あの白い川の堤に添つて——」などと教へて、不圖苦笑を覺えたことなどもある。明方の印象だけが深いので若者には何時もそれは白い川だつたが、その時は快晴の眞晝時で水はあたりの新緑を深く映して、一面に青く光つてゐたから——。

この頃若者は、白い川のあたりから、町に入るまでの間、御者臺に首垂れて本を読み續けることにした。タイキは道に好く慣れてゐたし、出遇ふ者のある筈もなかつたから別段手綱を執



る要もないのである。馬は間違ひなく、それで、町へ着くのである。若し若者が全くまどろんでゐたとしても――。

38

……「俺は昨夜不思議な夢を見たよ。お前が今俺におくつて呉れる次次の輝かしい言葉に答へる俺の悦びの返事を、俺はすっかり昨夜の夢でそらんじた。だから、萬一俺が今お前に答へる言葉が、お前にとつて不満であつたにしても、どうか悪く思はないでお呉れよ、ロータス！」

「お前が若し、妾の言葉に對して一切の沈黙を守つてゐようとも、妾の心はあらゆる輝かしさに満ち溢れてゐるから、この上もう、何んな言葉も要らない。勇ましい姿のアハヴよ。橄欖の冠は必ず汝の頭上に落ちるだらう、ゼウスにかけて妾は疑はぬ。」

若者は、白い川のほとりを進みながら、こんな言葉を聲をあげて朗讀した。遠い昔、ギリシヤのこと、パンアテナイア祭の戦車競技に出陣する勇士とその戀人の物語である。

若者は、一行讀んでは書物を胸に抱き、空を仰いで恍惚とした。白い川のせせらぎの音が、群集のさわめきでもあるかのやうに颯爽と若者の耳に傳はつた。

若者の腦裡では、アハヴが自分となり、ロータスが鍛冶屋の娘に變つたりした。

「アハヴは腰の劍を抜き放つと、天をさして高唱した――ロータスよ、別れた！」

ロータスは戀人の劍をとつて、薔薇の枝を剪つた！そして、譽れに輝く勇士の鎖かたびらの胸に真紅の薔薇をさして、云つた。――發ち給へ、道道にこの花片を撒きたまへ、妾はそれを一つづつ拾うてお前の戦勝を祈らなければならない！夢にも後を振りむくことなしに、この瑠璃色の朝陽を衝いて、さあ、一散に發ちたまへ……」

若者は、震へ聲で朗讀した。若者は、思はず御者臺に立ちあがつて、空に向つて拳を振つた。「一散に――行け、行け、行け！」

若者は、パンアテナイア祭の戦車競技に選ばれた幸福な、そして悲愴なアハヴの心を心としてしまった。――ほのほのと明け放れた朝霧の中で、若者のタイキは花花しい嘶きを擧げて快走した。

そのまま鍛冶屋の前を駆け抜けてしまふ決心だつたら、

「寄つてつて頂戴！」

39



娘がタイキの轡をとつた。ロークスを、いつか若者はこの娘に扮装させて、幸福な騎士にしてゐた自分から、不意に醒めてドギマギしてしまつた。若者は、眞赤になつて、

「早起きだね！」

と、無愛想に云つた。

「早起きだつて？ あたしが——。毎朝毎朝お前の車を通る時に起きてゐるのは吾家と、水車屋さんの二軒にきまつてゐるのを知つてゐるくせに……。何を空とぼけたことを云つてゐるのさ。」

「いや、それは間違へたか！」

若者はソフト帽の前をおろしながら云つた。

「でもね。今朝は少々お願ひがあるのよ。ミヤツ村が今日からお祭りで、招ばれてゐるのよ。途中まで乗せてって貰はうと思つて待つてゐたの——」

「待つてゐる間に、まあ一杯！ こいつを一つ仕上げて置かないと義理の悪いことがあるんで

——」

娘の父親はジョッキの酒を若者にすすめた。娘と父親は槌をとつて馬蹄を打つた。朝から晩まで槌を打つ仕事に勵んでゐる父と娘だつたが、若者は彼等の仕事を足をとめて眺めたのは今朝がはじめてだつた。

カーキ色のシャツの袖をまくしあけて、唇をしつかりと引き結んだ娘は、早朝から一杯機嫌の父親が、槌に合せて、飄逸な掛聲で音頭をとつても、眉一つ動かすことなしに、夢中で重い合槌を打ち續けた。娘の額からは玉の汗が流れた。

「手傳はうか？」

と若者は云つた。

「素人には——」

娘は耳もかさなかつた。

娘の槌が降りる毎に綺麗な火花が飛び散るのを若者は、胸が一杯になるやうな想ひで眺めた。

明る過ぎる街道



娘が他所行の着物に着換へて、赤い帯を締めて仕事場に現れて来た時には若者は、ジョッキの酒を皆な空にしてゐた。若者は、酒を口にしたことは殆ど験しかなかったが、綺麗な仕事を眺めてゐるうちに奇態な有頂天を覚えて、うかうかと飲み盡してしまつたのに氣づいて吾ながら吃驚りした。

「ちや出掛けようか——」

若者はさう呟いて立ちあがつて見ると、頭が風船のやうに軽くフワフワとして、何だか酷く愉快な氣がした。

「ちよいと待つて——。これから、此處で御飯を食べるのよ。」

娘は仕事場の火床に鍋をかけた。

「その間、お父さんと一緒にもう少しお酒を飲みながら待つて頂戴！」

三人は火床を取り巻いて腰をかけた。

「今日は市場の歸りにミヤツに寄らねえかね。あつしもお午時分には行つてるから。——この娘が踊り舞臺に出るのを見てやつて呉れないかな——」

「黙つてゐようと思つたのに——」

と娘は、箸で父親を打つ眞似をした。「黙つてゐて、見せようと思つてゐたんだつてえのに、

おしやべりなお父さんだな！」

若者は得體の知れない嫉妬を覺えた。

「それは是非今日は、歸りに寄せて貰はう——それは黙つてゐられれば勿論解る筈はないだらうな。」

「眞ッ黒なのが、眞ッ白になるんだからな——。」などと父親が、からかつたりしたが娘は、知らん顔をして頻りに飯を喰つた。

「お漬物が足りなくなつてしまつたけれど出して來るのが面倒だな！」

「生でも好いかい？」

若者は、外の馬車を指さして娘に云つた。

「生で好かつたら何でもあるぜ」

「キヤベツをむしつて、ソースをかけて喰べようか——。」



「キヤベツなら素晴らしいのがある！」

若者は車に駆け寄つた。

「そうら斯んなのが！」

「それ、一ついくらのなの？」

「戯談ぢやない」

「いいえ……。キヤベツのお土産ぢや具合が悪いかしら！」

「いや、や——」

と若者は慌てて手を振つた。「お土産なら果物がいろいろある。あげるよあげるよ！」

「ちや、何でも澤山頂戴——。あとで車に乗つてからで好いわ。」

若者は無暗に嬉しかつた。

「ね、そのかはり、今度、タイキの馬蹄をあたしがつくつてやるわ。」

「そいつは好いな！」

と若者は頓狂な聲で叫んだ。

——若者は、自分も鍛冶屋になることを空想した。自分が、あの父親の場所に坐つて娘を相手に仕事をする場面などを空想した。さうかと思ふと、毎朝毎朝御者臺に娘と竝んで市場へ通ふ光景を想つたりした。だが、娘が居なくなるとあの父親はたつたひとりぼつちになつてしまふのだ、そしたらどんなに寂しいことだらう、鍛冶屋も止めてしまはなければなるまい、これはどうしても自分が鍛冶屋になるより他に道がないといふものか……

何を馬鹿な！ と若者は不圖胸のうちで呟いた。「馬鹿なことを思つてゐる！ 酒に酔ふと斯んなものかしら……」

若者は妄想を退けようとしたが、それからそれへ花やかな雲のやうな繰言がむくむくとわきあがつて来て、おさへきれさうもなかつた。そして、凝つと腕組をして息を殺して見ると、小屋全體が徐ろに揺れて、宙に浮びあがつて行く通りに思はれた。——どんなに揺れても、火のまはりで談笑してゐる三人が、ありのままの姿でくつろいでゐるのが、馬鹿に奇妙だつた。

若者は、氣が遠くなりさうだつた。——どうして好いのか？ 何をどうして好いのか？……斯う心持が、にぎやかで、面白く、そして、胸が激しく鳴るのは、面白さからでもないやうな



——悲し氣な心地がしたり何かして、このまま凝つとし續けたら昏倒でもしてしまひさうな不安に襲はれたりした。

「お前さんは強い。これだけ飲んでもビクともしないのは、さすがに若い者だな——ミヤツでひとつ今晚は大振舞ひをやらうぢやないかね。」

「……強いのか——」

弱いのか？ 自分には解らない——若者は云はうとしたが、弱い！ と云ふのも何だか具合が悪いやうな、また、強い！ などと云ふのも自慢見たいな！ それから、酒飲みのやうに思はれたりするのも口惜しい見たいな！……いろいろと若者は、止め度もない氣おくれがしたりして、焦れたかつた。

若者は、激しく頭を振つた。——白い川が現れた。娘と自分が御者臺に竝んで堤を進んでゐた。……ミルク色の朝霧の中で若者は娘に××した、五體が忽ち底なしの硝子管見たいなものの中を急轉直下して行くかのやうな怖ろしく甘い寒さに縮みあがつた。

「アハヴは腰の劔を抜き放つと、天を指して高唱した。——ロータスよ、別れだ！」

「え？ 何うしたの——」

と娘が眼を視張つた。口のうちに呟いたつもりだつたが、口に出たのか？ と若者は氣づいたが、アハヴとロータスの別離の場面がまさまさと眼の先に展開しはじめて、若者はただ呆然としてゐた。

「ああ、さう、読んでゐる本なの？ 面白い？ 途中で話して！」

娘はバスケットをさげて立ちあがつた。

「ぢや、頼みますわ。」

二人が御者臺に竝ぶと父親はタイキの轡を離した。

いつか日は高くあがつて、飽くまでも明るく眞ツ直ぐな街道が水水しく光つてゐた。遙かの手前にある橋は云ふまでもなく、その先の小山の麓の村から立ちのぼる細い煙までが、其の煙りのやうに青い空に消えてゆくのが手にとるやうに見渡された。見透す限りに一直線の街道でその對角線を中心を目差して進んで行くと、誰でも、ちよつと物狂ほし氣に爽快な滑走！ を誘はれる——そんな、見事な一直線の街道である。



「ぢやお父さん、先へ行つてゐるわよ。お父さんが出かける時分には乗合が通るわね、あれでさらつしやい。」

娘は父親を振り向いて手を振つた。

若者は、パンアテナイア祭の物語を何んな風に話して娘を悦ばさうか知らと思つてゐた。娘に素晴らしい果物籠をつくつてやらなければならぬ！と思つてゐた。

「道道にこの花片を撒きたまへ。……夢にも後を振りむくことなしに、この琉璃色の朝陽を衝して、さあ、一散に發ちたまへ。」

若者は、語誦した。

「あの本の話をして——」

「アハヴは——」

と云つただけで若者は喉が塞つた。そして吾知らサタイキに鞭をあてた。タイキは一散に駈け出した。

「アハヴは不幸だ。俺は何處までも一人だな……。祭りへ行くのだ、パンアテナイアの祭りへ

！

若者は夢中で叫んで唇を鳴し、空に朗らかな鞭を鳴した。

「ああッ、速い面白いな——」

と娘は若者の腕をつかんで叫んだ。

「面白い？ そんなら明日から、毎日あの白い川のほとりを——。あの堤の夜明け時なら」

若者は、もう少しでそんなことを云つてしまふところだつた。若者は、陽を餘りにまぶしく感じて、更に物物しく鞭を振つた。

「おーい。キャベツがごろごろ轉げ落ちてるよう。待つて呉れ待つて呉れ！」

軒先で見送つてゐた父親は、突然大聲で叫んだが、應へがないので、同じことを絶叫しながら一目散に追跡した。



昔の歌留多



三月もかかると云はれてゐる病院へ瀧は、毎日、日暮時に通つてゐた。——今度こそは彼は、之を堅く決行し通さうと念じてゐた。こんなことをきつかけにしなければ、長い様な生活上の悪習慣から逃れる術がないことを知つた。様な悪習慣は、彼が命をかけて目當としてゐる仕事までを相當の深さまで踏みにぢつてゐた。仕事に對する情熱は、形ちなく見えすいてゐる垣の彼方で、徒らに激しく炎えてゐるばかりだつた。

彼は、あらゆる攝生に没頭しながら、規則正しい病院通ひを、やがて一ト月近く續けて來た。雨の日などには彼は、裾をからげ、長靴を穿いて怠ることなしに通つてゐた。感興と氣分本位の仕事を持つてゐる彼にとつて、それは酷く煩忙な日課であつた。

飲酒の習慣を退ける努力も彼にとつては、厄介な克己心が必要だつた。だから彼は、日暮時が近づいて酒の誘惑を感じ始めるやいなや、慌てて病院へ向ふのであつた。



彼は、自分の勉強の爲もあつて、妻達とも別居してゐた。——斯んなに忠實に病ひの爲に意を用ひてゐれば、間もなく全快するに相違ないと醫員から賞讃された。

彼は、波の音を耳にしながら、連夜、夜を徹して机の前に坐つてゐた。ただ坐つてゐるだけだつた。——彼は、ただ日増に増長して来る健康者らしい非精神的な欲望のみに面接して飽くまでも戦ひを挑んでゐるだけの自分に氣づいて幻滅を感じながら、スパルタ的に坐り續けてゐるだけだつた。彼は、思はず唇を噛んで腕を組むことがあつた。惱まし氣に首を振つて、居住ひを正すことがあつた。支那料理の夢を見ることがあつた。——健康が計らずも己れの眼近かに近附いてゐることを知つて、胸を張つた。

だが、今度こそは、意を通して見せる——彼は、思はずさう聲をあげて呟くこともあつた。病ひの爲ばかりでなしに、精神上の爲に、此處で斯ういふ忍従に堪えることが自分にとつては様様な意味で必要だ、と彼は思つてゐた。

「さつぱり仕事がかどらないね、毎晩何をしてゐるの？」時時遊びに来るBが、或晩彼の机の上の白紙を眺めながら云つた。Bより他に彼には此處に友達はなかつた。

「ただ、斯うしてゐるだけだよ。」と彼は、蛙のやうに凝つと無表情で相手を睨めた。

「偉いね。」

「……………」瀧は、胸のうちで點頭いた。

「何の餘技もないんだね、君は？」

「ああ。」

「酒を飲まないと君は、話がないんだね。」

「さういふわけでもないが……………」

「何だか、氣の毒な……………置物見たいな。」

「……………何か、氣晴しになるやうな、遊びを求めてはゐるよ、だけど、こんな氣になつたことがないんで、さつぱり見當がつかないんだ。」

「飲酒家の悲しみかね……………。當分勉強は休んで、病院通ひだけを専念にした方が……………」

「さうだ。」と彼は、窓の外に眼を投げて、何となく耻らふやうに呟いた。

「病院の歸りに毎日俺の處に廻らないか？」



「だつて君は酒を！」

「吾家では此頃麻雀が盛んだぜ。」

「俺、見たこともない。面白いかな？」

「彼等の熱中してゐるところを見るとね。」

次の晩彼は、Bの家に寄つてBの妹のF子から、麻雀の遊び法を、他の者が迷惑さうな顔を  
示した程丹念に説明されたが、どうしても覚えられなかつた。

「駄目よ、吾家の人は……」と瀧の妻は、何に限らずさういふ方面の能力に彼が全く缺けてゐ  
ることを輕蔑的な語調で皆に告げた。

「お前は何時の間にか覺えてしまつたんだね。」と瀧は、羨ましさうに妻に呼びかけた。

「周子さんは、とても——。」とF子が云つた。F子の話に依ると彼の妻は、一回説明を聞いた  
だけで、直ぐに呑み込んで、二十日ばかりも前からすっかりこれに熱中して、何時もそんなに  
負けたことすらないといふことだつた。瀧は、不思議な氣がした。妻にそのやうな興味も才能  
もあることを彼は今迄全く知らなかつた。そして彼は、悪い心地はしなかつた。

「折角、S——ちゃんが。」とBは、瀧を稱んだ。「折角来たんだから、ちや今日は麻雀は止さな  
いか。何か……？」

瀧は、堅くなつて煙草を喫してゐた。彼は、口のうちに、いや關はないよ、君等はそれをや  
り給へな——といふやうなことを呟いてゐた。彼は、變に心細かつた。隣村のあの部屋に獨り  
で坐つてゐると、何方が増しか知ら？ などと思つた。思へば、何方も堪え難い氣がした。

まつたく彼は、當分の間は何かの遊びごとにも屈托しなければ、これから二ヶ月あまりも續  
けなければならぬ初夏へかけての期間が、重く思はれた。彼は、何事にも興味さへ感ずれ  
ば或る程度まで凡てを忘れて熱申し得られる性質を持つてゐることを知つてゐた。

「何んなことが好き？」F子が訊ねた。

F子は周子と幾つ齡が違つたか知ら、二つ位下だつたか知ら？ 彼は、眼近くF子の顔を  
見ながら、そんなことを思つた。

「それが解つてゐる位なら瀧は安らかなものさ。」Bは彼の方を向いて「ね、さうだらう。」な  
どと云つた。瀧は、話したこともないのにBが好くそんな氣遣ひが出来たものだ——さう思ふ



と、ひとりで顔が赤くなつた。

「……うむ。」

「普段でも飲まない時は、それあ愚圖よ、氣の毒なほど——。周子は、遊び道具の牌を手の平に轉がしてゐた。

「何か喰べる？」手持ぶさたにF子が訊ねたりした。

「何も——。」と瀧は、首を振つた。

しばらく間をおいてF子は、何となく眼を視張つて微笑した。「小説以外のことは何にも興味がないの。」

「……。」瀧は、息詰つた。

「結構だわね。」

「どうだか！」と周子がつまらなさうに嘲つた。

「F子——。」とBがたしなめた。「變なことを、あんまり喋舌るなよ。」

「だつて……。」

さう云つてF子は、突然笑ひ出した。瀧にはわけが解らなかつた。瀧は、美しい妹を持つてゐるBを今更のやうに羨ましく思つたりした。

「だつて……あたし、何だか急に可笑しくなつて來たわ。」F子は、自分だけに湧きあがつた笑ひを、どうすることも出來なくなつて、肚を抱へながら廊下へ逃げて行つた。

「變な奴だなア。」Bは、廊下に向つて佛頂面をした。

「どうしたの？ F子さん！」

「あれはね。」Bの酒の爛をしてゐたB達の母が、仕方ない微笑を浮かべながら説明した。「あれはね、どうかして不意に笑ひ出すと、獨りでさんざ笑つてしまはないと收まらない妙な癖があるのよ。傍の者は恰で狐につままれたやうにボンヤリしてしまふ。」

F子は、障子の蔭で獨りでゲラゲラと笑つてゐた。

「毎日相當の道程を歩くんで仲仲足勞れる、何だか眠くなつて來たやうだ。」何も自分がF子の笑ひの的となつてゐるわけでもあるまいが瀧は、皆ながF子の笑ひの止まるのを待つてゐるやうに顔を見合せてゐる見たいなのが、變で、此方だけの話題を提供するやうなつもりで、事更



にはつきりと呟いた。そして、横になつて肘を枕にした。

「歩くのは悪くはないの？」周子は、低く彼に訊ねた。

「駆けたり何かしなければ、悪いこともないだらう。」

「急に、あなたは攝生家になつたのね、でも結構だわよ。」

「關はないから、それをお始めよ、俺、今日は先に歸らないで此處で見ているから。」

「歸つたつて關はないわよ、どうせ道が違ふんぢやないの。始めれば、とても遅くなるわよ。」

「トランプなら出来るんでせう。」Bの母が氣の毒さうに瀧に訊ねた。

「トランプなんて、あたし厭よ。」

、そのうちに漸く笑ひが収まつたF子が座に戻つた。F子は、なるべく瀧の方を見ないやうに努めてゐるらしかつた。瀧は、F子の笑ひは俺に關聯してゐたのか知ら、などと軽い不安を感じた。——間もなく彼女等は、車座になつて、熱心な勝負を争ひ始めた。瀧は、彼等が慣れた口調で切りに合言葉めいた術語を放つてゐるのに物珍らしく耳を傾けてゐた。殊に周子が、眼を輝かせて白白しく珍しい合言葉を口にしてゐるのを傍見してゐると、何だか自分の妻では

ないやうな、そして彼女に、妙に新鮮な感じを持つた。彼女は、傍眼もふらずに牌を動かしてゐた。彼は、周子の舉動を凝つと眺めてゐた。それは自分に何の關はりもない何處かの娘のやうに映つた。さうかと思ふと彼は、自分ながらその刹那に一寸自分の頭に驚いた。彼は彼女の忘我的な姿が憾めしいやうな、不氣味な思ひに打たれたりした。——夜になつたら毎晩此處に來ようか知ら、斯んなに賑かなのなら——彼は、さう思ふと眼先きが明るくなつたやうな氣がした。

BとF子も外へ出ると云つたが瀧は、もう遅いからと切りに斷つて、周子と伴れ立つてBの家を出た。月夜だつた。

「少し散歩しようか。」と彼は、何となく怖る怖る妻に云ひ寄つた。

「厭アよう、斯んなに遅く——。」

「春らしい好い晩ぢやないか、お堀端の櫻は満開だよ。」

「あたし、またF子さんの處へ引き返すのよ、ほんのその邊までよ、でないと一人で歸るのが怖くなるわ。」



「僕が、またBの門口まで送つてやるよ。」

「何云つてんのさ、馬鹿馬鹿しい。——あんたが、怖いのよ。」

「僕は、散歩は好きなんだよ、お前は知らないのかしら？」

「さつさつとお歸んなさいよ、病人の癖に。」

彼女は、彼の肩先を指で突いた。

「うむ。——」

「ちや、さよなら。」

「さよなら。」と瀧も云つた。そして彼は、ムンズと彼女の手を握らうとした。

「變な人ね、止しなさいよッ。」

周子は、振り切つて、笑ひながら馳けて行つた。瀧の胸は、異様に激しくときめいてゐた。

彼は、バタバタとなる草履の音がBの家の玄關に消えるまで耳をそばだててゐた。

瀧は、翌日病院の歸りにBの家に立ち寄つた。一日の仕事を終へたBは、これから晩飯に取りかからうとしてゐる處なんだが、家中の者が悉く留守で張合抜けがしてゐるところなんだと

云つた。

「留守！」

「連中は——」とBは、何となく大げさに云つた。「今日は君の家で麻雀會だよ、どうもああ熱中されても困るな、若者達！」

「行つて見ようか。」

「君は、また退屈するだらう。」

瀧は、自分も何かさうした餘技が欲しい、皆と一處に打ち興ぜられる何か無いかしら、もう凝つと獨りで夜を更すことは堪へられなくなつた、仕事の構想に耽ることも出来ない——

「B——考へて呉れ。」と、悲しさうに性急に述べた。

「はやく健康になつて酒が飲めるやうになるより他になささうだね。」

「健康なんて——」と瀧は、投げやりな口調でほき出した。

「もう君は懲りたらう、いつだつたかね、周子さんが酷い病氣になつたのは？」

「二三年前だらう、もう！」



「結婚してもう何年もたつんだらうが、君は家庭で一度も今度のやうな機会に出遇つたことはないのか？ 君が酒を飲まないで、何か皆で一處になつて遊びをするといふやうな！」  
「別別に住んだのはこれが初めてか知ら？」

Bの間には答へないで瀧は、そんな一人言を泌泌と呟いた。世俗に云はれてゐる、結婚者が或る期間の後に大概倦怠を感じるといふことだが、自分はそれを感じたことがないやうだ、と云つてその反對のものを持ち續けたといふのでもない……そして彼は、人と人は時間に伴つてのみ、ただそれが様様なかたちで現れるが故に目先きでは屢屢思ひ誤るが、親情を増して來るものらしい……そんなとりとめもないことを想つたりした。何も彼も過去のことか美しく眼先に光つた。この頃は、何か用があると、家の周子は、來ないで、手紙だよ。」

「不思議はないよ。——ちや、出かけようか。」

「止さうかしら……」瀧の口調は、戀をしてゐる若者のやうにねちねちとしてゐた。

Bは、盃を音をたてて卓子に置くと、わざとらしくがつくりした。「嫌ひだよ、ムツツリは！何云つてやがるんだい。」

「俺も酔ふと、そんな風か知ら、何だか厭な氣がする。」

「何云つてやがるんだい。——病院は一體何時までかかるんだい！」

「……通ひは、とても大變だ。近いうちに入院でも仕様かと思つてゐる。」その方が好い……と瀧は、四五日前から思つてゐたのであつた。

「氣取つてやがら！」などとBは叫んだ。

出掛けて行つて見ると「連中」は手合せの眞ツ最中だつた。Bと瀧が入つて行つても見向かうとする者もなかつた。瀧の母がひとりで隣りの部屋で茶の仕度をしてゐた。Bは「連中」に加はるんだと云つてゐながら、暫く其處で手酌で飲んでゐるうちに、横になつて眠つてしまつた。

「この頃でも矢ツ張り夜と晝とあべこべ？」

「ええ。瀧は、その話を轉じて、

「阿母さんはやらないの？」と、隣りの部屋を指して訊ねた。

「あたしには、どうも——それに若い者の中に混るのは……」と母は、薄ら笑ひながら否定した。



「お前は？」

「私も——」と瀧は、寂しさうに點頭いた。

「あたしには歌留多より他に出来ない。」

「それも、昔の——でせう。」

「さう。」

「あれなら私も少しは取れた。私も、歌留多と云つてもあれより他は知らない。」

「子供の時分だつたね。さうかね、大きくなつてからはやつたことはなかつたかね。」

「この頃は、それに、あんな歌留多會なんてありはしないでせう。」

「さうかしら？」と母は、驚いてゐた。そんな歌留多會があるか無いか？ 瀧だつて知りなしなかつた。

「連中」が一休みした時に彼は、F子と周子にそんな歌留多會のことを訊ねた。誰も知らないとなつた。

「あの方が麻雀よりも好いな。瀧は、負け惜しみらしく呟いた。若し賛成する者があつたら彼は、今の季節でも關はず直ぐにも歌留多の製作に取りかかつてもいいと思つてゐた程だつた。

「歌留多と麻雀と比べたつて仕方がない。」

「今、歌留多は出来ないよ。」と母も口添えしたが、瀧の思ひなしか何となく母の語調は生生と響いた。

「いいえ、ただ話だけなんだけれど……」

「百人首ならあたし好きよ、買つてくれればやつても好いわ。」F子だか周子だかが、瀧を思ひ遣るやうに云つた。

だが、彼や母の歌留多は買った札ではなかつた。悉く自家製のものだつた。秋の初め頃から閑な夜を選んで、何處の家でも、蟲の聲を聴きながら歌留多つくりを夜を更した。これが正月の最初の用意だつた。板目紙を札の形になつて、茶色の薬袋紙で裏打ちをした。それを二三枚宛、丹念に鹽煎餅をあぶるやうに遠火で乾した。それに、若い女が凝つた筆法で筆を揮ふのが常習だつた。三枚五枚宛夜毎に札の増えて行くのを瀧は、そろへた記憶がある。「読み」と「取り」が夫夫二組出来あがるまでには冬になるのであつた。



正月になると所所に連夜の歌留多會が開かれた。夫々の家の札が、筆法が悉くまちまちなので（それが巧みに、解り難く、崩してあればある程感嘆された）、當分の間は、歌留多會とは云ふものの文字の觀賞會に等しいものであつた。

「まア、しづところなく——は、それだつたんですか、これぢや一寸と解りませんね、斯う崩されたんでは！」

持札を抜かれた人は改めてその札を手にとると泌泌と首を傾けて自分が負けたことも打ち忘れて、筆蹟ばかりをそんな風に感嘆するのである。「何とまア見事な！」

「なるほどね！」別の者もそれを覗いた。そしてその家の主人公に得意を覚えさせるのが一應の禮だつたらしい。だからそれを書く場合の若い女の懸命さと云つたらなかつた。

一つ一つ札を取りあげてそんな風に吟味してゐるのだから二回位の接戦で夜が更けてしまふ。そして必ず主人側が勝を得るのに決つてゐた。「歌の會」のやうに靜かだつた。

さうした會合が順次の家家で七草の日まで続く。——だが、七草が過ぎて各家の札の筆法を悉くの選手達が呑み込んでからの決戦は凄じかつた。全く、前日迄のとは反對の會合が順次の

家家を繰り返して行くのである。

ただ指で差しただけでは取つたことにはならない、他人が先に壓えた札でも後の者が力づくで奪ひ取れば、その人の勝になる、選手達はキヤツキヤツ野蠻な悲鳴をあげて、一枚の札のフンだくり合ひをするのであつた。アハヤ己れの手に歸さうとした札を後の者がねちくりとつた。

素早く札を握つて埒外に飛びのかなければ完全に己れの札とはならないのである。「キヤツ！」

酷い爪だ！」「口惜しい口惜しい、それア妾んですわよう！」「痛ッ、鼻をやられた、見かけに寄らず怖ろしい力のこもつた拳固だつたぞ、あれア誰だ！」「アラア！ 髪の毛が！ 誰さ羽織なんて着てゐるのは！」

「それア狹いわよ、馬鹿ア！」

格闘に等しい騒ぎで夜を更かした。瀧は、他所へは連れて行かれたことはなかつたが、そして年寄や子供は吾家の場合でも仲間には入れなかつたが、とても騒騒しくて眠れるわけがない

——だから、その光景は今でもまざまざと覚えてゐる。

札が、もうヨレヨレになり、文字も微かにすり切れてしまふ頃の歌留多會が最も若い選手達



の胸を踊らせたらしい。正月の終りの時分になると、大抵の札はつき目がついて、布のやうな手觸りになる、掴むと綿のやうに手の平にかくれてしまふ、業業しく手の甲に繻帯を巻いた娘や鼻側に絆創膏を貼つた男などが大手を振つて繰り込んで来た。

「さうかね、此頃はやらないのかね。」

「阿母さんは年寄だから、あつても仲間には入れませんね。」などと瀧は云つた。

「あたしはまた若い人は今でも、あるんだと思つてゐたわ。」

「あれは、面白さうだな！」瀧は、うつとりと眼を擧げて呟いた。子供の時に傍觀した以來、彼は、今までそんな歌留多會のことは忘れてゐた。學生時分は、どんな遊びをしたかしらなどと思つた。——彼は、今、此處に集つてゐる女達に混つて、ああいふ歌留多會を演じたら、今の自分の場合、さぞ胸がすくことだらう、面白だらうな！ などと思つた。

F子も周子も、そしてF子の友達も、それには何の興味も覺えないらしがつた。瀧は、自分の説明の仕方が拙いからかしら、などとも思つた。

「誰かに手傳つて貰つて、これから毎晩俺は、あれを慥へようかしら。」そんなことを呟いて見

たが彼は、とてもそんな餘裕はない、そして彼の言葉ばかりが酷く荒唐無稽な感じで、傍の者に響いてゐるばかりだつた。彼の眼の先には、あの昔の男女達が入り亂れて札の奪ひ合はしてゐる光景が、望遠鏡の視度を合してゐる時のやうに遠のいたり近寄り過ぎたりしながら、切なく甘く、チラチラとしてゐた。「F子さんか誰かに書いて貰はうぢやないか。」

「だから昔の人達は誰れでもあんな風な字が巧いのね、あたし達讀めもしないわ。」

「俺だつて好くは讀めないが——。」

「ぢや駄目ぢやないの。それにしても大變な歌留多會だわ、ね厭アね……昔のこの邊の野武士とかの名残りか知ら。」

母は、一寸と苦い顔をした。

一休み済むと「連中」は、再び麻雀にとりかかつた。瀧の母は先に寝んだ。

夜が更けて行つた。瀧は、Bの傍に寝轉んでゐたが、悪く頭が冴えてならなかつた。

牌の觸れ合ふ、それは撞球の音にも似てゐるが、（瀧には名状し難い！）もつと微微たる、囁きのやうな音が苛苛しくもあり羽毛の先で擦られるやうでもあり薄ら甘く頭にひびいた。



靜かに頭をあげて見ると、彼等は青白く眼を視張つて、病人のやうに殺氣だつてゐた。そのくせ靜寂な春の夜の雰圍氣が燈火の下だけにどんよりと漂つてゐる。彼等が呟く合言葉も宵のうちとは響きが違つて、牌の囁きにもつれるやうに、それで變に鋭く金屬的にひびく。男の聲と女の聲がはつきりと判別される。——凄慘な氣が漂つてゐる。如何にも惡事に没頭してゐるかのやうだ。祕かである。

瀧の胸にも彼等の呼吸が不氣味で凝つと廢たい的な快感になつて通つて來た。彼は、何となく息を殺さずには居られなかつた。嫉妬の眼で女の姿を眺めもした。……あんな昔の歌留多會の話などが彼等にとつては一笑にも價しないであらう……といふやうなことが漸く瀧にも無言のうち解つて來た。そして彼も、陶醉を感じた。

夜が明けてしまつた。「連中」の顔色は悉く青ざめてゐた。口をきくのも懶さうだつた。

瀧も、自身が競技者であつたかのやうな酷い疲労を感じた。彼は、隅の方で今迄眼を視張つてゐたといふ事を彼女等に知られるのが耻らはれて眠つてゐる振りをしてゐたが、不健全な飽滿が陰陰と餘韻をひいてゐて惱ましかつた——「連中」はこの次の會合をひそひそと約してゐた。

### 變裝綺譚



一  
圖書館を出て来たところであつた、ただひとりの私は——。脚どりが、とてもふわふわしてゐるのを吾ながら、はつきりと感じてゐたが、頭の中に繰り擴げられて行く夢の境と、今、其處に足が觸れてゐる目の前の風景とが難なく調和してゐるので、面白氣に平氣で歩いてゐた。

あわただしく目眩しい街であつた。眞夏の日暮時であつた。濤のやうな——騒音が絶え間なく渦卷いてゐる賑やかな大きな四ツ角であつた。音響の一つ一つに注意すれば、自動車の警笛であり、電車の轍の音であり、建築場から響いて来るクレエンの響きであり、人の會話であり、レストランのオーケストラであり——と何も彼も立所に識別出来るのではあるが、別の想ひに耽つてゐる者の耳には、無限に轟轟たる濤の響きのやうであつた。汽車の窓に頬杖を突いて、たつた今出發して来た都の賑やかな風景を、彼方の肅條たる山の上に回想してゐる時に聞く列車の轍の音の適應性にも似た、圓やかな音響が巷に溢れてゐた。轍の音や、深夜に聽く時計



の音に伴れて、何でも關はず歌つたり饒舌つたりしてゐると、あの音響のリズムは忽ち歌になり、言葉になり、話相手になりして自由であることを私は屢屢經驗するが、この巷の混然たる絶間なき響きも、憂への日には吾を憂へ、悦びの日には躍動を、勝手氣儘に節づけることは自由であらう——などと私は、何といふこともなしに、自信あり氣な思ひに打たれてゐた。

私は車道の片端にある瓦斯燈の柱に凭りかかつて、腕を組み、ぼんやりと眼をかすめて、美しい洪水のやうな往來の有様を熱心に眺めてゐた。——一日の務めを終へて、いそいそと歸路を急いで行く人達、夕食後の散歩に手を携へて出かけて來た戀人同志、酒場へ行かう、酒場へ行かう！ と先を急いで行く若者達、いや俺はダンス・ホールへ行くのだ——と張り切つて行く者。

「酷い目に合つたよ。彼奴が、そんな悪人とは氣付かなかつた。」

「悲しみを知つてゐる悪人であるところが、慘めだな。」

ちよつと耳を澄すと、耳の傍らを寄切つて行く人人の切れ切れの言葉が、はつきり解るのである。

「憐れな男だ。一體彼奴は何に憧れてゐるんだらう。」

「虚妄と現實の境界線を見失つてまるで化物のやうな歩き振りをしてゐるぢやないか。」

聞くまい——と思ふと直ぐに消えてしまふ、面白いやうだ！ 私は、作曲家のやうに空を見あげてゐる。見る見るうちに黄昏の帷が深深と降りて行き、彼方の高樓の屋上、此方の店先軒先に青、赤、黄の萬花燈マンカウの光りが一齊に瞬きはじめてゐた。窓窓の擴聲ラッパは花やかな夜の開幕を告げる狂燥曲を放送しはじめてゐた。濤の音が忽ち壓倒されてしまふ。

萬有の精は吾が心のうちにあり

天地を流れ、吾が心を流れて

おお、この止め度なさ

君を抱きて吾狂せん——

街の音楽は十五世紀の理想家が歌つた戀歌を奏でてゐるかのやうである。試みに、口のうちに、あの長い歌詞の處處を口吟んで見ると、ぴつたりと街の音楽のリズムに合ふのが私は愉快であつた。



「あの唄は流行してゐるの？」

「雨の中で歌ふ——とかといふ、つい此頃出来たレヴユウの小唄でせう。」  
娘が斯んなことを話し合ひ、ラジオに合わせて私の知らない文句の歌を口吟みながら過ぎて行つた。

今の私の——とは似ても似つかぬ歌であるらしい。おやおや！ と私は思つた。で私は、もう一遍私の歌をうたつて見た。

愉快だ！ まさしく、街の音楽は私の歌の伴奏である。

太鼓の響きが聞えるだらう

唱歌の聲が聞えるだらう

新來の音楽隊か

否、否、君よ、驚く勿れ

裏山の沼のほとりの

蘆の中に群れつどふてゐる

五位鷺達の騒ぎだよ

.....

突然群集がワーツ！ と歓聲を擧げた。それに伴れて私も思はずその方角の天を仰いで見ると、素晴らしい花火が散つてゐるところであつた。——いつの間にか私の眼の前は物凄い群集であつた。花火のあがる空の下を指してゐるのだ。無数の自動車が行手を塞がれて街一杯にふれてゐた。そして、合間を置いては堰が切れてドツとばかりに流れ出すのであつた。

「寶あり、青き焰の炎ゆるところに——」

群集はプロツケンの迷信を遵奉してゐる夢想家であつた。プロツケンの山麓を目ざして群れ集ふて行く長蛇である。——私は圖書館の圓天井の下での十六世紀の空中樓閣に、ありのままに迷ひ込んでしまつた。

馬車、馬車、馬車——大河の流れの如く續いて止まぬ馬車の行列である。近衛兵にとりまかれた金色の馬車が通る。遙拜すると、白髪の鬘をつけたオベロン王が、白孔雀の扇を胸先に構へてゐるチタニア妃と巖かに同乗してゐる。金髪の卷毛の鬘をいただいた總理大臣が内務大臣



を相手に何事かを語らひながら靜靜と馬車をすすめて行く。長槍兵の一隊が青、赤、黄、色とりどりの三角旗を翻して隊伍堂堂と列を組んで行く。一團の太鼓隊の壯なる撥音に伴れて、輕騎兵の馬は朗らかな蹄の響きを舉げて節面白く行進して行く。

街を過ぎ野を往き丘を越え

吾等はい行くよ

青き火の炎ゆる祭りの山へ

.....

人の世の潮の流れ

嵐の雨、波に漂ひ

吹雪に目眩み

ああ、されど吾等は飛び交ふ

自由自在に

生と死と限り知られぬ海原に

天と地の定めも忘れ野の果に

驕つては飛んで行く

ただ知る、大神の御恵みの光り

.....

斯んな軍歌の合唱が擧つた。圓楯組の歩兵隊が、劍の先でその楯を叩いて調子を合せながら行進して來るのであつた。

すると、斯の軍歌に合せて街全體が巨大なサイレンのやうな唸りを擧げて、續く軍歌を合唱した。この、きらびやかな行列を取り圍む群集の和讃である。——合唱隊は見る間に街の彼方に行き過ぎて行つたが、その聲は津波のやうに何時までも空に反響してゐた。

空には、花火が碎けては散りしてゐた。

杖にすがつて歩みを運んで行く老哲學者がゐた。望遠鏡を鐵砲のやうに擔いで一心に空を眺めながら、ふらふらと歩いて行く天文學者も居た。シルクハットをあみだにかむつた不良青年が、長袴の裾をとつた戀人の腕を携へて、詩の講釋をしながら行き過ぎて行つた。



老若男女、限り知れぬ群集の流れであつた。そして、様様な、切れ切れの言葉が、何うかすると妙にはつきりと私の耳に聞えて來たりする。

……「圓楯組と角楯組が、今夜はブロッケン麓で戦車競技を行ふさうだが、君は何方の味方なんだい。」

……「それにしても、この人出ぢや、萬一青い火が炎を出しても發見されぬうちに踏み潰されてしまひはしなからうか。」

「地上で、毎晩毎晩斯んな風なドンチャン騒ぎを演じてゐたら、地の靈が好奇心を起して青い焰を噴き出しはしなからうか、といふのがこの祭りの主旨ださうだがね。」

「昨夜のページェントでは、悪魔と悪魔の格闘の場面がクライマックスだつたけれど、あれは一體何ういふ結末を吾吾に豫想さすための主題だつたのか知ら？」

「悪魔と悪魔でなければ、騒騒しい音響が出ないではないか、悪魔同志の罵り合ひを聞かせたら、さすがの地の靈も眠りをさまたげられて怒鳴り出すであらう——といふ。然し生物のうちで、永遠に憎み合ふてゐるといふのは互ひが悪魔であるといふことの證據ださうだね。」

「あの場面にオルフェスの竖琴を伴奏につかつたところは舞臺監督の奇智だつたな。」

「おお、フェス！ おお、フェス！——悪魔の格闘騒ぎで地の靈を呼び醒さうなんて、何とまあ怖しい謀みごとであらう。怖ろしい報いが來なければ好いが……俺の胸は震へて來た。あの空の無限の蔭黒さにおびえずには居られない。あの空に閃めき出る光りの亂舞は、とうの昔にクリステンダムセント・ジョウジに退治された筈の飛龍が再び生を得て、吾等に向つて毒氣を浴せかけてゐるかのやうだ。」

「フェス——だつて？ ああ、さうか、愛といふ言葉であつたかね、フェイス——健やかなる光り——か。何だい、馬鹿馬鹿しい、愛とか、光りとか、そんな言葉は俺達はとうの昔に忘れてしまつてゐるよ。働くことと、享樂と——それ以外には何んな餘裕もないんだからな。フェスとか、フェイスとか、そんなことを云つてゐられるのは神學校の學生か、でなければ貴族のお姫様位のものだらうよ。」

「君は呪はれてゐる僕は神學生でもなければ貴族でもない角楯組の最も貧しい一兵卒だ、——教會堂の天氣鶏の翼が未だ曉の露に沾うてゐる朝まだきに起き出でて、大隊長から小隊長まで



の楯と劍を磨いた後に、起床ラッパを吹き鳴らさなければならぬ身分の番兵だ。夜は夜で、降つても照つても、營舎の物見臺に突ツ立つて、何時何處に炎をあがるかも謀り知れない青い焰のために張り番をしてゐなければならぬ見張番だ。何うして僕が、これだけの勞役に堪へられるかといへば、兵士としての此上もない誇りを持つ他に、僕の胸を不斷に沾すフェイス光とフェス（愛）の爽爽しい羽ばたきを感じるからなのだ。」

いろいろな人が様様な話を交しながら十字路で、堰の切れるのを待つてゐた。私は、この角楯組の兵士の言葉に同感を覺えたので、

「おい、君、待つて呉れ——君の宛名を知らせて呉れ、君は俺の、容易に出來ない友達だ。」

と叫んで、行列を横断しようとする、急に車馬も群集も速やかに進み出したところであつた。私は腕をさし伸して彼を追はうとすると、

「馬鹿ツ、退れ——罰金だぞ。」

と突然、交通整理官に手酷い一喝を浴せられた。

「おーい。」

私は、ひるまず、ステッキの先に帽子を載せて高くさしあげた。

すると、二臺も三臺もの馬車が私を取り圍んで扉をあけた。

「お望み通りに小世界を見てから、おひおひと大世界の方へ参りませう。屹度あなたは非常な悦びと非常な利益を得て、その道すがら踊り出すに違ひありません。」

と御者の助手が言葉巧みに誘つた。

「やあ、何だか聞き覚えのあるやうな怖ろしい言葉だと思つたら——」

と私は二三歩後ろにたぢろぎながら、相手の顔をまじまじと打ち眺めて呟いた。「光りと愛を打ち消す者——メフィストフェレスの科白ぢやないか……だが、そんな洒落た科白で誘はれては此方も乗り込まずには居られないが——」

「そこで貴方も一つ科白の受け渡しを試みて見ませんか。」

「この髯面では仕方があるまい——といふ、あれだな、あれなら俺も思ひ出した。よし、では一番見得を切つて、唸り返してやらうよ、面白いぞ。」

と私は、まるで酔つ拂ひのやうに仰山に胸を擴げて、氣取つた音聲を發した。だが、この髯



面では仕方があるまい。僕は輕妙な社交術に長じて居らぬから今回の計畫はおそらく上首尾には行くまいと思ふのだ。人の前に出る段になると、無性に肩身が狭くなつて何うすることも出来なくなつてしまふのが僕の性質だからね。」

「そんな心配は無用ですよ。」

とメフィストの科白が続けられた。「處世の道なんでものは案ずるより生むが易いと云はるる通りですからね。あなたが、ただ強い自信だけを持つて平然としてゐれば宜しいですよ。」

「そいつは心得た。で、出立の方法は？」

「はい、この上衣を擴げさへすれば、それで宜しいのです。」

と助手は「馬車」の扉を更に大きく擴げ直して科白を續けた。——この上衣は私達を空中高く運んで呉れます。この大膽な旅行に重い荷物は一切御持参なさらぬがよろしいでせう。私が只今用意いたして居ります少しばかりの瓦斯が出来次第に私達は颯颯とこの地上を離れます。そして段段體が輕くなると益々迅速に飛行することが出来ます。さあ、新旅行の首途を祝しませう。」

私は、これらの科白の受け渡しがあまりに流暢に、恰も吾吾が日常の會話を取り交すごとく自由に運ばれたのに有頂天になり、座席に飛び込むと、今度は全くの自分の言葉であるにも拘はらず、思はず今迄通りの、氣取り込んだ重々しい聲色で、

「俺に懸念することなく、案内役の勝手氣儘に先づ最も愉快であらう小世界へ運んで呉れ。だが、この群集の列からは脱れて、出来るだけ速かに、あの花火の空とは反對の方角を目指して一散に飛行して呉れ——青い焰に背を向けよう。それッ、急げ急げ！」

と合圖した。

人通りの全く杜絶えてゐるかのやうな公園の森の中を、タキシードは砂煙りを擧げて疾走してゐた。

不圖助手が振り返つて（何といふ鋭い眼光を持つた青年だらう……と私は、その時はじめて彼の容貌に氣づいた。どうやらさつきの角楯組の兵士の横顔にも似てゐる。あの鋭い眼光はフェスに憧るる者の眼だ——と私は思つた）

「金貨は何枚位のお持ちですか？」



と尋ねた。今日私は、アゼンスの煽動政治に反旗を翻し、そしてソクラテス亞流の唯心哲學を嘲笑したアリストファーンエスの一作物——「亂雲」他一篇——の翻譯を三ヶ月がかりで脱稿したところで、一袋の金貨を所持してゐたから、そのままそれを彼の眼の先に差し示すと、彼は腕を伸して握手を求め、そして歌つた。

「木造りの食卓また酒を出し得べし

炯眼を放ちて自然を見よ

ここに奇蹟あり歌ふ勿れ」

で、私も歌つた。

「偽りの姿と言葉

想ひを變へ國を變へて

ここに現れよ、またかしこにも」

彼もまた更に折り返して歌つた。

「……………」

「迷妄よ、彼等の眼より覆面を去れ。」

私は、兎でもぶらさけてゐるやうに胸の先につまみあげてゐた金貨の袋が、床の上に滑り落ちたのも氣づかず、やつぱり袋をつまみあげてゐるままの腕のかたちをとつたまま、自分の歌ひ出さうとする歌に酔うた。さつき圓楯組の輕騎兵が歩調に合わせて歌つて來た軍歌に、私は自分の作に依る歌詞を調字づけて得意を覺えたところだったので、また私はあの軍歌の節で歌つた。

……………」

轉がせ轉がせこの樽を

夜告鳥にさそはれて

樽は酒樽、鯨飲み

飲んで歌つて目をあげば

手品使ひの檻の中

……………」



「おい運轉手俺は綺麗な女の顔が見たくなつた。そこで婦人に對する儀禮を重んじて、この髯面を何處ぞの美容院で、さつぱりと剃り落して來たいものだ。」

「春の微風ミカゼが頬を撫でるほどの感觸も覚えさせずに、たつた五分間でさつぱりお顔をこしらへる——といふ、手ツ取り早い理髮師を存じて居ます、私は——そこで、ロンバルヂイの椿油で御髮おんげを綺麗に分け込んで、オシリスの香りを含んだ香水を吹きかけられて、エヘンと一つ咳拂ひをしながら、その店を出て來れば、屋根裏住ひの鼻曲りの哲學者も忽ち變じてドン・ファンドンファンの仲間入りが叶ふといふ名看板の理髮師を存じて居ります。」

「そいつは何うも少少話が甘過ぎるね。まさかバーデンブルグの美容師ぢやあるまいね。」

註——一五〇〇年代の話であるから吾々のヨハン・ゲイテが戯曲ファウストの稿を起す凡そ二百年も前のことである。テレンブルグの醫學博士ウキールが「ファウストとの交遊」なる著に於て次のやうな挿話を傳へてゐる——ファウスト、魔術を亂用したる廉に依りてバーデンブルグの獄屋に投ぜられし時、蓬髮垢面の一教悔師に會ひたり。彼がファウストに述懐する處に

依ると、余は剃刀を用ひることが實に不得意で本意なくかかる面貌をしてゐるのだが、御身に何か好き知識はなきか——と。ファウスト、膝を打ちて、直ちに、剃刀を用ひずして髯を剃る方法を傳授したりき。教悔師は深く感謝して、ファウストに一壺の葡萄酒を贈り、加へてその罪を赦し獄屋より放ちたり。されど日を経るに従ひ牧師の面皮は次第に脱落し、終ひには肉までも失はれ、世にも淺はかなる面貌となりたり。追手を八方に放ちて怖るべきファウストを追跡したれど終に捕ふることを得ず。間もなく諸諸の國國に、面皮脱落病なる不思議なる疫病が流行し、巷の風に骸骨の頬を曝す市民が頻頻として續出するに至れり。この疫病を傳染せしむる者は奇體なる装ひをなし町から町へ渡り歩きつつある怪し氣な理髮師の仕業なり——といふことが判明したれども、理髮師の變装とその神出鬼没の出現は人力をもつては如何に爲すべき術も見あたらざりき。彼は巨大なる一葉の團扇に乗りて空中を飛行し、山を越え、海を越え、更に時代を飛び越えて、永遠にこの疫病を流行させん——と豪語せり。されど、この「剃刀を用ひずして髯を剃る術」とのみ云へば魔的に聞ゆれど、余の研究するところに依つて見ると、これは單に、液狀になしたる砒石の素を塗りつけるのみの至つて原始的な手段なりき。その他



に於ける彼の様様なる魔術も科學上の説明を加ふるなれば、凡そこの類ひのカラクリには相違なからんも、大方の諸賢は先づ世の化粧術師に對しては慎重なる注意を施すべきが肝要なり。彼の魔術師の子孫、何れの町に如何なる姿に身を變して潛み居るやもはかり知れざればなり。

## 二

「一體何を見てゐらつしやるの？——あたしの眼だけを凝つと見て……他のことなんて考へてゐては駄目ぢやありませんか……」

私に腕をとられて颯颯と踊りまはつてゐる綺麗なダンサーが踊りながら私の耳に囁やいた。

私は、口が利けなかつたので、片隅に誘ひ出して、窓に凭りかかつた。

「あたし、足でも踏まれやしないかしらと思つて、とてもひやひやしてゐたわよ。」

「失敬した。——どうも有りがたう。」

「何うなすつたの？ 何をぼんやりしてゐらつしやるの、變な眼つきばかりしてゐらつしやる

ぢやありませんか？」

「今朝、手紙を書かうとして、ペンを探すと……」

「あたしに手紙を書かうとお思ひになつたの？ え、——それで？」

「君ぢやない、田舎の友達なんだ。」

「……………」

「何てまあ景色の好い面白さうな田舎だらう、是非行きたい——と何時も君が云つてゐる田舎

……僕が其處の生活を歌つた詩を読んだ君の憧れになつてゐる——」

「伴れてつて下さる。嬉しい！ 何時？」

「あさつて——だよ。そんな靴ばかりを履き慣れてゐる君には、とてもあの山徑はのぼれないのだ。だから、ロシナンテと稱する僕等の名馬を——だね、停車場へ曳いて來て貰ふことを頼む手紙なんだ。」

「でも、あたし馬になんて乗れないわ、怖くつて——」

「何うしても馬車をつけるわけには行かないんだ、細い細い山徑を三哩も上らなければならな



「から。」

「……さうなると、また愉快ね。ちや思ひきつて乗るわ。」

「慣れるまでは誰かが轡をとつて呉れるから大丈夫さ。君の轡のとり合ひちや、とり手の志願者が殺倒して、一騒動が持ちあがるだらうよ。」

「空想ぢやないんですのね、あなたの『西部劇の歌』といふ作品は——」

「生活記録だね。」

「ちや、あなたは、あの時分には、ほんたうに、あんな、アメリカ・インヂアンの着物を着て、麥袋を擔いだり、枯草を積んだ馬車を驅つたり、居酒屋で手風琴を弾いて騒いだりしてゐたのよ。」

「思ひ出しても冷汗を覚える。——憫れなる者よ、何故あつて汝は汝の見る客観世界に満足せざるか、汝は太陽・月・星辰及び海原よりも、観るべき更に豊かな、更に偉大なる何物を把持するや——この聖人の言葉は俺の胸を貫く、それ故に俺は俺の幸福の追求のために與へられた凡ゆる實在の事物に最高の満足を求めて悔なき筈であるものの、何故なるか、過去の己れの姿

を回想するに及ぶと、その姿の憐れさ、その行爲の滑稽さに目眩んで悪夢の谷に轉倒する、明日、省る今日の己れが怖ろしい。」

「だからお酒を止めれば好いのよ。」

「うむ。都合が好いことには俺は空氣にでも酔つ拂ふことが出来るんだ、酔はうとさへ思へば——一杯のデイルスの水と一壘のウオッカとの差別も知らぬ。悪夢の谷を——陶酔の——と云ひ代へることだつて、別段至難の業とも思はれぬまでさ。馬鹿な話は止めて、さあ、もう一遍踊らう。」

「……で手紙は、何うなつたの？」

「さうだ——で、書かうと思つたらペンが何處かへ行つてしまつて見つからないのさ。そこで鉛筆を拾ひあげると、こいつがまた折れてゐるんだ。」

「まあ、可哀想に——」

「ナイフなんてありはしない。で、うっかり大事な剃刀で、そいつを削つて手紙を書いたのは好かつたが、さて今度は髭を剃らうとすると、さあ大變だ……」



「面倒な話だわね。宿屋の近所にだつて床屋位あるでせうに……」

「……………」

「ほんたうに、その髯ちや、憂鬱にもなるでせう。折角、そんな新しい着物を着てゐるのに

——」

「俺の尊敬するこのタルニシア姫の頬ちかくに、この顔が近づきはしなからうかと思ふと、気がでなかつた。それ以外に何んな哲理を案めあぐんでゐたわけでもなかつたんだよ。失敬

——」

「このビルヂングの下にだつて、床屋がありますから一寸行つていらつしやいよ、案内してあげますわ。」

「……………」

「ちや散歩に出かけませうか。」

「もう一度踊らう——そのうちには、うちの細君を迎へに行つた馬車が歸つて来るだらうから。」

そして私達は再び踊りの群に投じた。

「はるかに聞える太鼓の響、新たに來れる唱歌隊——こんな歌を知つてゐる。」

「知らないわ。」

「大昔のドイツの歌だよ。」

「でも、調子好くステツプに合ふちやありませんか。」

「合さうと思つて歌へば何んな類ひの歌だつて、その場その場のステツプに合ふ位ゐのことは當然ぢやないかね。——可憐な驚き方をする愛らしい人形だ、君は！」

「ちや、もつと歌つて御覽なさいよ。今よりも、もう少し低い聲で——ね。」

「一度は美味に飽きたれど

今は絶えても口にせず、

踊り躍りて破れ靴

これより先きは跣足だよ。」

「面白い歌だわね。それから？」



「沼の中より現れて、  
舞踏の列につらなれば

「あら、もつと小さな聲で——といふのによ。」

舞踏の隊はすすみゆく

曲りし脚は跳ねすすみ

肥つちよ脚も飛びすすむ

見得外聞に懸念なく

ランラ、ランラ、ランラ……」

「もう——澤山だわ。そんな大きな聲で、見つともなくて困つてしまひますわよ。」

「やあ、窓から月が見える。——やあ、綺麗だ、火花が見事見事。……俺は斯うしてはゐられなくなつた。さよなら——」

私は後ろも見ずにホールから駆け出した。馬車は忠實に私を待つてゐた。

佛壇に燈明の焰がゆらめいてゐた。黒い壁に包まれてゐる焰が、青白く私の眼に映つた。インチアン・ガウンを頭から眼深く被つた私は、雨戸の隙間から、もの一時間も凝つと青白い焰を賤めてゐた。

「俺は怠け者ではない。だが俺の勉學も勞働の空腹を充すに足るだけの物質を俺に與へないのである。幸ひに俺は此處に見すばらしく憐れに苦むした生家の名残を見出してゐるのだ。何うして俺は、この行爲を自ら掠奪と稱び、盗み——と嘲り、眞に盜賊の舉動で、斯んな風に忍び込ますには居られないだらう。親愛なる妻にまでも俺は、この行爲を祕密にしてゐるではないか。馬鹿奴、眞ッ晝間に大手を振つて出直したら好ささうなものなのに。あの佛壇の抽斗に藏されてゐる黄金の古判は誰の所有權に屬するものでもない筈だ。顔を洗つて出直せ、身装をあらためて出直せ——」

私は、このやうなことを幾度吾が胸に繰り返したか解らなかつたが、決してそんな言葉に従ふわけに行かなかつた。理性では制御し得ぬ心的現象である。私の胸は戦きのために氣たたま



しい半鐘がチャンチャンと鳴り響き、足は地を踏む心地すなかつたにも拘はらず、身動きもせず屋内の様子を窺つてゐたのである。斯んな思ひを忍び得るほどの力量があれば、他の如何なる職業に就いても、より平易な朗らかさを持つて事に當れる筈である。私の血潮の流れのうちには、悪を好む變質性が潜んでゐるのだらう。自ら祕密をつくり、祕密の帷のうちで吾と自ら吾肉體に邪惡の針を打ち込んで、快哉を叫ばんとする如き犯罪性に憧れてゐるのだらう。私の腰には、皮袋に突きさした短劍が用意されてゐた。

屋内は、ひっそりとして人の聲すらなかつた。……あの佛壇の抽斗は「永久に開かぬもの」といふ、家の傳來の掟であつたから、この私の行爲が今、他人の眼にさへ觸れなければ、永遠に私の所業は祕密の裡に埋れる筈である。

それから私が首尾よく仕事を成し遂げるまでの、自分の姿や物腰や心持などを私は今此處に誌すに忍びない。やがて私は戯曲家の假面を被つて、大時代劇の舞臺で、祕かに、審かに、實を吐いて、人知れず顔をあからめよう。

裏の竹藪の蔭にある栗の木に繋いでおいたロシナンテの傍らに、拔足で立ち歸ると私は二つの袋を鞍の兩脇にしつかりと結びつけ、幾枚かの小判は財布にぎりぎり巻き込み、息を殺して街道に忍び出た。そして、ロシナンテの蹄から、ワザと水に濡らしておいた草鞋を脱ぎ去つて、體をかはかして鞍上に飛び乗つた。さつきの良心や戦きは忽ち消え去つてしまつて、名状し難い痛念さに襲はれてゐたので、そんな風にして飛び乗りでもせずには居られなかつた。私はロシナンテの鬘の中に顔を埋めて、青白い月の光りを切つてヒウと鞭を鳴した。——野良歸りの農民が通つてしまへば、宵のうちでも絶えて人通りのない小川に沿うた長い一直線の街道である。ロシナンテの四個の蹄は、巨大な霞の如く凄まじく大地を鳴し、突風を巻き起しながら一散に駆け出した。何だかわけがわからなくなつてゐた——おそそらく、凄まじい風に靡るロシナンテの鬘が、その首根にしつかりと吸ひついてゐる騎手の眼となく鼻となく口となく、耳となく、そして露はな胸となく、滅茶苦茶に亂れかかつて息苦しくもなつたのであらう——騎手は困つたクシャミの發作に驅られて、顔や胸を捲つてゐたが、そのうちに止め度もない涙



がバラバラと滾れ落ちてゐた。

春であつた。丘の眞下にある村里の灯が、ぼつと滲んでゐた。——そんな全速力の馬の背に伏して、だらしない顔を埋めてゐる私の耳に、傍らの小川のせせらぎの音が時たま酷く長閑に響いてゐたのを、私は今もはつきりと憶えてゐる。汽車の窓から眺める夜の景色のやうに、白い街道が激流になつて走り、麥畑が沼のやうに見え、大根の花が蝶蝶の群のやうに飛び散つて見え、川ふちの猫やなぎの幹が、はつきり、それと判別出来たことなどを記憶してゐる。

私は、その向うに見ゆる村里の一隅で森に通ふ樵夫のやうな生活を送つてゐた。

私は、その小判と袋の中の銀器とを現代の通貨と賣り代へて、都へ上つた。

私は、再びこの夜、あの隣り村の生家を「訪れ」なければならぬ窮境に立ち至つてゐたのである——ここに至れば私は、何も彼も云つてしまはずには居られない、假面は被りきれなくなつてしまつた。

アリストフアーネスの喜劇を翻譯して、一袋の金貨を持つてゐた——などと、私はこの文章

の冒頭に、酷く取り澄して誌してゐたが、あれは虚妄の言だ。あの金貨の袋はいつかの古小判に依つて代へられた最後の銅貨である。第一私には、ギリシヤ喜劇を翻譯するなどといふ偉い學力なんて持合せてゐない。また、砒石の恐怖も同じく虚妄の言語であつた。今時、何んな裏町の理髪所を探さうとも、あんな間拔な魔術師が居るものか。出遇つたとしても私は怖れぬ。——私は、この夜の訪問のために、このむさ苦しい頬鬚を人知れず努めて蓄へたのである。

私は、繪葉書屋の店で、紙製の目覆ひを買つた。假面舞踏會用の青いマスクである。

「圖書館の歸りに、ダンス・ホールへ廻る。そこで會はう。」

私は妻に、このやうな約束をして置いたのであるが、終列車の時間が愈々迫つて、凝つとしてゐられなくなつたので、

「今日R社に赴いたら、文藝講演會に誘はれて急に今から京都へ向つて出發することになつた。

僕は、ギリシヤ喜劇の發生に就いて——といふ講演をするのだ。明日の晩おそく、土産を持つて歸るから心配しないで待つておいでなさい。」

と書置きを残して逃げ出して來たのであつた。



私は、人生の半ばを既に一ト昔も超えてゐる健康な壮年者でありながら、斯んな愚かなトリツクに頭を悩す自分を思ふと就中妻に對して恥を覺ゆるのであつた。日増に、「この訪問」の手段が六ヶ敷しくなるだけで、他に何の成長力もないこんな男を配偶者を選んだ婦人の上を思ふと、そぞろに憐れを覺ゆるのであつた。だから私は、決して彼女に、この謀りごとを打ちあげようとはしなかつた。こんなことを明らかに申し立てたならば彼女は、悲嘆に暮れ、十年の苦節も水泡に歸したか——といふやうなあきらめに達して、そして、私を輕蔑して、新生涯を求めに行くであらう——と私は思ふのである。

ただ、私は、人情のことは別にして、擴く、一婦人に、斯る類ひの悲しみや決心を抱かせるといふことは、紳士としてのこの上もなき恥辱である——といふ西洋古來の禮節を尊敬してゐたからである。

#### 藝術

それは、私、孤りにとつてのみの、永遠の苦悶であり、怖ろしき陶酔であり、果しなく花やかな卷雲であるのみだ。

——泥棒だつて、嘘つきだつて、あの仕業さへ見つけ出されなければ、誰も悲しみを感ずる者はないのであるから、そして私自身だつて、そんな戦きは、その場限りで消えてしまふことなのであるから——結局、これは善行爲と云ふべきであらう……ストア哲學を生活上の（藝術上ではなしに……）模範として遵奉してゐる私は、行爲を健全と善に歸せしめなければ冒瀆を覺ゆるのであつた。私は、自分の母親に關しても、ほぼ前述の如きいとも簡明なる女性觀を持つてゐた。

ともかく私は、あらゆる苦心をして、人目に觸れぬように、あの佛壇の抽斗を、音もなく開き、靜かに閉ぢて、煙りの如く舞ひ戻つて來なければならぬ。そして、立ち歸つたならば、早速母親へ宛てて時候見舞の手紙を書かなければならぬ——とも考へた。早く、斯んな煩い仕事は片づけてしまつて、自分は專念研究の机に凭らなければならぬ——とも慌てたりした。

「あの抽斗が空ツぽになつたら何うするの？」

私はそんなことを呟いた。

「空ツぽを發見するのも俺ひとりか——」



「先祖傳來の掟を堅く守つてゐる母親は、内容を驗べることなしに、やがて恭恭しくあの佛壇の看守權を、僕の細君に譲り渡すことであらう。」

「空ッぽの抽斗が何代までも引續いて相續されるであらうか。」

「子孫のうちの誰かが、やがて、それを發見して、何代目の祖先が斯る不心得を働いたのであらうか——と研究するであらうが、果して犯人を指摘し得られるであらうか。」

「來年の春は、ロシナンテの騎手になつて懸賞競馬に出場して見ようか知ら……」

私は、急行の三等列車に乗つてゐた。列車の轍の響きが私の耳に、ロシナンテ、ロシナンテと聞えた。

私は、列車の洗面所に入り、中から錠を降すと、ふところから紙の目覆ひを取り出して耳に掛けて見た。そして、黒い頬の鬚を撫でまはしながら、鏡に映る姿に眺め入つた。

「何といふ巧みな變裝であらう、これちや自分が見ても自分とも思はれない。苦勞の甲斐があつた。」

などと呟きながら私は、尖つた頭布を被り、上衣を脱ぎ、ズボンをとつて見ると、黒い肉髭

絆一枚で、紛ふかたなきフェイストフェレスであつた。

私は、扇子を使ひながら、鏡に向つて何時までも奇體に愉快な見得を切つてゐた。

窓の外は、インヂアンのガウンでロシナンテを飛したいつぞやの晩と同じやうな朧月夜であつた。

眞夏の夜更けであつた。汽車は警笛を鳴して鐵橋を渡つてゐた。



早春のひところ



一

そのころ私は、文科の學生でありましたが、小説といふものにいささかの興味もなく——といふよりも小説の類ひを読んだことがなかつたので——主に西洋の哲學や科學の書に親しみ、興味と云へば星の觀測ぐらゐのものでした。ほとんど友達といふものもなく、大概自分の部屋に引込んで、何かこつこつと机の上で辭書を引いたり、書拔をこころみたりしながら漫然と孤独の時間を過して居るといふ風でした。——夜になると芝居のはやしの音が、かなりはつきりと響いて來るやうな街なかの醫院の二階でした。はやしの音は明治座の芝居からです。その小屋が久松町の川ふちにあつたところで、私は叔母の縁家先だつたその家に寄宿して毎日規則正しく學校（早稻田）へ通つてゐました。しかし私は波多野博士の哲學史の他は圖書館に居ることの方が多かつたのです。

その醫學士の妹であつた千枝子といふ娘は、あたりでも評判の美人でした。齡は私とはた



しかおないどしでしたが、學校を終へてから間もなく神戸の支店（彼女の實家は日本橋の富澤町で毛織物の輸入商を営んでゐたのです。）へ赴いて、多くの外國人と交際して來たといふせいか、いろいろと世間のことに慣れてゐるといふ風で、私には彼女が自分と同年とは思へませんでした。彼女が私に告げるさまざまな話題は凡てが私にとつては新鮮な未知の彼方のしかし退屈な夢のやうなおもひでした。——彼女は東京に歸つてからは神田のアテネへ通つてゐることになつてゐましたが、多くは私のゐる醫院の方に來て、店では勉強が出來ぬからといふのに、語學の本などは手にとつたこともなく、いつも寝轉んだり、脚を投げ出したりしたまま小説ばかりを読んでゐるのです。小説の載る月月の雜誌やら新刊本を手あたり次第に持込んで來ては私の部屋でばかり耽讀してゐるのです。私は、さつきも申した通り孤獨癖の傾向が益益助長してゐた折からで、彼女の歸京には内心かなり辟易したのです。おまけに彼女の動作は極めて不しだらであつて、本を読みながらものべつにチョコレートを貪り、煙草を喫し、脱棄したものはその邊にほうり放しにして置くし、大きなヴァニティ・ケースなどを持込んで來ても使ひ放して出て行つてしまふといふ風で私は非常に閉口したのです。私は彼女が歸ると、直ぐに自分

も外へ出て、部屋が片づいたころになつて戻りましたが、隅隅にまでも啞せつぽいやうな甘氣な香りがこびりついてゐるやうな感じにも堪へられず、夜更までもまはりの窓を開け放しにしておくのでした。それにしても今迄、最も簡粗な机と本棚と一枚の坐蒲團があるだけだつた自分の部屋が、まるで見違へる程亂雑に——然も何も彼も派手つぽい女のものに散らかされてゐるのを見て、無性な潔癖性を亢ぶらせたのです。ストア派をもつて任じてゐた私には、寧ろ堪へられぬ責苦であつたでせう。床の間には小説本が次第にうづ高くなり、西洋蓆や香水の瓶が竝んだり、押入をあけて見ると桃色の羽根枕や脱ぎ忘れて行つた足袋などが、菓子箱などどとこつちやになつてゐたり、華美なレター・セットが幾通りともなく始末もなく散亂してゐます。

私は若い女の生活を間近に見た試しがないので、一體何處の娘も内では斯んな風なのか知ら、千枝子にしろ他人とはなしをしてゐるところや往來で出遇つたりすれば、まことに爽快しい良家の娘であり、斯んな態は想像も及ばぬのであるが——そんなに思つて私は疎毛をふるひました。



「小説を読むぐらゐのことならば、何もわざわざこんなところまで出張つて来なくても好きさうなものに——」

たうとう私は我慢しきれなくなつて或時云ひました。「其の臭ひだけでもやりきれやしない。」千枝子は腹這ひになつて本を讀んでゐるのですが、時々ひとりで笑ひ出して、笑ひが止るまで突つ伏したり、深い吐息を衝いて何時までも眼を瞑つてゐたりするのです。そんな呼吸づかひが、後ろを向いて石像のやうに机に向つてゐる私の背後に覆ひ被さつて來るのです。……それにしても私は、ひとりの讀者をそれほど情熱的に操縦する小説なるものは、一體何んなことが書き綴られてゐるのだらうといふ好奇心を惹かれました。

「だつて、うちで讀むとおこられるんだもの——オヤチと來たら、このごろ厭にあたしを注意深い眼つきで見ると、いろんな引け目があつてね、自分からは何も云へないのよ。そこで

母さんにいろんなことを云はせるのよ。それがとてもやかましい文句で、身装からお化粧のことまで——」

「あたりまへだな。」

「學生の分さいで、普段にお召の着物を着たり縮緬の長襦袢を選好みするなんか、もつての他だ——といふんだが、それが今度あたしが此方へ歸つて來てから急にさうなのさ。せんにはおしやれをすすめてゐたくせに——」

「何かわけがあるの？」

「あるかも知れないんだね。——兎も角あたしは、それで、この頃は買ふものは皆なこつちにかくして置くし——それは皆なオヤチの金をこまかしてやるのよ。知れたつて怒るわけにはゆかないんだから——オヤチだつて、此處のアニキだつて、變な遊びをすつかりあたしに見つかつてゐるんだから蔭ぢや頭はあがないのさ。母さんにしろ此處の姉さんだつて、いざとなれば氣狂沙汰のやきもちやきなんだから可笑しくつて仕様がないや。」

彼女はひとりでに皮肉さうに舌を出したりしながら、押入から新しい支那靴を引き出して、



「ほら、もう斯んなに……」

と蓋をとつて一杯詰つてゐる帯や着物を示しました。その鞆には鍵が下りてゐて、名刺ばさみの個所には私の名前が誌されてゐます。

「みんなオヤヂとアニキをゆすつた金で買ったのさ。これにも容れきれなくなつて、あんたの鞆の底にも秘してあるのよ。気がつかかなかつた？」

「俺の鞆にも！ 厭だな——」

私が白黒するのも鬨はず千枝子は、私のトランクの蓋をとると、シャツや紺紵の着物の下から、目も醒めるやうな縮緬やら絹のやうな長襦袢を二三枚も引き出した。牡丹の花が染出されたり、西洋人好みとでもいふべき趣きの孔雀の縷を配したものやらが、恰も瓦の下から咲き出た不思議な花のやうに私の眼に映り、私は何か自分の胸の上に生々しい血煙を浴びた感でした。

「着換へるんだから、ちよいと彼方を向いておくれな。」

私は慌てて机にかへり、頭を抱へて空を見上げてゐたが胸の高鳴が容易に止みさうもなく、若し斯んなところに誰か這入つてでも來たら何んな疑ひをかけられるかも知れぬなどと怕れて

凝つと眼を閉ぢました。

「君は何も知らないかも知れないがね、あの千枝子つて娘は——」

野田といふ中年の店員がいつか私にそんなことを云ひました。野田は大學出で、もと株屋の店員でしたが、遊蕩のことで失敗した後父親同志が友達の仲だつたので、千枝子の店に働くことになつたのです。生粹の江戸ツ子で、見るも精悍な美男子です。兄貴の友達で橋田といふ醫學生だつた男とは、もう二三年前になるかな、ともかく大變な仲で、死ぬの生るのつて騒ぎまで起したんだぞ。餘つ程マセた娘さ。ところが、あの娘は移り氣といふのか自惚が強過ぎるといふのか知らないが、誰にもそのわけがわからないんだが、突然に、全く突然に、その男を嫌ひ出して、頑としてそれつきりさ。」

その理由が何う考へても誰にも解らぬ、不思議な思ひきりを持つた娘だ！ と野田は云ふのです。野田達だつて橋田といふ男は好く見知つてゐる柄といひ容子といひ申し分もない人物で、あれではさすがの千枝子も乘氣になるのは道理だと誰彼となく云ひ合つてもゐたさうです。親達も無論賛成で戀人同志は大つびらに泊りがけの温泉行などをこころみてゐたほどの間



柄だつたさうなのです。

野田は恰で千枝子に敵意でもあるやうに、何を聞いても驚きもしない私をつかまへて、悪口まぢりでした。

「はらんだといふ噂もあつたんですぜ。しかしそれは噂だけらしかつたが、神戸へ行つたのは源はと云へば、そのほとほりを冷すのが目的だつたのに、今度歸つて来たところを見ると厭に西洋かぶれなんかしてオヤヂも大分手を焼いてゐるらしいのさ。でも毎日學校には行つてゐるらしいし、あれぎり男の騒ぎは起さないとこゝろを見ると、橋田のことを忘れずに居るのかも知れないが。——男は何でもすつかり無情を感じて九州の田舎とかへ歸つて、いつまでも千枝子の本心の立返るのを待つとかと云つてゐるさうな。まるつきり芝居もどきさ。」

その時分は何を聞いても白白しかつたが、今では私は野田の云つたことなどを思ひ浮べると何か漠然たる嫉妬を覚えるのでした。

彼女も男のことを遠まはしにはなしたこともあるのですが、まさか野田の云ふやうなことを信ぜられもしませんが、そんな連想を強ひられると私は次第に惱ましが涌立つて來るのでした。

「何うして嫌ひになつたの？」

私は千枝子に訊いたことがあります。

「聲が駄目なの——自分でもあたしはくだらないことを氣にすると思つて誰にも云はないんだけれど、どうしても我慢出來ないつてことが解つたのよ。それがね、その人の時にさ、はじめはその人の聲が落着のあるやうな錆をもつた聲でね、物靜な具合なんか氣に入つてゐたんだけど、だんだん氣をつけてみると、その人は何んな時にも、さういふ聲より他は、高くも低くも、それつきりのひといろの聲しか出ない——そんなことに氣づくとも、あたしはとてもやりきれなく滑稽になつて來て堪らないの。年がら年ちう何んな時にも、憤つても、泣いても、たつたそれだけの半オクターヴほどの間の半音見たいな聲しか持たない人なんか、あたし可笑しくつてとても傍に居られないのさ。」

そして彼女は、その人の聲の、甘いささやきの言葉や驚きや悦びの調子を眞似て見せたが、成程奇妙なものでした。然し私は、何う思つたにしろそんな愚かな理由で凡てをあきらめるな



んていふはなしは馬鹿馬鹿し過ぎるので、

「くだらん！」

と不機嫌な顔を浮べました。「ヒステリー一種だらう。とり直すべきだね。」

しかし彼女はいつになく神妙に眼ばたきながら、

「それからいふもの、あたしは特に人の聲といふのに普段氣をつけはちめたんだけど、だ  
けど憤つては厭よ、さういふやうな聲の人は割合に多いんぢやないかしら——といふのはね—  
—Sちゃんも……」

不圖私を冷く見直し、二本の指先で短い寸法を計るまねを示すのです。

「これぐらの間の、半音だけしか出ない聲の人ぢやないかしらと疑ひ出したのさ。」

そして、急に聲をあげて笑ひ出すのです。

「若しさうだつたらお氣の毒だな——」

他人のそんな聲のことを氣にするだけあつて、千枝子の聲はその時私も特に氣がついたので  
すが、わずかな笑ひ聲にも、繊細な抑揚と不思議な魅惑に富んだ自からなる艶めかしさに充ち

てゐました。なるほど、そんなことをそれほどまでも念頭に置いたら配偶者の音聲に關しては  
潔癖に走るのも道理かも知れぬ——そんなことを私は發見させられました。さうは思つても私  
にとつては極めて些末な空事であるのにも關はず爪弾きでもするか笑ひなどを浴せられて  
私は吐を立てずには居られませんでした。

「馬鹿なッ、あまり失敬なことを云つて貰ひたくないぞ。」

私は思はず肩を張つて叫ぶのですが、横腹に風穴でもあいてゐるやうで少しも身に泌みた力  
の入らぬのを感じました。

「ほら、やつぱりさうだ——憤つても別段聲の調子が變りもしない——變なの！」

と彼女の眼つきはむしろ研究的に光つてゐるではありませんか。私はわけもなく照れて、ひ  
とりになると、まさか大聲を立てて見るわけにもゆきませんでしたから、より低音の聲を試み  
て見ようと極めて低聲のつぶやきを放つて見るのですが、それは恰でかすれて聲にもなりませ  
ん。止せ止せ！ と私は苦笑して、改めて自分の机に向はうとするのですが、急に激しい運動  
でも試みた後のやうな疲労に襲はれて、ついぐつたりと寝轉んでしまふやうなことが多くなり



ました。そして、今ではそれまでのやうに空氣の入換などを爲すこともなく千枝子が棄放しにして行つたままの枕を引き寄せて、小説を読みはじめたのでした。それまで何も知らなかつた小説といふものが何れもこれも無性におもしろくて、私は夜の更けるのも忘れるのです。そして私も思はず腹を抱へて笑ひ轉けてたり、荒唐しく呼吸をはずませて手に汗を握つたりするのです。小説家なんて人人は、何うして斯んなにも人を面白がらせる術に長けて、不思議な小手先の才能に恵まれた魔術師だらう！と心底から感嘆させられました。人生の種種様様なる断面が視眼鏡を透して見物する多彩なパノラマとなつて次次に展開し、あらゆる事象が小説なるものものふるひにかけられると澎湃たる夢に覆はれてゐて、うつとりと私の胸に迫つて來るのです。「おやおや、未だ寝てゐるの、もう十時になるといふのに。」

千枝子の聲に驚いて目を醒すと、點け放しのあかりの下で、私はおそろく口をあけて眠り込んでゐるらしいのです。私はそれまでは七時になると家を出るのが習慣でしたので、何も知らなかつたのですが、千枝子は晝は山手の家政學校へ、夕刻はアテネへ通ふことになつて分家を出て來るのですが、大概途中で此處に立寄つて着物を換へてから何處ともなく遊びまはつてゐ

るらしいのです。

「小説、面白い？」

千枝子に云はれると私は斯んな娛樂にばかり耽つてゐて何うなるものか……といふ自責に迫られるのですが、もう細い活字のレクラム本やら理窟ッぽい本で語學を學ぼうといふ努力も失せてゐるのが怖しくなつて、わざと「僕には小説を読む餘裕なんてありはしないさ。」などと呟いてゐるのです。「うっかり寝過ぎた。飯を喰はないで出掛よう。」

ごまかしのやうなことを云ふ自分がなさけなくなつて私は慌てて飛び起きようとする、

「裸になつてゐるんだから、好いといふまでそのままかひまきを被つてゐて……」

と千枝子は私の上に脱ぎ棄てるものを投げ出して、あまへるのです。

「またか！ 椽側へ出ろの、もぐつてゐるの——と煩いな——起きるよ。」

私は不平の聲をあげるのですが、止むなく凝つと堪へて、星の望遠鏡のことなどに思ひを馳せるのですが（ああ、あれもこの頃すつかり忘れてしまつた！ などと考へながら——）眼鏡の先へは、女の裸像などが現れるばかりで身を持ち扱ふのです。



「ゆふべ、あれから何うしたの？」

千枝子は化粧にとりかかるとすつかり落つき込んで、そのまま私にはなしかけるのです。

「直ぐ寝てしまつた。」

「その癖、こんな寝坊なの？——さては餘つ程悪い夢でも見たな——」

ひやかすやうな口調で、千枝子はわらふのです。そつと覗いて見ると彼女は私の机の上に鏡をたてて顔ごしらへに餘念もありません。紅い長襦袢の肌を脱いだまま立膝か何かの姿で夢中で鏡に視入つてゐます。

「今日は何處へ行くんだい。」

「諸かないで——レデイに向つて何を云ふの？」

などと故意に氣取つた風を示したりするので、私が見てゐるとも知らずに、やがて顔を終へると机に腰を掛けて和服の下に用ひる白い靴下のやうなものを着けたり足袋を穿いたりしながら、上の空ではなしかけてゐるのです。ゆふべも私のうしろで手紙らしいものを書いてゐたが、間もなく、おながが空いたから何か喰べに行かないかと誘ふのでした。

「僕はもうこれからは夜は一切何も喰はないことに決めたから止める。夜、ものを喰ふと何うも悪い夢を見ていかん。」

實際なので私はかぶりを振ると、彼女は何故か非常にわらふのです。

「……悪い夢か！ あんな六ヶしさうな顔をして、唸つてら、半音のセリフは願ひさげだわ……」

「勝手にしろ——馬鹿ッ！」

私は、彼女の嘲笑が殊更に痛く、憤つとしたのです。すると彼女も、

「馬鹿野郎！」

と棄科白して歸つたのです。喧嘩なら恰度好い！ と私は吻つとしましたが、また朝になつて現れると何事もなかつた普段の調子で、稍ともすれば眞面目さうな私を冷笑しがちなのです。そして、私がわずかでも興奮すると言葉に田舎なまりが現れるとか、愚圖で野暮臭いなどと輕蔑するのです。喰物屋に入つても、彼女は事毎に私の、ものの食ひ振りやら言葉つき、果は勘定の仕様などに就いてまで批難しがちで私は煩瑣だつたのですが、何よりも厭なのは外へ



出さへすれば芝居の立見へ誘ふのです。私は芝居は嫌ひでもなかつたのですが、彼女の講釋が苦手でした。何の彼のと役者の噂ばなしをしたりするのですが一向に私が受け應へもないと急に不機嫌になつて、木偶坊と芝居を觀てゐるやうだなどと罵つたりするのです。

「龍之介の小説を讀んだらね、學生の時に久米正雄と市村座だつたかの立見に入つたところがあつたよ。そしてね、正雄がおとわやツ！と怒鳴たつたんだつて——あたし正雄つて人は大好き、一度でも好いから會つて見たいわ。此間手紙書いたけれど、出すの止めちやつた。とても聲が、好いんですつてね——それはさうと、あんただつて、あの掛聲なら出来るでせう。」

私がかみやのことを知つてゐる癖に彼女は難題を持かけるのです。——「若し、あれが出来れば何時かの疑ひを晴すわ。」

そんなに云はれると、私もつひその氣になり、あんなことぐらゐならと眼を据ゑるのだが、いざとなると、千仞の谷底へ飛び降るかのやうに胸が冷え、脚が竦むのです。

「傳ちゃん。素晴らしいな——あたし、あの人と芝居見てゐると、胸がスーッとするわ。」

千枝子は展展野田を誘ふのです。全く野田の澄透つた掛聲は、私にしる聞くも花花しかつた

——觀客席が水を打つたやうに靜まり返つて恍惚と芝居に見惚れてゐる一刹那に、彼は底力に満ちに鋭い聲を放ちます。演技の呼吸に寸分の餘地もなく、それは出合つてゐるために、丁度一種のツチの如くに緊張して片唾を吞まされます。いつも彼の掛聲が先を切ると八方からそれに伴れて、それは俳優の屋號を叫ぶのですが、聞分けもつかぬ底のワーツといふ歡聲があがります。野田は、時に依ると、私などには意味も解らぬ役者の本名とか、町の名で——×ちゃん……とか、何とか町など、と洒落しました。そして思はず多くの見物人に朗らかな笑ひを漂はせることもあるのです。——しかし、ひとなかへ出ると急に耻かしがりになる千枝子のことだから、如何程野田の發聲が間髪も入れぬ伊達な趣きであらうとも、伴れの者が人を笑はせるやうな聲を發したら、イヤがつてゐるかも知れぬと思つて、そつと私は彼女の横顔を見ましたが、千枝子は舞臺へ向つて眼ばたきもせず野田と視線を並べてゐます。あまりに見事なハヤクチであるために、見てゐても野田のくちつきは殆んど動かぬ間に、花花しい聲が放たれ、まはりの見物人すら誰の發聲かなどと振向く隙もない悠然たるものです。歸りがけに河岸ふちを歩いてゐると千枝子は、



「あたしも男だつたら、傳ちゃん見たいな聲を掛けて見たいわ。氣持が好いだらうな。でも、あれは相當度胸が要る？」

などと感嘆するのです。

「なあに、ちよつとしたイキだけのことですよ。」

「尤も傳ちゃんの聲は修業が積んでゐるからな——あたし、あんたの唄を聞いてゐると、氣が遠くなるもの。」

野田は清元の名手ださうです。どういふものか千枝子は、稍ともすると人の聲にばかり留意するのが癖でした。——「ともかく立見だけは、いつでも傳ちゃんを誘ひたいよ。」

「立見だけ——はないでせう。」

野田の傳ちゃんには、にやり笑を浮かべたりしましたが、千枝子はうつとりとして、何でもおこるから、これから待合か料理屋へあがつて、野田の唄を聞きたいなどと興奮しました。——また或晩、私は千枝子と外へ出た時、つひ二人だけで立見場へ入つたことがあるのです。その時私は、實に飛んでもない失敗を演じました。といふのは、あんまりそんなことはかりで惱まされ

れてゐたせゐか、千枝子とふたり肩を並べて見物してゐるうちに、柄にもない負ン氣が起つたらしく、殆んど夢中で、その突嗟には眼をつむり、あらん限りの太い聲を振り絞つて、「何何やあ！」といふやうな唸り聲を發したのです。おとはやと云ふのを野田のやうに、半分吐の底へのんで、た、や、ア——とひびくやうに、頤を引いて叫んだのですが、出さうとした音聲が思はず鶉呑にされて、いかにも間の抜けたカスレ聲がびいつと響くやうに震えたまま飛んで行つたのです。それと同時に、あちこちから、叱ッ叱ッ！といふ舌打やら、嘖飯の爆笑が起り「とうふや！」などといふ冷かしの聲が聞て、見物席は一瞬間、呼吸を亂されてざはめきました。加けにその時は、おとはや一門はひとりも看板にさへあがつてゐない芝居だつたのです。そればかりでなく私は凡ての役者を讃める代表の言葉が、それなのかと思つてゐたのです。でも、判別がつくほどはつきり叫んだわけではなかつたのですが、腹ではそんな間違ひをして居りました。——それよりも私は、その時千枝子が力一杯私の脛を草履の先で蹴り、酷くよそよそしてその場を立去つてゆくを見て、はじめて失策を悟つたほどの迂濶でした。

「穴にでも這りたかつたわ。普段ひとのいふことをちつともきかない罰さ。」



千枝子はこの時ばかりは眞赤になつて憤り、四五日は姿も見せませんでした。でも彼女は、ほとぼりが冷めて、相變らず外へ出ると、つひ芝居に誘ひ勝ちでした。何とまあ執拗なことは、未だに私の胸の隅にはあの時の失敗を取り返してやらうといふやうな鬱陶しさが蟠り、却つて同行がちゆうちよされる始末なのでした。それ故私は、ひとりこつそりと芝居の覗き見に赴くやうになり、發聲法について工夫を凝しましたが、勿論決斷のついた試しとでもなく、あまりと云へば阿呆泌みた自分に氣づいて、寂しくなりがちでした。

### 三

あんなところに居たならばやがて自分も自墮落な輩に成果てるに違ひない、これは何うしても学校の近所でも下宿を求めて、心氣を一轉させなければならぬ——私は斯う氣づいてからは、また元の通りに早朝に家を出て、日暮ちかくに戻ると、千枝子の現れぬ間に外出してしまひました。私の足は自然と芝居小屋に向くのです。

私は學校に來ても、圖書館へ入る興味も失はれて、ぼんやりと運動場へ來ては、毎日野球選手の練習振りを眺めました。夜更しては讀み耽る小説のおもしろさや芝居の雰圍氣が、逆はうとすればするほど頭から離れず、千枝子のきれぎれの言葉やら姿が、小説や舞臺の人物のやうに間斷もなく私の腦裡に甘甘しく搖影するのです。——私は激しく首を振つては、肩をいかにせ、健全な競技に視入つて、痴想を忘れようと努めました。稍ともすればおろおろとして空を見あげたり、がつくり首垂れて吐息をつく、得體も知れぬ慚愧の情に込上げられました。

春のリーグ戦が近づいて、選手達の練習は日増にたけなはになりました。投手には谷口、岸、遊撃加藤吉兵衛、センター趙士倫——これらの選手の晴業を私は、いつもスタンドの天邊に、鴉のやうにぼつんと止つたまま、ぼんやりと眺めて居るのです。谷口投手が、逆モーションなる技で問題を起したところでありました。毎日の見物人の數は稀で、ガランとしたスタンドには、前の方に應援部の幹事らしい一團が控えてゐるだけで、折折、谷口ッ！ とか、趙さん！ とかといふ聲が放たれました。私も時には思はず拍手を送りました。

その日もひとり、未だ選手が繰込まぬうちからスタンドの天邊で私は居眠りをしてゐまし



た。——すると、いつの間に私の傍らに現れたのか気づきもしませんでした。一人の見るか  
らに逞ましい圖體の虎髯の學生が、ぬつと私の前に立つて、

「おう——」

と言葉をかけるのです。「君は何科だ？」

彼は片手に竹皮包みの辨當を載せ、大きな握飯をむしやむしやと頬張つておました。いつか  
選手も繰込んでゐてノックが開始されておました。この學生は、いつも本壘寄の階段に屯して  
ゐる一團の一人ですが、最も凄烈な掛聲を放つので、私も顔だけは覚えておました。彼はフア  
イン・プレイや大當りを目撃すると、グラウンドに飛出して選手の肩を叩いたり握手を求めたり  
するので。板草履を穿き、兩袖を肩までたくしあげておます。居眠りなどをしておいたので私  
は批難でもされるのではないかと驚きました。私が答へ損つておると、彼は囁りかけのむ  
すびを握つた腕を宙に浮かせたまま、

「俺は政經科二年の大音寺虎雄つてんだが、と名乗りました。」

「俺か——」

と私も自分の名前を續けて「俺は、英文科の一年だよ。」

と答へました。

「フフン、文科だつて——文科の野球ファンなんて珍らしいな。」

そんな風に云ふ彼の言葉つきも全く憤つてでもある調子でした。

「そして俺は、應援部と正義會の理事なんだが、君は應援部に入らぬかな？」

大音寺の云ふところに依ると、應援團の幹部に缺員を生じておるところ故、君を餘程熱心な  
愛校者と見ての上ですすめるのだが、若しもリーダーが不得意なら、旗手になれと誘ふのであ  
つた。

「大分前から、はなさうと思つておたんだが、今日まで云ひそびれておたのさ。何うだ、賛成  
か？」

「入つても好い。旗手でなくて、リーダーをやつても好いよ。」

私は力を込めて即座に答へました。愛校者と見られたのが非常に嬉しかつたのです。正義會  
には、私は度度入り度いと思つておたのですが、その部員が控所にビラを貼つたり、教室に



演説に来るところを見ると、多くは如何にもその會員らしい硬骨漢ばかりで、柔弱さうな自分の様子を知つてゐる私は決心がつき兼ねたものでした。

「さうか、君にはあの旗は振れんかも知れないからな。」

大音寺は私の姿を改めて見直しながら、

「聲は大丈夫か？」

と云ふのです。旗といふのは、「穴八幡大明神」と大筆を揮つた一丈もの幟のことで、これを振り翳す幟持の一隊を新たに組織しようといふ議が起つてゐるところだつたのです。(これは然し實現はされませんでした。が、寄附金の募集文を私は書いたことを覚えてゐます。)

「……………」

聲！ と云はれると私は止胸を突かれて、たちろがすには居られませんでした。

「考へんでも好しいよ。それは、まあ、いづれのことにして、他の部員に紹介しよう。應援部だつていろいろの仕事もあることだし……………」

彼は、私の聲は信ぜぬらしかつたが、入團と決ると——それで、よしッ！ と何やら含き、

「まあ、一つこれでも喰はんか、そして此方へ降りて来い——」

と、握飯を私の鼻先へ突出しましたので、私もそれを頬張りながら、部員達の集つてゐる一隅へ赴き、大音寺から、やはり政経科の大塚五郎、工藤輝雄、服部瀧之進、その他五六名の幹部を紹介されました。

やがて選手達も引きあげて、目白臺のあたりに夕靄が降り始めた時分になつて、私は大音寺をはちめ、大塚、工藤、服部等にとりまかれて聲量の試験をされることになりました。これに通過すれば、大塚と服部が應援法についての動作の要領を教授するといふのでした。——先づ大音寺は、鬼のやうな拳固を頭上に構えて、フレイフレイ、ワセダ——といふ聲に合わせて空間を斜めに切り、言ひ終へると共に両腕を空高くパツと擴げるのでした。大音寺の聲量は、眞に虎の遠吠の如く素晴らしいものでした。

「模範通りに——」

と服部が傍から命じました。私は上着を脱ぎ棄てるや、殆ど夢中で、同じことを怒鳴りました。熱い煙りに巻き込まれるやうに眼がくらみ、そのハズミに、ポウツと鳴る一本の煙突に化



したやうな気がしました。

「もう一度！——」

と今度は、「ガンバレガンバレ、ワセダ」と大音寺は叫びます。それは拳闘家のやうな構えで  
ありました。

「構えの方は別の日に大塚達に習へば好いんだ。」

體もろとも聲にとられてしまつて、腹を曲げ過ぎるといふ批評が出たが、大音寺はそれはと  
もかく、

「體に似合ぬ立派な聲だ。吾黨の士として大いに頼もしいぞ。」

と云つて私の肩を叩きました。

私はあの時程愉快さを味はつた時はありません——彼等と肩を並べて、校歌を合唱しながら  
その時運動場を引上げた時の私の胸は瀧に洗はれたもののやうに爽快しかつたではありません  
か。

「君の大音寺虎雄といふ名前は、ほんたうの名前か、團長としての仇名ぢやないか。」

私は彼等の悠然たる脚どりに、歩調を合せ、すつかりもう打とけた親しみに没りながら、そ  
んなことを云ひました。大音寺は得意さうに、珍らしく大聲で笑ひ、

「こやつ皮肉なことを云はんと、何でこれが仇名で堪るものかえ。」

と肩をゆすりました。

「鹿兒島産の大虎だよ。」

そんなことを云ふ者もあつて、私達はがやがやと大音寺の下宿へ繰り込みました。

#### 四

「この蠟燭のやうな男は、柄にもない張りのある聲で、蜻蛉のやうに軽快なジエスチユアだ。  
ひとりぐらゐかういふのが現れるのは至極結構だ！」

私は忽ちさういふ評判をとつて、間もなく晴の試合に登場しました。大音寺の間近の下宿に  
移つてからは、生れ變つたやうに健やかな青年に戻り、暑中休暇になると、正義會の地方演説



部に加はつて、東京を離れました。

作者附記——ここで擲筆しては龍頭蛇尾のそしりを逃れぬが、都合上止むなく中斷する次第である。主人公なる「私」とヒロインとのいきさつについては、以上の経過の後のはなしが本篇の主題としては願目の筈だつたのに、云はば副線的の序事のみを終つたことを斷つて置き度い。諒を得れば幸である。そして、表題は假のものである。

夏  
ち  
か  
き  
こ  
ろ



あいつの本箱には、黒い背中を縦に此方向きにした何十冊とも数知れない學生時代のノート・ブックが未だに、何年も前から麗麗と詰つてゐる。——尤も扉には必ず鍵がかかつてゐるが、硝子が曇りでないから、中の書籍は一切見えるのであつた。珍らしいものは持つてゐないが殊の他の藏書家で、書齋に續いた小さな納戸は殆んど書庫のかたちを呈してゐた。

どうしてあんなノート・ブックなどを、そんな風にならべて置くのか自分には彼の了見が解らなかつた。彼は、都の大學では理學を専攻したと、吾家の者や近隣の知人に吹聴してゐると云つてゐたが、當時の彼の生活は自分も知らないで、そして彼の時時の口調から察しても月や星のことなどには割合に精通してゐるらしいので自分も、さう思つてゐた。彼は、哲學などにも多少の興味を持つてゐるらしく、話材がなくなると勿體振つた口調で昔の學者の名前をあげては色々な場合にそれらの所説を引用して、六ヶし氣に眉をよせるのが癖だつた。——それ



で、それらのノート・ブックの背中には、何れも白い繪具で、何々博士天文学講義とか、何某教授ギリシア哲學史とか、卒業論文「ヴント心理學の研究」とか……様様な科目の表題が、太く丁寧な文字で誌してあつた。

書籍ならば好いが、そんな筆記帳などをつまでもそんな風に飾りたてておくことは自分は、自分にはそんなものは一切無かつたからさういふものに對する他人の保存癖も解らないわけだが、何だか妙な氣がしたので一度彼に訊ねたら、彼はムツとして、

「君は、實に他人に對して無禮な、卑俗な憶測をする奴だ。他人のすることを一概に感傷的だといふ風に輕蔑的な眼を放つ奴は無智な不良の徒だ。——俺は、一見君などからは退屈風に見られる場合だつて、俺の胸のうちには何時も或る種の熱情が炎えてゐるんだ、驚異が眼を視張つてゐるんだ！」と、突然赤い顔をして、途方もないことを口走つたので自分は吃驚して、それ以來其方ばかりではなく、彼の書齋の異様な飾りつけにも成るべく好奇の眼を放たないやうに努めた。(彼の書齋が何んな風であつたかと云ふことは餘裕があつたら後で述べるかも知れない。)

さうかと思ふと彼は、また或る時、變にはにかむやうな吃音で斯んなことも云つた。——

「俺はこの通り母家と離れて、ここで斯んな日を送つてゐるんだがね、時々母親や女房が覗きに來るんだよ。こんな風に衒學的な裝飾を施しておかないと、あいつらは俺を馬鹿にして仕様がなないんだ。俺はね……これは君、頼むから誰アれにも云つて呉れるな……俺はのう、(と彼は思はず、俺はね!)と同じつもの田舎訛りで口走つた。)——俺はのう、自分が馬鹿であるといふことを他人に知られるのが何だか厭なんだ。それから俺のすること爲すことは、悉くがうわべの剛巧がりに過ぎないんだ。一生懸命で剛巧振りを装つてゐるんだよ。學問嫌ひの奴なんていふものは大抵學問を輕視し得るだけの何かの自信を持つてゐるやうだが、俺は、生れながら自信を忘れて加けに學問嫌ひと來てゐる。そして精神の内容のあまりに貧弱なことを想ふと吾ながら啞然とするばかりだ。

君は俺が謙遜家でないことを十分知つてゐるからこんなことも白狀するんだが俺は、生れながらに怖ろしい阿呆だつたんだ。馬鹿なら馬鹿で未だしも始末が好いが、馬鹿をかくさうとする感情だけが妙に小賢く發達してゐるのが情けない。」



彼は、慎ましやかに眼蓋を伏せて溜息を吐いた。自分は、彼の斯んなに沁沁とした様子を見たこともない。何となく自分もしんみりとしてしまった。くだらないことを思つてゐる奴だ、あんまりつまらぬことで自分には何としても同感は出来なかつたが、成る程そんな愚かなことにそんなに悩まされてゐるのか！と思へば、さういふ彼の存在は誠に情けなく同感出来ないこともなかつた。自分は、氣の毒な男だ！と思つた。彼は、息をのんでつづけた。——「第一俺は、吾家の奴等とさへ一處に暮すのは苦しいんだ、彼等の前でさへ俺は、懶巧振らう振らうとするうわべの切ない努力で、言葉は凡て科白のやうにぎこちなくなり、動作は凡てわざとらしい芝居になり——だから彼等と一日も一處に居ると晩には、苦しい芝居でも演じた後のやうにへとへとに疲れてしまふんだ。」と云つて若し、それらの努力を俺から引いてしまつたならば、俺の人格は零なのさ、零點だ！單に其處に轉がつてゐる邪魔ツけたらな物體！ああ、俺は何といふ愚劣な法螺吹きであらう、如何して斯うも行爲と心が一致しないのだらう。——例へばあのノートだつて、あれはどれもかも學校時代の産物ぢやないんだ。實は、此方に歸つて以來、勉強と稱して此處に離れてゐるんだが、仕事がない……吾家の奴等が時々ぞきに來る

仕方がなく俺は、いろんな講義録を抜萃してあれだけのノートをつくつたんだよ、俺としても、ただぼんやりしてゐるよりは餘ッ程救はれるんだ。ただ碌碌してゐると見られると、また俺は務めに追ひやられるおそれもあるのさ。——務めは、向方で御免だし——」

「さうだ、君はいつか "Children's Science" の記者をしてゐたことがあつたね。」

自分は、彼が學校を出て間もなく暫くさういふ子供雑誌の編輯助手をしてゐたことを思ひ出した。それは彼が子供の時分に初號から十年あまりも購讀してゐたといふ或る新聞社から發行されてゐた子供科學とお伽噺を主にしてゐた雑誌で、何でも彼は當時大變得意になつて大人の自分の處へまでそんな雑誌を月月贈つて寄したことがある。あの頃の彼の氣障さ加減を今でも自分は覚えてゐる。彼が、得得と、似合ひもしないタキシードなどを着込んで、そつくり反つて銀座通りなどを歩いてゐたことを覚えてゐる。あの頃の彼の興味があまりに鼻持ちがならなくて自分は、成るべく遠ざかつてゐたくらゐだつた。自動車が如何の！香水が如何の！カフェーが如何の！オペラが如何の！文學が如何の！（あいつが文學を口にしたのには思はず自分は嘖き出してしまつた。そして、文學にでも走らなければ好いがと自分は内内案じた。）



「あれは如何して止めたの？」

「寢坊のために免職されてしまった。」

「がっかりしたらう。」

「うむ。」

「だが、二三年たつてまた君は東京へ来たんだつたね。」

「行つた。その時に俺は、半年ばかり何とかといふ文藝雑誌の——これも助手だが、記者をやつたよ。」

「へえ、君が！ 一體何といふ雑誌？」

「エッセイ。」

「聞いたこともない。——學術的アカデミックなものか？」

「……………」

「それは何故止めたんだ。やつぱり寢坊のための免職か？」

「……………」

彼は、妙に首を傾げて、氣持悪るさうに顔を擧めた。うまく自分に、云ひあてられたに違ひ

な。

「お父さんとは近頃は仲直り出来たか？」

「うむ……………」

「で、この頃は、主にノート・ブックの製作か？」

「それも、まあさうだが——これは内證なんだが——」と彼は、聲を低めて云つた。厭に、内證内證といふ奴だと思つて自分は、退屈さうに點頭いた。俺は、この頃文學に心を馳せてゐるんだ。」

「文學に！」と自分は叫んだ。「君が！」

「小説だ。」

「古典でも研究するのか？」

「いや、自分が作家に……………」

「ほう！」と自分は、まったく狐にでも化されたやうに口をとがらせた。——何故自分がそん



なに仰天したかは、いろ／＼彼の人と爲りを説明しなければ解らないが、兎も角自分は彼の向ふ見ずに舌を巻いた。——成る程、馬鹿だな！と沁沁、さつき彼が己れの愚を諷いてゐた言葉に同感した。

彼は、此方の冷い心にも氣づかず、何か大きな六ヶしいことでも考へてゐるといふ風に、深刻氣に表情を歪めて凝つと、海の見ゆる窓の方を睨んでゐた。

(若者には文學病といふ一種の病ひがあるさうだ。あいつもそんな雑誌の記者などをしてゐるうちに、可愛想にそんな途方もない病ひにとりつかれてしまつたのか。)

自分はさう思ふと、さすがに氣の毒になつて何か忠告めいた言葉でも掛けてやらうかしら？とも思つたが、直ぐに、

(あいつ、また惨めな芝居をはじめたのだらう。自分で、俺は法螺吹きだと云つてゐるんだから、大丈夫だ！)と氣づいたので、自分は可笑しな安心をした。そして、だんだんに彼の先程の所謂「愚かさ」が解り、哀れな人と爲りに同情出来るやうな心持になつた。

さう思つて見るせいか、彼の横顔を眺めると、その眼は、動物のそのやうに無智な光りを

帯びて、ただどんよりとしてゐるばかりであつた。開いた小鼻が呼吸に伴れてヒクヒクと動いてゐた。彼は、白痴のやうに口をあいて海の上をぼんやり眺めてゐた。——少くとも自分に、こんな顔つきでは、成る程、沈黙の時には思想はないだらう、そして饒舌る言葉には自信は持てないだらう、何も彼もカラッポだらう、云へば嘘より他にないのも無理はないだらう、さぞさぞ寂しいことだらう、あいつの笑ひ顔を自分は何時にも見たことはないが！あの顔つきは恰で梟だ。何とまあ、洞ろな悲しみに満ちてゐることだらう！あいつはいつか自分に、俺は戀の経験もないと滾したこともあつたが、まったくあれぢあ近づく女もないだらう、それにしても、あいつも氣の毒だが、あいつの細君の方が一層氣の毒だな！それはさうと俺は、あいつの爲に何か適當な職業を探してやらうよ！——などと思はせられた。

「來た、來た、來た！」と彼は、突然酷く慌てて叫びながら、しどろもどろになつて何やら自分を促した。

「何だ？」

「向方を見ろ！阿母と女房がやつて來る！俺の様子を見に來るんだ！」



彼は、あたふたとして立ちあがつた。——見ると、海に近い松林の間を彼の母と細君が睦じ気に語らひながら歩いて来る。午に近いおだやかな海邊である。爽爽しい陽の光りが、風いだ水の上に銀色に映えてゐた。

自分には、彼のそんなに慌てる心がさつぱり解らなかつた。——自分は、一年振りで彼を此處に訪れたのであるが、前には斯んなではなかつた、子供沁みてゐたが快活な男だつた。街學的なことを口走る癖はあつたが、此頃のやうな怠惰な鬱屈の影はなかつた、ただあいつの變らないところは細君をもつても少しも家庭の人らしくならないところぐらゐなものだ、噂に聞けばあいつの家も破産の状態に陥つてゐるさうだが、そんなことを或ひは氣に病んでゐるのかも知れない、案外氣の小さいしみつたれなところのある男だから！ それならさうとはつきり云へば好いのに男らしくもない見得坊だな！

彼は、早くちに云つた。俺は彼女等に、再び學生を装つてゐるんだ。そして、君は、俺の先生のつもりで吹聴してあるんだ。年齢は二つ三つ上だし、そんな立派な鬚もあるし……彼女等は疑つてはゐない。もつと早くこのことを君に話して置かうと思つてゐたんだが、つい今まで

云ひそびれてしまつた、御免！」

道理で二三日前から、稀に會ふ彼の兩親や細君の様子が何だか妙だつた！ と自分は氣づいて、てれた。——彼は續けた。

「いろいろそれにも苦しいわけがあるんだ、後で話さう！……ああ、もうあんなに近くに來やあがつた！ 好いか君、俺——急に言葉を叮嚀に改めるから、君は、何となく鷹揚に點頭してゐてくれ。」

自分は堪らなかつたが、彼は酷く眞剣で眞赤になつてゐるので、謝絶る隙もなかつた。自分は、仕様ことなしに凝つと彼の顔を眺めてゐた。自分は、未だ何んな人の前でも嘘をついた経験はない。自分は、他人を瞞着した経験もない。自分は、何んな意味でも他人の前で芝居を演じた経験もない。自分は、蔭ひなたのある人間を憎む。そして自分には何んな遊戯的の分子もない……

「ああ、もう石段を昇りはじめた。」

切端詰つた顔つきをしてゐる彼の眼からは、この時ほろりと涙が滾れ落ちた。自分も何だか



酷く動機が高まつて、にわかに全身の血潮が逆上して来る苦しきのあまり、ふと彼の涙に誘はれさうになつた。

自分達は、達磨のやうに向き合つてゐた。

## 二

明日は歸らう、明日は歸らう——と思ひながらついつい自分の滞在も、もう二週間あまりになつてしまつた。ここは、都からは何十里も離れた片田舎の小さな漁村である。

あいつは、未だ眠つてゐる。昨夜は明方近くまであいつの酒の相手をしてしまつた。——退屈だから獨りで海のほとりに散歩に出かけた。月見草が密生してゐる松林をぬけて、岩の多い海邊へ出た。好い気分だ。朝のこんな好い気分を、あいつは知らないのかしら？ 俺は、もう酒の相手は御免だ。——自分は胸を擴げて深呼吸をした。新鮮な潮風を自分は食べるやうに呼吸した。疲労が、筈の皮をはぐやうに消えて行く……自分は、ゆるやかに首を回し、腕を伸ばし

胸を曲げて靜かな體操を試みた。神経が大變に疲れてゐる。彼の家人に會ふ時の苦しさと言つたららない！ 假面をかぶるといふことは斯んなにも苦しいものだらうか！ いくらかあいつの馬鹿な苦しみが自分にも、はつきりと同情されるやうになつて來た。うつかり滞在し過ぎると自分にもあいつの病氣がうつつてしまふ怖れがあるぞ！ 氣のせいかな俺も、この頃口を利く場合には彼の家人でなくても、妙な意識が伴つて來たやうな氣合ひを感じる——要心しよう。

昨日の晝には、彼の父と語つた。實に苦しかった。

「彼の仕事は捗つてゐますか？」

「中々一生懸命にやつてゐるやうです。」

「哲學を勉強すると厭生的になるツて、ほんたうでせうかな。」と彼の父は、笑ひながら訊ねた。——おやツ、俺は哲學科の先生にされてゐるのかな！ と自分は思つて、少なからず面喰つた。あいつはたしか△△大學の哲學科にもゐたさうだが俺は、哲學者の名前も知らない、知つてゐるのはソークラテスクらゐのものだ、それも内容は知らない、何でも多くの弟子共を詭辯家にしたさうだが、自身は偉い哲人ださうだ——詭辯家になつても關はない、あいつのノート



を借りてこの際ソークラテスを少々研究してやらうか——。

「決してそんな御心配はいりません。」

「いや、心配はしませんがね。彼などはうんと厭生的になつた方が好いと私は思ふんですが——」

「それもまあ一つの教育法ですな。」

「一體彼は將來何になるつもりなんでせう。私はそんなことは關はないんですが、いつまであやつてゐたつて仕方がないでせう。」

「と云ふと何か就職ですか？」

「ええ。」

「私も考へてゐるんです。」

「何か學位でも取らうといふやうな考へで研究論文でも書いてゐるんでせうか。阿母や女房に向つてはそんな口吻を洩してゐるさうですが、私に向つては『お父さん』のやうになるよ——なんてからかふんですからな。私にならば困る、私は恰で山師見たいなことをしてゐるん

ですからな。」

「そんなことはないでせう。あなた様のなれば結構ぢやありませんか。」と自分は、この邊で話頭を轉じようと思つて、極力彼の父を推賞した。

「おだてちやいけませんよ、先生！ 尤も了見は私に似て呉れば、少くとも愚圖にはなるまいが——生活は眞似られたくありません、ああして彼方へ離れてゐるのもその分では好いあんばいだとは思つてゐるんです。」

「仕事は中中熱心によつてゐるやうです。」と、これは自分は、思つてゐる通りに云つた。

「彼の女房も、今はまあ、無邪氣だから好いやうなもの、何とか早く彼が獨立でも考へないと、私でも亡くなつた後には困るでせう、私の女房があれで中中の變人としてね、一寸その意地悪るな……身分はその悪い家の娘ぢやないんですが、一寸それを鼻に掛けるといふ風な

……云へばまあ、偽悪者流の——」

「あなたは一寸偽善者流の……」

「どつちに似ても困つたものです、先生！」



「……………」

「嫁が可愛想ですよ。」

さうかな！と自分も思つた。彼の細君は彼の方にゐないで、此方で暮してゐる。尤も當人に取つて見れば、あんな彼の傍にゐるよりは此方の方が好いかも知れないが——。

そこに彼の母が現れて、何かの流儀にでも依るらしい可憐なおじぎをして、

「先生。」と云つた。自分は、何だか醫者にでもなつたかのやうな氣がした。彼は見込みがあるでございませうか？」

何の見込みだか自分には解らない。こんなことなら彼からそれも聞いておかなければならなかつたのに——「大分勉強はしてゐるやうですな。」

「今年もまた試験が駄目のやうでしたら、今のうちに方面を變へさせた方がよろしくはないでございませうか？」

「變へるといふと、どういふ方面へ？」

「先生のお考へは如何でございませう？」

——兎も角自分は、非常に神経が疲れて適はなかつた。

「君は一體母には何と云つてあるんだ、何の試験をうけることにしてあるんだ。」と自分も稍癩癩を起して、晩、二人だけで酒を飲んでゐる時に彼に訊ねた。

「官吏登用試験——」

「……………父には、哲學や天文学を勉強してゐると稱してゐるさうだな？」

「うむ。——それもほんたうのことぢやないか。」と云つて彼は、背後の硝子戸の中のノート・ブックの列を指差した。

「それも、だつて！ ぢや官吏登用試験の方も本氣か？」

「俺は、その瞬間だけには、ほんたうにさういふ氣になるんだ。」

「いつの間にか君の方が正直な人間になつてしまつたな。俺は、君の惡影響を蒙つて他人の言葉を疑るといふ術を知つてしまつた！」

「それは無理もないことだ。」と彼は、勿體らしく點頭いた。

「記者はもう厭か？」



「別に厭といふことはない……」

「兎も角、君も、あまり愚圖愚圖としてもゐられさうもない状態らしいな？ 何かにならなければなるまい。」

「さうだ。」

「細君には何と云つてあるの？」

「あいつには別段問はれたこともないので、答へたこともないが……」

「そいつは一番樂だらう、君は？」

「ところが樂でもないんだよ。目的を訊ねられて何とか答へる時の方が俺は力を感じるんだ。黙つてゐれば、ただそれだけのことでお終ひ——ちや、俺ア心細いんだ。」

「ちや、訊ねさせれば好からう。」

「そんな不自然な眞似は厭だね！」

「ほう！ 不自然な眞似は厭——と？ 一寸待つて呉れ、俺、何だかわけが解らなくなつてしまつたよ……」

「俺も——」と彼は、咽ぶやうに、一氣に盃を干した。自分も、何だか困つて、續けさまに盃を干した。

「ちや君は、ひとりの時はそれに關することは何にも考へないのか？」

「さて？ どうだらう？」と彼は、沈着な様子をして首を傾げた。

「俺には、君は、文學と答へたが——實は俺それは肚では相手にしなかつたが？」

「さうだらう。」

「悪かつたかね。」

「悪かつたね、少くとも親父や阿母の方が忠實な感じだな——」

「あまり忠實なのは、却つて君は困りはしないのか？」

「困らないんだ、そんなに——。困るくらゐなら俺は却つて救はれるだらう。」

「といふが君の顔色には、何らの惱しさも現れてゐない。」——救はれるも、救はれないもあつたものぢやない、何處から見ても神經や思想を持つた人間の顔つきぢやない——自分は、斯う云つてやりたかつたのである。



「あたりまへさ。」と彼は、喉のあたりで重苦しさうにうなつた。不平なら、不平らしくはつきり云つたら好からうに。

「君のことばかりが話材になるんで面白くない、今度は俺のことに就いて話さうぢやないか？」

「俺は、君が美しい！」

「さうだらう。俺は君のやうな學者ぢやないからな。」

「ほんたうだ。……飛んだ破目から俺は、他人の仕事ばかりを研究し過ぎてしまった。」

「そんなに勉強したか？」

「あの通りだ。」と彼は、また背後の硝子戸の中のノートを振り返つた。

「結構だね、俺も此方に来てから少少君の趣味に感染して、多少の研究慾が起つて来たよ——一番君のノートを借りて先づソークラテスあたりから読んで見たいんだ。第一君の家人に會ふ時に具合が悪くつて仕方がない。」

「酒を飲みながら俺の研究報告をきいた方が好からう、ノートは讀み憎いぞ。」

「どつちでも關はない——その方の歴史は大抵やり盡したか？」

「一應——。」

「特に入らうと思つてゐる誰かの哲學があるか？」

「どうせ自發的に初めたんぢやないから慾は出ないが、ショーペンハワーには一寸ひつかかつてゐる——。」

「あの稀代の厭世家か？」

「さう一概には決められないが。——それでも好く君がそれだけの概念でも持つてゐるね」と彼は、酷く感心したやうに點頭いた。自分は、輕蔑されたやうな氣がした。一體あいつは何の程度まで研究してゐるのだらう。ショーペンハワーは就中難解だといふ噂だが、あいつ、そんなところにひつかかつて、頭でも悪くしてゐるんぢやないかしら。何年か前のあいつが銀座などをふらついてゐた姿を想ふと、何としてもあいつの書齋の姿は想像出来なかつたのだが——。

「そんな話も一切止めようや。」と彼は云つた。そして初めて、いくらか生氣のある顔つきにな



つた。他愛もない奴だ。――

「酒、酒、酒、酒！　だが君、俺は決して自暴の感で酒を飲んでゐるんぢやないよ。やけくその不良青年と思つては困るぞ。」

「やけくその不良青年だらう。」

「静かな好い夜だ。――あの沖の方に澤山な灯りが街のやうに點いてゐるだらう――あれは君何だか知つてゐるか。」

「綺麗だね、俺もさつきから何だらうと思つてゐたところなんだ。」

「あれは烏賊釣り舟だ。」

「烏賊は夜釣るのか――」

「灯りで誘きよせるんだ。餌も何もいらなんだ。假針でいくらでも引つかかるんだ。」

「面白いだらうな。」

「然し假針は……俺嫌ひだよ。」

「かかりさへすれば、その方が面倒でなくて好いぢやないか。」

「君は殊の他に現實主義者だな！」と彼は、眞面目くさつて眼を丸くした。それくらゐなこと  
で非難でもされては馬鹿々々しいと思つたので自分は、氣分を反らして何氣なく、

「傍で一度見物して見たいな。」と云つた。

「俺の女房の親父は、あそこへ行つてゐるよ、毎晩。知つてゐるだらう、貧しい漁師だよ、俺  
なんて初めのうちは、自分の親父の舟が眼の先きの闇の夜の海に――さうだ、烏賊は君、月夜  
の晩ではいけないんだ、チョツ、どこまでグロテスクだらう――いや、親父が乗つてゐる舟が  
だね、あんな風に眼の前にチラついてゐたら、それを陸から眺めてゐる娘、即ち僕の女房……」

……

「おいおい、もう酔つたのか。」と自分は、稍顔を擡めた。貧しい家の娘だといふことで、こい  
つ自分の女房を一概に輕蔑でもしてゐるのではなからうか、若しこいつに、少しでもそんな卑  
しい了見があつたら、首根つこをつかんで釣るしあげてやらう――と自分は思つた。（云ひ忘  
れたが、あいつは十一貫足らずの目方しかない瘦ッぽちで、身は軽いが腕力と來たら何もな  
いのに引きかへて自分は、柔道初段で、目方は十七貫より減つたことはない。酔ふとあいつが、



厭に豪壯がるのが自分は可笑しくつて仕方がない。

「それを眺める女房の身としたら、餘程センチメンタルになることだらうと俺は、美しい同情を常に持つてゐたんだが——平氣だよ。」

「それあ平氣だらう。俺だつて、同じことを想像して見ても平氣だね。」

「單に、あの灯を見てゐるだけでも、何か斯う感傷的氣分をそそられんかね、君は？」

「科學者をもつて任じてゐる君が、そんな眼つきをしては可笑しいぞ。」

自分だつて、強ひてそんな心で眺めれば、何か斯う感傷的氣分をそそられないこともなかつたが、うっかり賛同して彼の文學熱でも高ぶらせるやうな仕末になつては大變だと思つた。一體彼は、一見頑固にも見ゆるが他人の言葉で何うにでも己れの趣味を變更させることの出来る性質である。そして、それに或る程度まで熱中することの出来る性質を持つてゐる。それが幸か不幸か？ 自分には解らないが、近頃の行き詰つてゐるやうな生活を見れば、どうしても幸福な存在とは思はれない……などと思つてゐるうちに自分も酔つて來た。あいつの口を塞いで、此方が饒舌つてやらうと思つた。自分は、饒舌ることはあいつよりは拙いが、あいつ見た

いに自分の云ふことに自信のない氣はしない。嘘を云つたなどと思つて後で後悔するやうな驗しはなし。

「それあ、君！」と自分は云つた。どうせ自分は、無學でもあるし、浪漫的の氣分もないから氣の利いたことは云へないが、何とかしてあいつのうはべの氣分を破つてやりたいと思つた。

「心持のだね、持ち次第で、だね——何を見たつて君、感傷に走らうとすれば走るだけのことさ、俺だつて何も感傷的氣分を輕蔑はせんよ、だが君のは何だか齒が浮く——。沖のかがり火に限つたことぢやない、例へば、ここに徳利が一本たつてゐる、凝つとそればかりを眺めてゐれば何か斯う感傷的氣分になつて來るぢやないか！ 食卓がある！ クロースが白い！ お互ひの肴が、お互ひの前に置いてある！ 食ひかけたのもあれば、未だ完全なものもある！ 硝子の一輪さしか！ 白い花が一本ある！ 名は知らない！」

「フリジアだらう。」

「俺はここに斯うしてゐる！ 君はそこにさうしてゐる！ 二人とも少少酔つて來た！——何れもこれも、思へば感傷的な存在ぢやないか。」



「ああ。」と彼は溜息を吐いたが、説伏させられるのも業腹だと思つたらしく開き直つて、

「美的感情が伴はなければ——。」と云つた。

「静物の美を君は知らないのか。」

「君と俺との存在もか？」

「君はふざけてゐる！」と自分は叫んだ。君こそ卑俗な常識的な意識に囚はれてゐる、何んな研究をしてゐるのかも知らないが、君は直ぐに自分本位にするから馬鹿だ！ 憂鬱が聞いてあきれる！」

彼は、がつくりと首をうなだれてしまつた。云ひ過ぎたのかな？ と自分は思つたが、輕蔑の念は一層高まる。かりだつた。だが、困つたことには自分も、そんなことを考へ、そんなことを齟舌つてゐることを、ふと、客観視すると——何だか、うら悲しいやうな、寂しいやうなつまらないやうな氣がして、自分が何かに嘲笑はれてゐる見たいな怖れさへ覺えて——彼のやうにうなだれてしまひさうになつた。

あいつの病氣がうつつてしまつたんだ——うなだれて沈黙に浸つてゐる間に、あいつが云ふ

やうに自分の頭も、ただ無闇にカラツポであるだけだ、嬉しくも、悲しくも何ともない、何だか齟舌つたことは皆な嘘のやうな氣もする——俺も、ノートでも作らなければ居られさうもない氣がして来る、人前を取りつくるふために。

さう思ふと自分は、急に彼が好きになつた、珍らしい親しみを感じた。——酔つて來たのだ。

「俺も君と一緒に勉強しよう。當分ここに滞在することにして——。」

「ほんたうか？」

「少くとも君の家人から先生と稱ばれても、相當の返答が出来る程度まで——君の、ノートで勉強させて呉れ。さうすれば俺は、あの假面の苦しみもなくなり、同時に學者にもなれるわけだからね。」

「だが、あれだけのノートを驗べるのは中中骨が折れるぞ。」

「何かに俺は意志が強いからな。君が二年かかつたところを一ト月で卒業してしまふ——一寸愉快だね、二人の趣味が共通して天文学を論じたり、ギリシヤの哲人を拉し來たつて同じ研究に花を咲かせるのは——」



「それは好い……………」

「文學は君、本気で云つたんぢやなからう。」

「——さうだ。俺には文章は書けない。」

「自分で書くよりは他人の書いたものを讀んでゐる方が何れ程呑氣だか知れんからな！」

「それあ、勿論だね。」

「君、腹でも痛いんぢやないのか？ 元氣がないね。——俺は、素晴しく明るくなつた、當分

は君の弟子だ、先生が。」

「腹など痛くはないんだ。俺も何だか嬉しくなつて來たんだ。——飲むよ飲むよ。」

「俺、今までの自分の無智が急に醜くくなつて來た。ああ俺は、君を訪れて好かつた。先生の苦しみぐらゐはいくらでも忍ぶぞ。」

三

間もなく彼も、花やかに酔つた。自分達は凡てを忘れて、聲をそろへて歌をうたつた。

ところが自分は、十二時過ぎる頃になると急に眠くなつたのである。前からの屈託のある疲れが一時に發したやうだつた。神経をつかふことに自分は慣れなかつたから——。

自分が疲れ出すと彼は、反比例するやうに元氣づいて來た。

好くは覺えてゐない。自分が居眠りをする毎に彼は、ゆりおこして、煩く得體の知れないことを饒舌つてゐた。——「圖體が大きいばかりで、單純な奴だ。」

「もう駄目だ、何と云はれても眠い。」

「だまされるな！」

「えッ？」

「いや、家の奴等をうまく欺して呉れ。」

「それは引き上げたと云つてるぢやないか。」

「俺は、今になつて少うし頭がはつきりしかかつたところなんだがな——」

「……………俺は、もう駄目だ。」



「眼に、しんしを張つてやらうか——冗談ではなく、ほんたうに何かさういふ道具はないだらうか？」

「……………ばか！」

「俺が欲しい、今ではないが。」

「……………」

「烏賊釣り舟が綺麗になつて来たぞ——おい、一寸起きて見ろよ。あんなに澤山にふえた、提灯行列見たいだ。月が出ればお終ひなんだぞ、あいつ等も……………月が出ると烏賊が散つてしまふから仕事は出来ないんだつて……………」

「……………」

「誰か俺を釣りあげる奴はないかね、月が出ないうちにさあ……………」

「……………」

「……………あゝ、俺は、何んにも知らないくせに、たうとうこいつまで欺してしまつたぞ、——チエツ。」

「……………」

「好く眠つてしまやがつたな。……………舌が出せないの俺は参るのさ！ それにしてもまた一つ厄介な破目が出来たのか。俺は、こいつの爲に新しい假面をもう一つ慥へなければならぬ！ 今度は中中六ヶしさうだ。考案の頭もないくせにそれからそれへ何處まで俺は、馬鹿な見得をつくらうとしてゐるのだらう。兎も角、何處かに内證の研究室を慥へなければならぬぞ……………」

「……………未だ起きてゐるのか？」

「おやツ、君は醒めてゐたか？」

「何だか煩くて仕様がなによ……………」

「眠れ眠れ……………もう起さないよ。勝手にしろ。」

「……………」

「一層俺も、舟を一つ借りて、かくれて、あいつらの仲間入りをしてやらうかしら？ そしてなれるものなら、漁師になつてしまつても關はないぞ！ 女房は悦ぶだらう。一寸好いね、こ



んな晩を沖で過すのも……よしッ、さうしよう。だが、こいつの手前を何と取り繕つてや  
らうか、何かうまい口實はないかしら？ 親父や阿母にも内證！ さうだ女房にだつてうつか  
り打ちあけられないぞ、あいつはやがて俺が大學教授にでもなると思つてゐるらしい。一番容  
易いので俺は、あいつには最も無神経な法螺も吹いてある……自信がないといふことは斯  
んなにも惨めなことなのだらうかなあ！ 獨り！ 獨り！ 人間にさへ遇はなければ俺は、口  
笛だけ吹いて濟される男なんだ。——さうだ。」

「……………」

「……………」

「おい、起きろ！ 獨りぢや面白くない。」

「……………」

——あいつは獨りで何時までも何か呟いてゐるらしかつたが、時時激しく揺り動かされるの  
で自分は、すっかり参つてしまつた。何を饒舌つてゐるのかさつぱり解らなかつたが、大方俺  
が趣味を共にしようと申し出たので嬉しくなつたんだらう。終ひには獨りで大聲をあげてはし

やいでゐたらしい、あんな酔ひ方をするなら眠つた方が餘つ程増しだ——今日からは長たらし  
い酒だけは止めて貰ひたいものだ。自分は、もう御免だ。

自分は、空腹に堪へ切れなくなるまで海邊をさ迷ひ歩いた。

四

「先生！ 御散歩でいらつしやいますか？ おひとりで？」

振り向いて見ると、彼の妻君だつた。

「ええ、僕にはどうしても朝寝坊が出来ない性質でしてね。」

「まあ、御結構なこと……」と細君は、酷く羨ましそうに自分の顔を見あげた。

「結構でもありませんよ。斯んな時には退屈で仕方がありません。」

「どうぞ御氣嫌をお悪く遊ばさないやうに……」

彼女は、改まつた言葉を使ふのが酷く息苦しうだつた。一句宛、氣をつけながら、拙い切



口上で、恰も外國人が日本語を使ふやうな調子で話した。彼女は、言葉使ひにばかり氣を取られてゐるらしく、微笑ひとつ浮べなかつた。——「大變に失禮をいたし居ることで御座いますらう。」

自分は、彼女が自身のことにうつかり敬語でも使はなければ好いが——などとハラハラしてゐた。若し誤つて使つても知らん振りをしてゐてやらうと思つた。

「彼の朝寝坊は僕は、昔から知つてゐるから何とも思ひませんよ。なまじ起したつて眼が醒めないうちは夕方まででもムツとしてゐるんだから、却つて厭ですよ。」

「まあ！」と、この感投詞も彼女は無感激に白白しく云つた。「先生にもでございますか、まあ！」

「いや、關はんですよ。」

自分だつて話し様もなかつた。

「只今入院いたしました。」

突然彼女は、そんなことを云つた。相變らず白白しい調子で、きまりきつたことを報告でも

するやうに云つた。

「誰方がですか？」

「夫でございます。」

「ど……どうして？」

「珍しいことではありません、先生がお驚ろき遊ばすといけないから、御様子を見てからゆつくり申しあげるか、でなかつたら急用が出来て四五日のつもりで出かけたが明日にでも歸れば歸るから……」

「そんなことは如何でも關ひません。いや、では僕は少しも驚きませんが、——飲み過ぎで昏倒でもしたのですか。」

彼女の説明によると、彼は時時、誰にも知らさずに、病氣といふ程のわけもないのに、下宿でもするかのやうにふつと病院に入院する常習癖があるのださうだつた。彼に云はせると旅行の代りだなども云つてゐることもあつたさうだつた。——今朝も、病院から知らせた言傳に依ると、うつかり先生のことを忘れて来てしまつたが、此處に来てから急に氣になり出



したから、よろしく傳へてくれといふのださうだつた。彼女は、もう一時間も自分を探してゐたさうだつた。

「ハッハッハ……あいつのやりさうなことだ。」

自分は、言葉では云ひ憎かつたが、何となく彼の心持が解るやうな氣がして、面白くはなかつたが強ひて笑つた。

「で、二三日の間實家の方へいらしつて戴くわけには参りませんでございませうか？」

「いや、それには及びません。丁度私も暇なものもありますから、あそこをお借りいたしてませう。」と自分は云つたが、暇なものこそ嘘ではないのだが、斯ういふ種類の立場が如何に苦しいことであるか！ といふことが次第に細かく感ぜられて來た。そして、その間自分も彼の家人が出入する毎に、彼のやうな芝居をしなければなるまいと思ふと、妙に情けなくなるやうな思ひに打たれた。一寸したハズミが源になつて自分にも一つの首枷がついてしまつた、あいつより他にこの苦しみを訴へる者はないのかと思ふと、直ぐにも彼に會はずには居られさうもなくなつた。

「入院中には、あなたは行くんでせう？」

「参りません。鍵がおりてゐます。」

「友達は？」

「誰方にもお知らせしません。」

「ぢや私も見舞には行かれんわけですか。」

「先生でしたら………」と彼女は、初めて薄ら笑ひを浮べた。見舞といふ言葉を自分がわざと可笑しく云つたのが、彼女にも通じたらしかつた。

「一體何をしてゐるんでせうな。」

「何でも根を詰めて勉強し過ぎると、時々居場所が變らないと、氣分が減入つてしまふんださうでございます。」

「ぢや、仕事を持つて行くんですね。私はまた氣休めにでも行くのかと思つたが——。」

「自分も、空とぼけ方が中中巧みになつたと祕かに苦笑を洩した。

「今朝は、何故か大變に慌てて本箱の中の筆記帳みたいなものばかりをすつかり抱へて参りま



した。」

「大分凝つてゐるらしいですからな。」

さう云つたが自分は、また理由が解らなくなつてしまつた。……だが自分は素知らぬ振りをして、

「梅雨季に入つてゐるんでせうが、未だ少しも雨が降りませんね。好いあんばいと云ふのか悪いのかわりませんが。」などと鷹揚な口調で話しかけた。

「未だ梅雨には入りません。」

「さうですか。ちや今は一番氣分の好い季でせうかな。」

「私は眞夏の方が好きでございますわ。」

「あなたは泳げるのですか。」

「はい、泳げます。ですが母がやかましいものですからこの二三年は泳ぎません。」

「彼は？」

「眞夏になると、海にばかり来てゐます。暑中休みをします。その前の梅雨季が……」

「梅雨季は誰しも閉口ですな。」

「はい。」と彼女は、何故だか涙でものみ込むやうな心細い返事をした。

## 五

自分は、折角暇べようと思つた彼の材料が手もとになくなつたので、ぼんやり煙草を喫しながら彼の机の前に坐つてゐた。——酷く退屈である。あいつも察しない奴だ、入院は好いが何もあんなものまで持つて行かなくとも好きさうなものなのに。

あいつが歸るまで自分は、何をして暮したら好いだらうか！ 自分は、晝寝は好きだから、あいつの留守中ぐらゐの間は、この生暖い潮風に吹かれながらとうとうとしてゐるのも、却つて結構だが、それでは家人達に妙な先生だと思はれるだらう。

自分は、海岸つたひに病院を訪れた。病院と云つても、ただの家みたいに小さい。白ペンキ塗りの平家で、海に面した丘の松林の間に建つてゐる。



「××の見舞に來たのですが——」と自分が受け付けの者に訊ねると、そんな人は居りませんと云ふ。——？自分は直ぐに悟つたから、詳しく彼の容貌とか有様とかを告げると、受付子はクスリと笑つて、

「それは△△さんですよ。」と云つた。思つた通りあいつは變名を名乗つてゐた。なるほどドアには鍵が降りてゐる。

ふと耳を澄すと、何やら低く囁き合つてゐるらしい聲がした。………何だ、ばか／＼しい俺は、あいつの孤獨癖を尊重して綺麗な同情をしてゐたんだが、馬鹿にしてゐる——祕密の女でもあるんだらう、さう思つたので自分は、ふざけて自分らしい咳拂ひでもしてやらうかとした時に、二三人らしい男の朗らかな笑ひ聲が起つた。

「好く眠つてゐやあがる！ 魔睡を嗅がしてもらつたんだつてさ。」

「一體何時旅から歸つて來たんだい。」

「昨日ださうだ。」

「入院中に旅へ行く奴もないね。」

「このノートは、これは何だい。表題ばかり厭に仰山に誌してあるが、字の書いてあるのは一冊もないぢやないか！」

「ハツハツハ、相變らず酷い怠けものだね。この分ぢや今年も落第するだらう。」

「ハツハツハ、どうせ書きもしないくせに、こんなもの要らないぢやないかね。」

「これで案外氣が小さいんだから可笑しいよ。」

「俺も無學だが、こいつの無智には俺、何時かあきれたことがあるよ！ どうして君、彼が××大學の哲學科を、悲觀の上旬退學したかといふことを知つてゐるか？」

「どうしたんだ。勿論ドロップなんだらう。」

「それには違ひないが、馬鹿馬鹿しくて話にもならないんだ。普段、一時間も出席しないばかりでなく哲學とは何ぞや？ さへも知らない、有名な哲學者の名前も知らない。そのくせ圖圖しく哲學の試験にだけは出席したんだ。ショーベンハウエルの厭世觀に就いて、簡單に述べよ——といふ風な問題が出たんだがね。彼は、二時間の試験時間をたつぷり費して得得として出て來た。」



「さすがにショーペンハウエルぐらゐは知つてゐたと見えるね。」

「書けたか？」と訊くと、大いに書けた！と云ふ。——スコペンホルムのことなら俺は相當研究してゐるもの、と鼻を高くして彼が云ふんだよ。」

「スコペンホルムだつて？」

「濟してさう云つてゐやあがるのさ。問題にはだね、ショーペンハウエルの名前が横文字で書いてあつたんだよ。あいつは、それが讀めなかつたんだよ。」

「あきれた哲學學生だね。」

「俺も意地が悪い。知らん振りをしてゐてやつたんだ。あいつは、今だにショーペンハウエルとは別個のスコペンホルムと稱ふ哲學者があるんだと思つてゐるだらうよ。」

「それあ少し残酷だね。」

「第一その科目が零點であつたことを今もつて不思議に思つてゐるだらう——あいつは、あれで自分の書いたものには中中自惚れが強いんだからな。」

「一體その答案には、どんなことを書いたんだらう。」

「どんなことを書いたらう？」

「今度、それとなく訊いて見ようか？」

——自分は、そこまで聞くとかツとした。彼のためにあいつ等と戦つてやらうと決心した。

そんなことを聞いても自分は、何故か少しも自分が彼に欺されたやうな氣はしなかつた。變挺な悪友共が一途に憎くらしくなつた。ああいふのが不良青年の類ひなんだらう。旅へ行つてゐると云つて好くあいつ等を欺してやつた、どうせあいつ等を俺に紹介したつて俺が口も利かないだらうと察して君は、巧くあいつ等をまいてやつたんだらう………

「だが——」と自分は、もう少し彼の周圍のことや、自分とのことに就いて考へて見なければならぬのだが——と思ひはしたものの、凡て面倒臭くなつて、彼のために好意ある解釋ばかりを施した上句、拳を握めると矢庭に力一杯扉を續けさまに毆つた。

「開けろ！ 開けろ！ 貴様達の知らない、俺は彼の友達なんだ！」

自分は、夢中になつて扉を蹴つた。



ランプの便り



「おやおや、もうランプを点ける頃なの、何とまあ日が短いことだらうね。」

すつかり掃除を済してピカ／＼とする臺ランプを抱へたユキ子が、靜かに私の部屋に入つて來たのを見て私は、驚きの眼を視張つて云ひました。ユキ子は、そのランプを私の机の上に置くと、

「點けて行きませうね。」と云ふのです。

「どうぞ——。」

ユキ子は手製のジャンパアのポケットからマッチを取り出して、手ぎは好くランプに火をいれます。

「おお、明るい明るい。どうも有りがたうユキちゃん。」

「今日は晩御飯を皆で、此方へ來て食べるといふ話なのよ。だから窓を明るくして置かなけれ



ばならないわ。」

その窓に灯がともつてゐるのは私が部屋に居るといふしるしになつてゐるのです。皆——といふのは、隣りの町に居る私の家族や何時も其處に遊びに来てゐる弟妹等の友達なのです。

大概私は、晝間、この村の家で勉強して夜になると町へ出かけて行くのが習ひなのです。

私は、この村の自分の勉強室ではずつと昔風のランプを用ひてゐるのです。別段、趣味で使つてゐるといふわけではありません。邊鄙な蜜柑畑の丘のほとりに在る家なので、電燈屋に頼んでも仲仲おいそれと引き込みに来て呉れさうもなかつたからです。尤もその家でも他の部屋部屋には明るい電燈が點いてゐたのですが、私が自分の勉強室に定めた部屋だけは何故か電燈が引いてなかつたのでした。それで私がはじめて其處に來た時に、此處に灯りがなくつては困つたな！と呟きながら、何氣なく押入をあけて見たら、片隅に埃りを浴びた大型の、覆ひに、襪蓋に戯れる胡蝶の彩色が施された臺ランプを見出したので、私はこれ幸ひと、それを私の机の上に据ゑたのです。その覆ひのまはりには雪柱のやうなガラスの房が垂れさがつてゐて、灯をいれると、光りがキラ／＼とそれに反映して長閑な隣きを感じさせるといふ風な工合

が、私を悦ばせました。以前に私の父の友達だつたベンさんといふアメリカ紳士の家族が此處に住んでゐた時に、伊達にでも使つたらしいランプです。

ところが身の廻りの事毎に關しては何事に依らず怖ろしく無精者で、いけぞんさいな私は、油がきれたから油壺に石油を充すとか、芯がまがつたから切り直すとか、ホヤの曇りを拭ふとか、それほどの手入れはおろか、夕暮が來れば目に見えて必要にきまつてゐるにも關はらず、ついつい忘れ放ししておくので、夜になると、出歩きたくなくても、ランプが點かないことを楯にして、遊びに出掛けてしまふのです。

そんな馬鹿氣たことがあるものか、ランプ位ゐのことで大事な勉強を投げ遣りにするなんてあきれた我まま者だ！など、いふ話から、ユキ子が倒倒私のランプ係りになつて此處に詰めかけてゐるといふことになつてゐたのです。云ひおくれしましたがユキ子といふのは、私の妻の従妹で、東京の學校を終へた後に、田舎に來て晝の勉強をしたいといふ理由で、一年ばかり前から私達の家族になつてゐる可愛らしい娘なのです。



「いいえ、これでも、もう今日は一時間ばかり遅いのよ。だつてね、あたし、さつきまでうっかりしてゐたのよ、お掃除をしまして油を注さうとしたら、石油がすっかりなくなつてゐたのよ。」

「それで！」と私は不思議さうに眼を視張つて、あかあかと輝いてゐるランプとユキ子の顔を見くらべました。村には石油を賣る店がないからです。

「困つてしまつて……」

ユキ子は私の顔を眺めて皮肉氣な笑ひを浮べました。石油が盡きたなどといふことを聞くと私は、反つて悦んで、勉強を止めてしまふからなのです。

「そつと、大いそぎで町まで行くつもりで罐をさげて出かけたのよ。」

「止せば好かつたのに……」

「いくら急いだつて町まで行つたら、今の間には合はなかつたでせう、どうしたと思つて？」  
「解らないよ。」

「源さんを思ひ出したのよ、源さんのところで貰つて來たのよ。」

源さんといふのは發動機船の乗組員である若い漁夫です。

「シネラリヤの前で源さんに出遇つたのよ。そしたら源さんがあたしの罐を持つてつて、直ぐに一杯にして持つて來て呉れたのよ。」

「源さん、僕のことを何か云つてやしなかつた？」

私は二三日前村境ひのシネラリヤといふ酒場で、酒に酔つて、源さんに大變な迷惑をかけたことを思ひ出したのです。その日は、ユキ子が町へ出かけて歸りが遅かつたので、例によつて私はランプのせゐにして出かけてしまつたのです。毎日毎日ユキ子がつききりでランプの世話をして呉れるので私は止むなく机に嚙りついてゐたのですが、稀に彼女の歸りが遅いと思ふと私は無性に吻ツとして、たそがれ時になるやいなやシネラリヤに出かけてのうのうと翼を伸したのです。そして私は安息日の兵隊のやうに有頂天になつたのです。あまり調子に乗り過ぎて、



とうとう動けなくなつて、源さんの肩にブラさがつて真夜中に歸つて來ました。

「ただ、笑つてゐたわ。」

私は、氣はづかしさのあまり目が眩みさうでした。

「僕は、當分あのタバンの前は通れさうもない。」

「出かけると屹度、何かしら失敗しなされるのね。あたし姉さんに泌泌と頼まれてゐるんですから、もうひとりで夜お出かけになつては厭ですよ。」

「ランプが點いてさへおれば、出かけるわけには行かないから……」と私は、何となく故意とらしい口調で唸りながら横を向きました。どうしても勵まなければならぬ勉強の仕事が溜つてゐるので皆が斯んなに心配するのですが、祕かに云ふと（明らかに云ふとユキ子達が悲しむからなのですが）私は、恥しい話ですが、机に向つて勉強をするといふことが大嫌ひで、いつも皆と一處になつてワイワイと遊んでゐるのが何よりも好きなのです。

「舟で使ふ石油は、あたしランプになんて使へないと思つてゐたのよ。」

「ランプにだつて使へるさ。」と私はつまらなさうに云ひました。

「さうなんですつてね！ これ——」とユキ子はランプを指さして、舟を走らせる石油なのよ。その石油が、今夜の燈りなのよ。それが、あたし何だか可笑しくつて仕様がなのよ。」と云ひながら、ひとりで笑つてゐるのです。

「僕は少しも可笑しくない。」と私は益益つまらなさうに呟きました。

「お邪魔したわね。皆が来るまで、勉強を続けなさいね。九時頃来るんですつて、それから皆で遊ぶのよ。御馳走は向うから持つて来るんですつて、卓子だけ用意しておくわ。さうさうシネラリヤのキョちゃんも来るつて、さつき花を呉れたわ。キョちゃんに貰つた花で卓子を飾つておきますよ。」

「……………」

私は急に空腹に迫られて、凝つとしてゐられさうもなくなりました。

「それまで、若しおなががすいたら、このパンを少しづつ食べながら——」

ユキ子は私の傍らに石ころのやうな黒パンを一つ投げ出して出て行きました。



私はもう遊ぶことばかりが思はれて、到底机の前などに坐つて居られさうもありませんでしたが、皆が来るまでに私の勉強が一區切りついてゐないと、折角楽しみに遊びに来る皆が何んな悲しみを感じるであらうかと推察して、私は頭が痛くなりました。——だけど私は、唇を嚙んで、日課にいそしまうとしました。

「舟のオイル！」

「明るいランプ！」

「走るランプ！」

私は、そんなわけのわからないひとりごとを呟きながら、涯しもない夢に耽りました。

私は、源さんの舟に乗つてゐます。夜釣りに出かける舟です。晴れた夜空です。

私が誘魚燈を抱へてゐるのです。氣づいて見ると私が抱へてゐるのは、机の上で使つてゐる

ランプなのです。私は、舟が揺れたら消えはしまいかと案じて、有りがたい物を捧げてでもゐるかのやうに神妙にランプを保つてゐますが、餘程靜かな波だと見えて、ランプの炎は眼ばたきほどもゆるぎません。

「でも、源さん、こんな小さなランプで、魚が氣づくでせうかね？」

「小さくつたつて、大きくなつて、灯りは灯りですよ。氣づきますとも、あたし達が星に氣づくよりも機敏に、彼等は、素早く見つけ出しますとも——。第一その、カサのまはりのブラブラが、そんなに綺麗ですもの、悦んで、踊りををどつて集つて來ますとも。」

「もう此邊で好いんぢやないの？」

「もう少し先——向うに見える青い灯がシネラリヤの屋根ですよ、あれが辛うじて見える位ひのところまで——」

「ほんたうに、あんな屋根の灯がこんなところからでも、見えますね。」

「さうですとも——小さいも大きいもあるのですか、この大空の下に光つてゐる灯りならば——。消しちや駄目ですよ。消したらお終ひですよ。しつかり持つてゐて下さいよ。」



「承知しました。決して消しません。」

私は、鱧の横木に腰をかけながら、エチプトの宮に務める燈火係りのやうに嚴然と私のランプを捧げてゐます。

.....

私はそんな馬鹿氣た夢に耽つて、つい勉強を忘れてしまひました。もう皆が来る時分だな！と思ひながら、向方の部屋に行つて見ると、何時來たのか家族の者や若い友達が皆そろつて靜かに私を待つてゐます。

「勉強済んだの？」

「あゝ済んだ。」と私は云ひました。皆が、ワーツと云ひました。氣合を知らしても悪いと思つて咳一つも堪へてゐたのだなどと云ひました。

「橋のあたりから見えるよ、その窓のあたりが——」

「一生懸命でやつてるな！と皆なではなしながら、來たよ。」

「下の道まで來ると、窓に頭が映つたのが見えたよ。」

「腕を高くあげたりしたところなんかも映つたぜ。」

皆は遠くから見た私の窓のことを、いろいろ云ひました。

私は、町の家に来てゐる私宛の手紙を渡されたので、若い友達が、すっかりはしやいでハモニカを吹いたり、蓄音機をかけて踊りはじめたりしてゐる傍らで讀みました。その手紙の中に、今ポストンにゐるベンさんの娘からのエハガキがありました。いつか私が彼女への便りにランプのことを一言書き添へたので彼女のエハガキにも、私のランプがお前のために役立つてゐるのは嬉しい。好き想ひがお前の机の上に集るやうに——などといふお世辭が書いてありました。

「ワルツになつたら、僕も仲間に入つても好いよ。」と私は、若い友達に向つて晴晴と呼びかけました。

「ユキちゃん、オーバ・ゼ・ウェイヴを掛けて御覽よ。ワルツは、たしか、あれ一枚しかなくなつたな？」

誰かが踊りながら、ユキ子に頼んでゐました。



黄昏の堤



小樽は、読みかけてゐるギリシヤ悲劇の途中で幾つかの語學に就いての知識を借りなければならぬことになつて、急に支度を整へて出かけた。停車場の邊まで來ると時間で出るバスが恰度出發したばかりのところ、走つて行くのが行手に見えた位だったので、一層一ト思ひに！と思つて、大膽で歩き出したのである。

彼は眞向うに見える丘を一つ越えた村にゐる友達の青野を訪れるのであつた。少少歩を速めれば、國道を回り道をして行くバスに比べて、此方は一直線に田甫道を寄切つて丘を傳うて進むのだから時間の相違は殆ど同じ程度だらう——などと思つて彼はステッキを振りながら彼方此方に月見草が咲いてゐる夕暮時に近い田甫道を小川のへりに沿うて急いで行つた。秋めいた微風が吹きはじめた頃で、ただの散歩なら至極快い美しい眺めの田園風景のだが、小樽は脇目も觸れずに、上着を脱いでも汗を滲ませながら郵便脚夫のやうに忠實に進んで行つた。青草



が靴を深く埋める程の小徑である。

「途中で日でも暮れたら往生だぞ！」

田舎の夜道に慣れない彼は斯んなことを呟いて、頻りに腕時計と消えかかりさうになつてゐる夕映の空ばかりを氣にしながら、口笛を吹いたりした。

そんな風に彼は道を急いでゐたが、最初の思惑とは違つて、どうやら丘にまでも行き着かないうちに日が暮れさうな模様だつた。

「斯んなことなら明日にすれば好かつたものを——。」

などと彼は後悔したが、今更引返すわけにもゆかない、道の中ばに達してゐた。遙か遠くの山裾にある人家に、もうポツポツと灯などが點きはじめてゐた。

「愚圖愚圖してはゐられない！」

歩きはじめてから一刻だつて愚圖愚圖などしたわけでもないのに彼は、達磨のやうな眼をしてそんなことを呟いた。

「駈ける駈ける！」

不圖、思ひ出すと斯んな馬鹿な話がある。つい此間のことである。遊びに来た青野が、彼に眞面目に、青野の村の村長が或る夕暮時に、さうだ恰度この邊だ！ 小川の流れが左に迂回してゐる水門のほとりだと云つた！——狐に化されて酷い目に會つたといふ凄い話を傳へた。

あの時小樽は、

「馬鹿な馬鹿な！」と笑つて、てんで身を入れて聞きもしなかつたが、今、不意に、その現場のあたりで思ひ出すと、思慮なく寒氣がして來た。青野から小樽が聞いた話の筋書は省略するが、「狐に化される」と云ふ言葉は變だが、斯んな風な精神状態の場合には在り得べきことだ——などと理學士の青野が、それを科學的に説明したことなどを思ひ出すと、すつかり非科學的な頭に今はなつてゐる小樽は、「在り得べきこと」ばかりが無闇に信じられて、脚はもう宙を踏む思ひに打たれてしまつた。

「村長だつて、君、相當の現代人なんだがね——。」

とも青野は、「在り得べきこと」を裏つけたつけ！

「逃げた逃げた、逃げた、村長は、君、こいつはいけない！ と思つたから、駈け出したんだ



よ。自分は、はつきり醒めてゐるわけなんだよ、飽くまでも——。ところが君、土堤が長いこと、そして、珍らしいことには、馬鹿にいろんな人達に出遇ふといふんだ。」

青野が云つた斯んな言葉が小樽は酷く氣になつて來た。

「さうだ、駈けちやいけない。悠然と、しつかり歩かなければ——。」

小樽は、わざと聲を出して、重重しく唸つた。この頃ギリシヤ悲劇などにばかり没頭してゐるので何か小樽の頭の中には、在り得べきこと！ と、在り得べからざること！ との境を超えた夢が、何時も華やかに煙つてゐるといふ風な力弱い恍惚境があつた。それが、彼は突然不氣味になつて來た。

二

漸くの思ひで長い田甫道を突き詰めて、丘の徑道（まじまじ）にさしかからうとする馬頭觀音の祠の前で小樽は一息吐いてゐると、

「あたしの家へ來るの、小樽さん！」  
と、呼びかけられた。

小樽は、冬子だな！ と直ぐに氣づいたにも拘はらず、その瞬間には飛びあがるほど喫驚した。

「冬ちゃんか？」

「あしたあたり東京へ歸らうと思ふので、これから町へ、ちよつと買物へ行かうかしらと思つて出かけて來たところなんだけれど——。」

小樽は冬子の様子をジロジロと驗分した。

「斯んな恰好ちや、歸りに寒いかしら！」

白い上着一枚の冬子は、潮にやけた露はな腕を小樽の眼の前に示した。

「……………」

従兄さんは居る？ と青野のことを聞かなければならないのを忘れて、小樽はキョトンと冬子の姿を眺めてゐた。



「もラ一トあし遅れると行き違ひになつてしまふところ——。」

冬子は小樽が自分を訪ねて来たと思つてゐるらしかつた。——だが、小樽もそれに逆らはずともしなかつたばかりか、

「ほんたうに——。」

と點頭いてゐた。「……そして冬ちゃんは、ひとりで行くの？」

「バスを待つてゐるんだけど、仲仲来ないのよ。田舎の乗物はこれで厭になつてしまふわね。——でもね、あなたが一緒に行つて呉れば、あたしは、却つて歩いて行きたいのよ。どうせ、まだ早いから好いでせう。そして、歸りには一番終ひのバスで……。」

「だつて、この坂から獨りで歸れる？」

「いいえ、あなたが送つて来て呉れるのよ。」

と冬子は、自分の冗談めかした獨り決めを笑ひながら、厭にぼんやりしてゐる小樽の両手を執つて徒ら氣に振つた。

「そんなら、歸りだつて、若し乗り遅れたつて、歩いて来ても好いな。」

と小樽は、夢のやうな心地で云ひ放つた。

三

「青野の家へ着くまでに夜にならなければ好いが——と僕は、さつき、この道をととても慌てて来たんだぜ。」

「何故夜になつたらいけないの、怕いの？」

「まさか——。」

と小樽は口走つてしまつた。

「おなかでも空いてゐるの？」

「決して——。」

と小樽は、青草を蹴つて行く冬子の白い靴がチラチラとするのを視守りながら云つた。さつきはたしかに空腹でもあつた。青野の處に行き着いたら早速食卓に割り込まう！と思つてゐ



た位だつたが、今はもう胸が一杯で、他のことは皆忘れて一途に有頂天の思ひであつた。

「厭アな人！」

「何が厭な人なのさ、え？」

小樽は、仰山に冬子の顔を覗き込んだ。

「だつて……。」

「だつて！ それが何うしたの？」

「だつて、さつきは——いえいえ、もう好いのよ、解つたわよ。」

「御覽な！ 素晴らしい月見草ぢやないか。どら一枝、胸にでもささうかな。」

「今夜は屹度お月夜ね……。」

「平氣だ、斯んな道——。」

小樽は、組んでゐた腕を離して、わざと武張つた足どりで先へ立つたりした。

「歸りにだつて？」

「闇だつたら提燈を買つて來ようよ。」

小川の迂回するあたりの道だつた。夕闇が漸く溢れ終ふせて、向ひ側の岸のあたりでまはつてゐる水車小屋の車の飛沫が白い蝶のやうに見えたりした。

二人の會話が途切れると、肩を組んで、口笛に合はせて鮮やかな歩調を踏んで行つた。

「ね——。」

と冬子が云つた。「ほんたうは、あたし、町へなんか行つたつて行かなくなつて關はないのよ。

さつき、ただ、ああ云つただけだつたのよ。」

「そんなこと何うでも關はない——。」

と小樽は、全く意に介さぬ心地で咽ぶやうに云つた。「僕だつて——。」

「わかつてゐた？」

無論何が何だか解つてゐなかつたが彼は、

「僕だつて、ただ散歩に來ただけのことだつたんだもの——。」などと云つた。あんな用事があつたのだつたが、斯う答へても亦少しも嘘をついたとは思へなかつた。そして、力を籠めて訊き返した。



「明日東京へ歸るといふことは？」

「それは、ほんたう——。」

「……………」

「東京まで送つて呉れない？」

「……アイシスとオリシス——。」

と彼は片手に抱へてゐる一冊の本の包を云つた。「これを今讀んでゐるところなんだけれど——。」

「そんなの、そのまま持つて行けば好いちやないの？ アイシスつて何？」

「……アイシスは娘の名、オリシスは——。」

「戀人？」

「まあ、さうなんだけれど——オリシスといふ若者は酒神を信仰し過ぎて、オリンピアの學藝競技に落第して……。」

「何なのよ、それは？ 喜劇なの？」

「大悲劇——。」

「悲劇ですつて！ 馬鹿にしてゐるわ。ちつとも悲しくなんてありあしない。好い氣味だわ、バツカスの信仰者なんて——。」

「ちや、もう少しその先を聞いておくれ。冬ちゃん。」

と彼は切なさうに云つた。

「止して頂戴よ。大嫌ひだわ、あたし、バツカスだなんて！」

冬子は機嫌を損じて彼の腕を打ち拂つた。

「送るのが厭だもので、あんなことを云つてごまかさうとしてゐるのよ。いいわよ。——散歩も此邊で止めませうよ。」

「御免——。」

と小樽はあやまつた。「止めるんなら、青野の家まで送つて行かう。」

「從兄さんの辭書を借りなければ解らないところでもあるんぢやないの？」

「それもある——けれど、是非讀まなければならぬ本ぢやないんだから、何うでも、何うで



も好いんだ、それは……。」

「馬鹿にしてゐるわ。」

「冬ちゃん——。」

と彼は駈け寄つた。「僕は、何うして好いか解らなくなつてしまつた。」

……と、冬子も突然びつたりと立ち止まつて、両手で顔を覆つた。そして、

「あたし——もよ。」

と低く呟いた。「憤つたやうなことを云つてしまつて、堪忍して……。」

……小樽は、本もステッキも上着も投げ棄てて、冬子の腕をとつて極めてねんごろにささやいた。

「兎も角、町まで行くことにしようよ。ね、冬ちゃん、そして提燈を買つて、この道を歸つて來ることにしようよ。」



春、二三日のこと

春だつた——といふだけのことである。そんな日を特に選んで誌したといふわけではない。日誌を誌す要に迫られて、いきなり、その日のことを書き誌したものに過ぎない。だが、日が経つて、再びそんな稿を繙して見ると、無意識なる、凡凡たる日録のうちにも、何か、再び廻り合せぬかの如き心の媚惑と、「物質の鐵則から釋放されたる宇宙」に向つての止め度もなき靈の推進器の飽くなき回轉の響きを耳にする思ひがする、ただ、それが春であつたがために——  
ああ、わたしは、今日！ 一體、これは何時の年の春だつたかしら？(July 1930)

机に頬杖をして、ぼんやりしてゐると眼の前の腰窓がそつと開いて、冬子の顔が現れた。

「兄さんを知らない？」

「寝てゐるよ。」



私は左手の襖を指さした。

「兄さん！」

冬子の疝高い聲が隣りの部屋に聞えた。

——縁側に立つてゐるのらしい。

「兄さん！」

「……………」

「用があるのよ。——もう直ぐにお午だつてえば！——嘘つき！ 不眠症だなんて——」  
暫くたつて、襖をあけてDが私に訊ねた。

「冬子はもう歸つたか知ら？」

「用があると云つてゐたらしかつたぜ。」

Dは双眼鏡を手にして、窓枠に昇つて海邊を見渡した。

「居る居る、あんなところに——」

私も見ると冬子は、無帽の洋服を着た青年と砂地に腰を降して竝んでゐる。

「Yだらう、あれは？」

「うむ！」

とDは頬笑んだ。

頭から毛布をかむつてDと私は縁側に日向ぼつこをしながら、互ひに分別あり氣な會話をとり交した。

「Sちゃん、何うしたら好いだらうね、若し冬子がYと結婚する氣だつたら？」

「冬ちゃんが君にさういふ許しを乞ふのか？」

「……逃げてゐると云つては氣の毒だけれど、俺だつて、實際、返事の仕様もないんでね、俺が若し反對すれば彼奴は直ぐにでも白白しくなれるといふ風な質だからね。」

「それで君は反對したいのか？」

「馬鹿！ 俺にそれ程の積極性があれば何の苦勞もないんだよ。」

「……………」

私は息詰つて、あかくなつた。そして、鏡を見入るやうに手の平を購めた。



私が、海邊の書齋へ行かないで晝寝をしてゐると、Dが來て散歩に誘つた。

「仕事は何うなの？」

「また途中で嫌になつてしまつてね。」

私が町中を歩くのを嫌がると、Dは、電車に乗つて吾家へ行かうとすすめた。私は、通りがかりの書店で金を借りて自動車で行くことにした。麗かな日和であつた。私は、もう屹度菜の花が咲いてゐるに違ひない畑の間を、Dの村へ行く一直線の街道を、疾走する快を想つたのである。

「俺はもう一週間も歸らなかつたよ。」

「何處に居たのさ？」

「君の、むかうの部屋に寝たり……」

「すつと！」

「東京にも行つてゐたが……」——「君の洋服を着て行つたぜ、少し窮屈だつたが。——どう

も冬子が苦手だ。」

「Yは此頃君の家に泊つてゐるのか？」

「泊つてゐるかも知れない。」

——Dは續けた。——

「……でも悪い心配はないんだがね、冬子のことから。」

——Yは仲卒直な藝術家肌の男らしいね。いつか俺に向つて、いきなり自分はまだもう學校が嫌になつたから君の家に置いて呉れないか、生家とは此頃一切音信不通だなんて云つてゐたが——

「あいつは仲愉快だよ。そして、云ふことに微妙な甘味を持つてゐるね。あいつには相當亂暴に振舞はれても何だか俺は悪い氣はしないんだがね、戀愛沙汰となると少少妬けるな。」

と私は息を荒くした。そして斯んなことを云つた。

「俺は女の友達なんて云ふものを持つたことはないが、そして女の批評眼を持たないが、冬ちゃんも尊敬に値する美人だと思つてゐるよ。Yが學校が嫌になつたなど云ふのも無理はないよ、



他に理由なんてあるものか、Yの奴は冬ちゃんに惚れたのに違ひない。」

「厭なことを云ふなあ！」

「Yならあきらめる。」

と私は呟いた。

「ほんたうか？」

とDは、熱い手で私の手を握つた。

「さうなれば、Yが學校へ行く位の間のことなら一切俺が引きうけたつて何とかなるだらうと思ふんだ。」

「それは好い。」

と私はうなつた。

街道を歩き盡して、鎮守の森を迂回しながらDの村へ差しかからうとする馬頭観音の前で冬子とYに出遇つた。私とDは思はず氣拙い思ひに打たれて愚鈍な眼を視合せた。

「あら、兄さんか！」

「たうとうつかまつた。」

とYが云ひ放つた。

二人は自動車に駆け寄り寄りとした。Dは、私の耳に口をよせて「何だか俺は彼等に面と向つて口を利けさうもない。君、一處に逃げて呉れないか？」と訴へた。

「あの二人につかまらないうちに引返して呉れ。」

と私は運転手に告げた。——だが、車が廻り切れないうちに、冬子が先に乗り込んで、でも關はず走り出さうとするとYは座席の外に飛び乗つてゐた。

「兄さんは、あたし達の結婚に就いてSちゃんに相談してゐるんだつて？ それで、Sちゃんの返事が仲決らないので、あたし達から逃げ廻つてゐるんですつて！ Sちゃんも、Sちゃんぢやないの——随分馬鹿氣てゐるわね。……何といふ邪推深い人達なんでせう！」

「僕は、弱つたなあ！ 弱つたなあ！」

Yは、哄笑をまぢへてそればかりを繰り返してゐた。



私とDは共に、喰ひ過ぎた人のやうに後ろにそつて幌の天井を眺めてゐた、一言もなく――。

222

「……」  
「變な人達だわね！ あたし、あきれてしまつたわ――」

町はづれの私の書齋のある家の前で車が止らうとした時、私が云つた。

「うちに入つたつて仕様がなから、このまま、もつと走つて貰はうぢやないか。熱海の方へ行く道は、今日あたり、斯んな天気ぢや定めし眺めが佳いだらうと思ふが――。Y君は未だ彼方を知らないと云つてゐたぢやないか？」

そこから私の妻も加はつた。

……

俺達は少少、何うかしてゐるのかしら？ 陽氣の加減で――

とDが、そつと私の耳に口を寄せてささやいた。

私には、それがまた難問題だつた。

自動車は、波を遙かの脚下に見降しながら、巧みに曲り曲りして素晴らしい崖道を走つてゐた

――私は、妻の肩に腕をのせて、車がしげしげと曲る毎に、冬子の、白い顔に陽がフラッシュするさまを、うつとり眺めてゐた。そして、冬子が同棲をしないうちに嫌つて戻つて來た、勳章を持つてゐるといふ彼女の、先の、私の見知らない婚約者のことなどを空に描いたりした。

223



籠  
村  
記



窓下の溝川に蛙を釣に来る子供たちが、

「今日は目マルは居ねえのか。」

「居ないらしいぞ。」

などと、ささやき合つてゐるのを聞いた。

さういふ俗稱の蛙があると見える、いつたい何んな蛙の謂なのか——と私は、讀みかけてゐた本を顔の上に伏せて、蚊帳のなかで耳をそばだてた。二三日前に押入の隅から取出した幼児の襦袢蚊帳だつた。この貸家の先住者が忘れて行つたものらしい。洋傘の式で紐を引くと、四ツ手網のやうにパツと擴がるのであつた。川トンボの模様が薄墨色で描かれ、水のすがたが乙字型に流れてゐる。私は、稍々ともするとこんな蚊帳をかむり、手脚を極端に縮めながら、不可能なる夢と争つた。

……「やあ、目マルは寝てゐるんだよ。」

「ほんたうか……」

「水鉄砲でおどかしてやらうか。」



聲だけで私は、あれは岡本屋の倉だ、鍛冶屋の庄だ、酒倉の傳だ——と聞きわけられるのだ。普通に、このあたりでは人の名前を一字に略して呼び、敬稱は付け足さず、或ひは仇名が平氣で通用してゐた。いつも私は、蛙を苛める子供たちを見つけると、窓から半身を乗り出して大聲で唳鳴るのであつた。それ故、村のいたづら子たちとは、次第に敵味方で、彼等は机の前で苦氣な顔つきばかりを保つたまま、主に窓の外ばかりをぼんやりと眺めてゐる私に溝の向うから挑戦して來るのであつた。田舎の子供たちの、悪いたづらや執拗な悪づれは言語同斷で、事毎に私は癩癩をたかぶらされた。中でも倉や傳は、生意氣の司で、聞くに忍びないやうな卑猥な言辭を弄して通りがかりの娘などをからかつた。その癖、成人の姿かとなに面と向つて接すると、はにかみなのか低脳なのか察しもつかぬのであるが、土龍のやうにむつつりとしてしまつて、ものを尋ねても返事もしなかつた。私は坂下の倉の店に飯を食ひに行くので、そして私はどちらといふといつも少年に親しみ深い方なので、酒飲みなどには向はずに、倉の相手にならうとするのであつたが、彼は恰も疑ひに満ちた眼でびつかりと此方の顔を眺めてゐるばかりで斷乎として口を利かなかつた。

「啞なのか？」と私は云つたことがある。

「このガキは内氣なんだよ——。おっさんが錢やるつてよ、倉——。」

母親がそんなことを云ふと、倉は私が錢を與へるまでは動かかなかつた。

親父がバリカンをつかつて倉の髪を刈る時は、まるでドラ猫を絞めるやうな騒ぎであつた。

倉の木槌型の頭は虎斑で、シラクモが蔓つてゐた。

「野郎、もう少し凝つとしてゐねえか。」

親父は首根つこを鷲掴みにして、じやくじやくとバリカンを動かすのだが、屢屢舌を鳴らして頭をはつた。すると倉は、蟹のやうに歪めてゐる顔つきの中で、赤い口をカツと開くと、

「動かずに居られるけえ。ケバが襟ツ首に一杯ぢやねえかよ。拂つたらどうだい？」

などと父親の拳固などは怕れる氣しきもなく喚きたてるのであつた。私はそんな光景を眺めると大概利手の方へ反感を持つのが常なのに、倉の場合に限つては、その顔が歪めば歪むほど胸のすくおもひで、態ア見やがれとでも嗤つてやりたい位だつた。親父が癩癩を起して、もつと力一杯、あのデコスケ頭を擲つてやれば好いのに——そんな馬鹿なことを思ひながら、白



白しく騒ぎを眺めるのであつた。そんなに、どつちも辛いのなら金をやるから理髪店へ行つて来るが好からう——斯ういふことを云ふと親も子も悦んで中止するのであつたが、この頃では私はわざと知らん振をした。三錢でバリカンを借りて來るといふのであつた。

「痛いア——不器用！」

倉が口汚く罵つても、親父はもう別段憤らうともせず、ぶつぶつと襟首の毛を口で吹きながら仕事を急いだ。

「倉、お前えのあたまは、山焼のあと見てえだな。」

「目マルの奴、もうせんには床場賃を呉れたのに、この頃はケチになりやがつて……」

「シラクモさへなければ、俺ンちで剃つてやつて云つてるぞ。」

傳は青い西瓜頭である。すんぐりとした倉と反對に、色艶の悪い腺病質の體格だが、蔭だけでは非常な饒舌なものも拘はらず、やはり決して私には馴れなかつた。そして彼は間斷なく口笛を高調子に吹き鳴らすのが癖だつた。庄は、いつも猿又ひとつの素つ裸で、赤ン坊をおぶつてゐたが、空身の者よりも素早く活躍するのだ。そして喉が自慢で、子守唄の代りに戀歌の俗

謡をうたつた。だが、その自慢は自惚れに過ぎず（尤も岡本屋に集る酔つ拂ひ連は口を極めて推賞し、彼が覺えて來る流行歌に耳を傾けたが——）、まるでカンの違つた金切聲で、私は胸を搔摺られた。

それにしても私だつて、この三人組を特に憎む心などはあり得よう筈もなかつたのに、他の子供たちは次第に馴れて將棋盤や玉ころがしなどを携へて宵のうちには遊びに來るやうにもなつてゐるのに——何故か彼等は、垣の外からはかり遠卷になつて、私の邪魔を謀るかのやうであつた。

「倉たちが途中で待伏せして、石を投げつけるから……」

遊びが済んで歸る刻限になると、斯んなことを云ふ者さへ次第に數を増した。私は手提ランブを點じて、ひとりひとりを門口まで送りに出ると、成るほど暗い畑の中から、石を投げたり異様な鳥の鳴き真似などを擧げて怪しかかつた。傳の口笛と庄の擬聲とで合奏する奇怪な音響は、暗い田舎道に臆病なせみか成人の私でさ慄然とするが如き不氣味な調子だつた。

やがて、溝の上を棒切で叩いたり、石ころを投げつけたりする騒ぎといつしよに、傳は調子



を合せて百舌のやうに口笛を鳴らし、庄は不思議にこましくくれた音聲を張りあげて、何かの  
亂闘の場面でもあるらしい浪花節を唸つた。

「蛙なんて苛めるなッ。やかましいぞッ。」

私は、思はず蚊帳を蹴上げて叫んだ。

「やあ、目マルが起きたぞッ。」

倉の聲だつたが、もう三人の姿は見えなかつた。——目マルとは俺の仇名だつたのか！と  
私は気づいた。さう思つて見れば、さつきだつて倉が目マルの奴が何うの斯うのと喚いてゐた  
が、自分のことも知らずに上の空で聞いてゐたのが、一層私は向つ肚がたつて、

「いい加減なことを云ふな。馬鹿野郎！」

と震へ聲で叫んだ。

青葉の木の間を轉げるやうに逃げてゆく傳が、嘲りの口笛を鳴らし、倉が、

「マル、マル、マル……」

と私の飼犬の名を呼んだ。

「目マルの怒りんぼう。手前えの蛙ぢやなかんべえ。」

彼等は口口に、目マル、目マル——とはやしなから姿は見せぬのだが、それよりも私は奴等  
にマルを誘はれてはならぬと慌てて、

「マルツ、マルツ！」

と痢のたかぶつた聲を發して呼び戻したがつた。マルは振り向きもしなかつた。マルは私よ  
りも餘計に倉たちに狎れてゐた。

「おうい、倉ア。——マルを伴れてつてはいけないぞ。怒りはしないから、マルを置いてつて  
くれ。」

私は寧ろ頼むやうに大聲を發したが、一向に反應もなかつた。私は、凝つとしては居られぬ  
ので、いきなりと上草履のまま窓を乗り越え溝川を跨いで追跡を試みた。

「今日こそは、何うしても奴等をつかまへて、あぶらを絞つてやらなければならぬぞ。」

いつも、さあ仕事をはじめようかといふところになると斯んな騒ぎが起つて、臺なしにされ  
てしまふんだ。これでは恰で、奴等と喧嘩をするために、わざわざ斯んな邊鄙な田舎に家をも



とめたやうな始末ではないか——私は、はじめとする暑さにとり逆せて心底からの憤激に炎えあがつた。

桑畑を抜けると白い街道が、河原へ向つて一直線に通じてゐる。

「よしッ、この道なら何處にも隠れ場はありつこない。追ひ詰めるまでだ。」

庄はこの日に限つて子供を負うてゐなかつた。三人とも猿又ひとつの素つ裸で、跣足で、宙を飛ぶバツタのやうに行手の道に跳びあがつては驅けてゐた。そして、殆どもう顔かたちも定かではない遠方ではあるし、到底もう私などにはつかまりつこはないといふ自信に満ちて、股目鏡を構へて追手を覗いたり、踊りををどつてさしまねいたり、悠悠たる戦人の見得をもつて額に手を翳して眺めまはしたり、大きな髯を腕一杯の大きな八の字にひねりあげる眞似を示したりした。細い傳の姿がわずかに見分られる程度だが、それも入れ交つて、汗の垂れて来る私の眼には確とは判別も適はなかつた。それを彼等も自認してさういふ場合だけ發癢する大膽さと活潑さを縦ままに、様様な悪罵を放つた。加けにいろいろな作り聲をするので、全く誰が云ふのか聞きわけもつかぬが、事毎に、目マルの馬鹿野郎とか、目マルのしみつたれとか、目マ

ルの薄鈍野郎などといふ聲が鮮明だつた。そんな仇名ぐるゐ驚きもしないが、あまりにしちくどく同じことを繰り返されると、酔つ拂ひの嫌味言と差別なく吐がたつて来る。——然し私がそんなに夢中になつて彼等を追ひかけはじめたのは、云ひ後れたが、ただそれだけの憤懣からではないのだ。彼等は私が厭がるほど巧みに私の眼を盗んで、マルを伴れ出すと、途方もない蟲ケラなどを囨にして、ちんちんとか、おあづけなどといふ類ひの藝を仕込まうとするらしいのだ。もともと私は、犬のそんな類ひの藝當は、見るも嫌ひなのだ。加けに同居者と云へば、その犬の仔一匹であるためか、いつの間にか私は餘程の愛着を覚えてゐて、それが、いたづら子たちにとりまかれてそんな藝當を覚えさせられたら堪らぬ——と、私は常規を脱して、迷信的に辟易しさうだつた。ともすれば、タンタレスの拷問にかかつてゐるが如くに自分の上を想像して厭世的になり勝ちの私は、この上眼の前で自分の犬からそんな藝當を見せられたりしては不吉の上も無い——と考へた。第一彼等は決して常套なる餌食を與へようとはせず、蟬などを用ひて、犬の歡心をたぶらかせた。

そればかりでなくマルは未だ確固たる飼犬と定つてゐるわけでもなかつたのだ。



「若し、僕が旅から歸つて來た時に、あなたの方に押れてゐるやうだつたら、そのまま飼ひつづけて貰ひます。僕は、この犬に對して自分の或る運命を占ふ考へを抱いてゐたのですが、再び僕が戻つて來た時にこれが完全にあなたのものになつてゐたら、それはそのなりで、僕はまた新たな信念を持ち直す豫備はつくつてあります。」

若い作家の谷川龍太郎の所存は私の腑に落ちぬところもあつたが、親しい間柄で、作家としての氣儘に關しては、私は常に有無もなかつた。私は彼の幾つかの不思議な詩魂に充ちた作品を傑作として認めされ、その前途に關しては滿腔の期待を寄せざるを得なかつた。——何も彼も打ち棄てて、仕事の旅へ赴くといふ彼がマルを抱へて遙遙と私を訪れて來たのは、未だ私がここに移つて間もない春先のことだつた。あの窓先は一面の櫻林で、花見隊の假裝行列で賑はつてゐたところだつた。その日は丁度、達磨の假裝隊が、バンドの唱歌に節を合せて、腕を振り脚をそろへて身振り可笑しく繰り込んでゐた。櫻林のあちこちからは、行列の練り歩くに伴れてドツといふ哄笑のさわめきが捲起つてゐる。籠目でつくつた眞赤なる大達磨を被つた一隊は、おそらくは達磨も花に浮れて手を出し脚を伸し——といふ趣向なのだらうが、逞ましい腕

を宙に振り、馬のやうに精悍な脛も露はに、節面白く踊り出した光景は、まことに観る者の胸をも浮き立たせずには置かなかつた。

私は、いつものやうな佻しいおもひで窓に凭りかかつて、浮かれ達磨に追ひかけられた綺麗な娘が非鳴を擧げながら逃げ出すさまなどを、うつとりと眺めてゐた。——すると、その目も綾なる花吹雪の中に、何處から迷ひ込んで來た悲劇の主人公であるかのやうな、顔の蒼白い、丈のひよろりとしたひとりの青年が眼鏡を光らせながら、いかにも一心さうに傍目も觸れず人々をわけて登場して來た。彼は帽子もかむらず蓬蓬とした髪の毛を額に垂し、紺紺の着物の胸を大切さうに兩腕で抱へながら夢中で何もかを探し求めてゐるかの様子であつた。彼は常常夥しい近視眼で、眞向のものをねらふやうな前かがみに愴惶しい大股ですすむのが癖だが、まはりがそんなけしきであつたせぬか、その姿が、如何にも危急を告げる非常な人物の動作であるかのやうに私の眼に映つた。私も思はず胸が鳴り出して、

「ああ、あれは俺の友達だ、俺を訪ねて來たに相違ない。」

と呟くのだが、何うしても彼の名前が浮んで來なかつた。彼の作中に現れる様な人物は、



熟れも遠方の夢から霧を衝いて立現れたやうな在り得べくもない姿でありながら、如何にも在り得べき面白さを髣髴とさせるおどけて蒼ざめたる空想の人形だったが——彼のその姿は、やはりはつきりとして、その作中の人物にそのまま見えた。

「多々羅——多々羅……」

私の口を突くのは、彼の或る作中の人物の名前だった。漸く彼は氣づいて、一気に私の窓まで駆け寄ると、

「僕の犬を當分預つて呉れませんか。」

と苦しいものでも吐き出すやうに云ふのであつた。そして赤毛の縫ぐるみの玩具のやうな仔犬を、ふところからとり出した。

「僕が突然斯んなところに來てしまつて、驚いたらう。でも好く居所が解つたものだ。」

私は一年振りかで見ると、久潤を述べる意だつたが彼は、鳥のやうな無表情で、

「ああ未だ、これには名前もつけてなかつたな。しかし何うでも好いさ……」

と何事かひとりで點頭いてゐた。——多々羅雁太といふのが、いつも彼が作中であつかふ眞

面目過ぎて滑稽な人物の名前であつた。雁太は何んなに急ぎの用向で外出する場合でも、玄關先で、ステッキを倒して見て、それが倒れた方向から道を踏み出さずには居られないといふ風な變人だつた。(それ故私は、預つた犬が卑賤な藝當などを覚えてゐる、その上私には餘り狎れてもゐなかつたとしたら、あいつは何んな顔をするだらう——と憂へずには居れないのだ) 彼は着のみ着のまままで生家を飛び出して來たが、仔犬のことだけは忘れ兼ねるので、やがて訪れることの能ふ家に預けて置きたいといふのであつた。彼の家出の因は、勿論その創作生活の奇矯と滯滞からに相違なかつた。

「そして君は何處へ行かうと思ふの、生活のことでは何か目あてもあるの？」

私は寧ろ此處にでも滞在した方が無事だらうと思はれるのであつた。

「やア、しまつた。僕は犬のおかげでステッキを何處かへなくしてしまつたぞ。」

彼は突然カラカラとわらひ、直ぐにまた鹿爪らしい顔に戻つて、

「そんなことは訊ねないで下さい。僕は決して自殺しませんから……」

と唸つた。二三日たつて彼は、酷く手持無沙汰さうに、髪の毛を掴んだり、耳を引つ張つた



りしながら出發した。

「いいえ。このあんばいでは、あしたにでも戻つて来るかも知れませんが、ともかく一つは書いてしまはなければならぬんだ。何も書くことが見あたらぬといふ時は、案外容易く書けるのが、これまでの経験だから。——それにしても自然派はいつの時代でも、美むべく無難なウツの大木だ。」

「君は大分疲れてゐるらしいぢやないか。出發は見合せた方が好くはないのか。」

私が尤もらしいことを呟いても、彼は仕事の夢にばかり一心で上の空だつた。

「ステッキが無い、ステッキが紛失した——と、こいつは案外な辻占にもなりさうだ。」

「それは書けさうぢやないか、君なら……」

「送つて貰ふのは厭だから、ここで失敬します。」

遙かの坂下の河原に電車の終點が見えた。ふところに仔犬を抱いたまま私は、袖を翻して颯颯と降つて行く雁太の後姿を見送つてゐた。櫻の並木から斜めに洩れるまばらな光りが、彼の肩先にこぼれて、花びらと見違へられた。大手を振つて降つてゆく彼は、降り坂に勢ひづいて

泳ぐやうな恰好だつたが、やがて脚並みが駈けはじめると左右の袂が風のやうに擴がつた。

「ああ、あそこに、あんな美しい夢が降りかかつてゐるのに——何うして俺のこの腕の先はそこまで伸びぬのであらう。」

若しかすると彼は、口に出してそんなことでも呟いてゐたかも知れないとさへ思はるるやうに、それともステッキを失つて無性にテレ臭いものか、前の方に伸した腕を空へでも引き掛ける見たいに高くささげたり、ふらふらとする頭を抱へて見たりしながら、一散に降つて行つた。

マルといふ名前は、自分がつけたのでもなかつたがと私はうっかりしてゐたのを氣にして見ると、いつの間にかそれはあの子供たちが呼び出した名前らしくもあり、また、今更もう別の言葉で呼んでも役に立つ筈もないので——などと急に取返しのかぬ後悔に追はれたりした。

雁太があんなにも切なさうな姿で駈け降りて行つた坂徑を、今自分も、あんな憎むべき子供たちにかはれながら走つてゐるかと思ふと、私は何うしても捕へることが敵はぬ無何有の惡意地な夢が、恰もあの子供たちに姿を變へて颯りに現れたのか——そんな厭な聯想におびやかされたりした。



「マル、マル、マル……」

私は犬の名を口にするのも業腹だったが、冷汗を堪へて喚きながら、全く非常な姿の、胸もはだけ、空脛も露はの大童で馬のやうに突貫した。——だが、降り坂に勢ひを得て電車の終點までは一息に達したが、坂の途中から體力に逆つた單なる慣性で止むなく二本の脚が猛烈な威勢で空滑りしたやうなものであつたから、待合室にのめ込むがいなや、ベンチに倒れてフイゴのやうに激しい呼吸のまま目を瞑るより他はなかつた。

「未だ發車までは二十分も間があるよ。」

と注意する聲を聞いた。

勿論敵は取り逃したの云ふまでもなく、漸く身を起した時には、もうその電車も發車の後で、遙かの河下の森蔭に近い停車場で、田圃道を駆けて來る乗客を待つてゐるのが、箱庭の景色ほどに見えた。この電車は、追かけて來る乗客のためには、車掌は煙管をくはへて待構へた。

もう何處を突き留めようにも當りもなかつたが、引返したところで今日の一日は滅茶滅茶に決つてゐる、明日からは犬は鎖につなぐことにして、この一日だけはあきらめよう、少し位

みの藝は覚えさせられたにしても、餌食のことを考へると煉つとするが、今後斷じて放しさをしなければ、やがて忘れるに違ひない——私は胸をさすつて、社のある裏山の社へでも赴かうと思ひ直した。この頃私は、妄念妄想に身を焼かれたり、孤獨の佗しさに堪へられなくなつたりすると、いつもその神社のある社へ赴いた。私は鈴を鳴らし、賽錢を投げて、神前に額づいた。ひたすら私は神の慈悲に祈る心が強かつた。

その社は普段には神官も住まぬ郷社で、私はいつも二三時間も午後の眞晝時を草原に横になつてゐることもあり、時には誘蛾燈を携へて夜間採集に耽つたが、人影に出遇つた例は稀だつた。——前の年の夏、私はこの神樂殿の軒に釣鐘大のスズメ蜂の巢を發見して、隣り村から山を越えて觀察に通つたことがある——いつものやうに神前に向つて熱心なる合掌をなした後に、池のふちに來て蜻蛉を視守つてゐる時、あの痕は何うなつてゐるだらうと思ひ出した。

蟬の聲が空一杯に漲ぎつて、全く耳を掩はんばかりのかまびすしさで、ふらふらと歩いてゐると地からそれぞれ萬遍なく湧いて來るやうな——地を踏む想ひも忘れられさうだつた。で、耳の底が間斷なくじんじんと振動してゐるので、反つて何か別の音響が聞えるやうな空鳴りが



するものか——と私は不圖首を傾けた。然しどうも空鳴りではなくて、神樂殿の裏手のあたりから、ピツピツピツ！と鳴る神樂の笛に似た口笛と、その合間に、たしかに人間の合唱するヨイヨイヨイ！といふ聲がたはつて來るのであつた。——私は神樂殿に登つて蜂の巢の痕が、全く拭はれてゐるのを軒合によちて確かめたりしてゐるうちに、一時止絶されてゐた笛と合唱が、今度は實にも明瞭に、然も神樂殿の樂屋の床下あたりから、賑賑しく湧き上つたのに驚いた。そればかりでなく、芝居の眞似事でもあるらしい仲仲巧者な醉漢の科白などが聞えた。

「さて各各方、酒も大分廻つたやうだから、もう一ト踊りをどらうかえ……」

「それとも犬奴の仕置にかからうかえ……」

……私は楚音を忍ばせて樂屋へ廻ると、賑ひは正しく縁の下なので、床にそつと腹匍ひながら板の間から見た。

アツと！ 私は、もう少しで聲を出しかかつた。あの三人組が眞黒な筆をもつて、眉毛やら髭やら眼眦やらを夫夫大層な武惡面に塗りあげ、後ろ鉢巻のいでたちで、出鱈目な芝居の眞最中である。素裸の上に紙の陣羽織やら鎧に似たものを着てゐるが腰から下は禪ひとつで、股引

や草鞋を履いてゐる態に、墨を塗つてゐるのだ。そのまはりには十名あまりの子供の見物人が眼を見張つてゐた。樂屋の床下は、池の水のはけ口を前に控へて、自づと涼風の吹き抜ける深とした木蔭で、通りがかりの人の眼にも付き憎くく、そのやうな遊事の舞臺にはまことにあつらへ向きだつた。周囲は恰も屏を圍らせた如き繁みの中で、薄明るい縁の下が好適な舞臺になつた。——マルは長い藤蔓で柱につながれてゐた。

「ともかく一喫してからのことに仕様か。」

役者連は汀にどつかりと腰を降した。後向だつた傳が黒い假面をぬいで汗を拭つてゐたが、彼は草で編んだ蓑のやうなものを着て露出する首筋やら手脚は眞黒に塗つてゐた。影が濃厚なので、地面に蹲つた彼等のかたちは巨大な甲蟲のやうで眼ばかりがギョロリと光つてゐた。見物人も吻つと息を入れて、さつきの演劇の凄絶さに見震ひしてゐたが、話の模様で察すると、二人の武者修業者が狼（マル）と闘つてゐるところに、天上から烏天狗が飛び降りて來て、大亂闘が始まるといふやうなものであるらしかつた。

「ほんたうに昔はこの森には烏天狗が住んでゐたのかな？」



見物人のひとりが吐息といつしよに呟いた。

「昔どころか、橋場のグレ天は若いうちに此處で天狗にさらはれたんぢやないか。それであんな阿呆になつてしまつたんだぞ。」

倉が、そんな嘶をはじめると一同は寂と静まり返つた。いつか太陽は遠くの山脈の上に傾いて、脚下の流れの音がさらさらと音をたててゐた。ぼつぼつと歸支度にとりかかる女の子たちも現れた。

「おいおい歸らんでもよろしいぞ。俺達が頑張つてゐるところに天狗が出れば、今の芝居よりも面白い踊りを見せてやるといふものだ。カアーツ、カアーツ！」

と庄が天狗のわらひ聲を立てると、歸途の者たちは悲鳴をあげて逃げだした。

「チョツ、何といふ意氣地の無いガキ共だらう。だが俺たちもそろそろ體を洗つて引上げようかな。」

「まあさ、目マルのマル公に、今日こそはおまはりを覚え込ませて了はうぜ。」

「目マルのマル公が、ハツハ……、目マルのマル公、目マルのマル公と誰かハヤクチで十遍も

云へるか」

「いつそ、マル公のことを目マル、目マルつて呼んで見ようぜ。野郎、屹度聞き間違へて、チンチンでも、ワンでもやるぞ。」

「目マル、目マル……」

傳がマルを呼んで、餌を掴んだかたちの空拳を眼上に示して「ワン！ だ！」と命令した。

マルは、それに伴れて「ワン！」と應へて宙に飛びあがつた。

「チンチンだ——目マル！」

今度は庄が何か喰つてゐる眞似をしながら腕をあげると、マルはきちんと前脚を曲げて後脚で立ちあがつた。そして、クンクンと喉を鳴らした。いつまでもその姿勢で、やがてマルの口端からは涎が垂れた。

「ほんたうの目マルが、これを見たら何んな顔をしやがるだらう。何だ、莫迦にイイ態ぢやないか。」

三人は腹を抱へてゲラゲラと嗤つた。そのどよめきが縁の下一杯に擴がつた。私は何とも名



状し難い薄氣味悪い風にあふられて、思はず胸を浮せた。

「この上、おまはり、を覺えたら河向うの髯ダグが「兩で買はうてえんだ。」

「だつて、ほんたうの目マルがそれこそ目を丸くして怒るだらう。」

「怒つたつてお構ひなしよ。知んねえよと云つてしまへばそれつきりぢやないか。そのうちには野郎だつて、どこかへ引越してしまふヅラな。うちの父ツちゃん云つてゐるんだが、何でも他所者からは鏡を捲上さへすれば構はねえんだからつて……」

「だが野郎、この頃イヤにケチになりやがつて、俺たちには使ひも頼みやがらない。」

「だから彼奴のつもりで、ウンとマル公を苛めた揚句に、賣り飛ばして仕舞うて魂膽なんだよ。御同役、他言は無用だぞ。」

「それツ、もう一遍、ワンだ、目マル！」

「おあづけた。目マル。」

翅をきつた蟬を倉は、マルの鼻先へ投げ出したりした。

「チンチンしろ、目マル。」

マルは矢繼ばやに命令されて、うらたへ廻ると、

「しつかりしろッ！」

と傳が尻を蹴上げたりした。私は彼等の座談の片片をいちいち記憶に止めて忘れ難かつた。私の息づかひは次第に荒荒しく、胸が大波のうねりを湛へて動搖するのを止め難かつた。――

あはや私は、有無もなく飛び降りて憎き奴輩を引捉へてやらうと幾度身構へたかわからなかつたが、目マル目マルと奴等が間斷もなく叫ぶ毎に、マルが諸諾として吠えたり、尾を振つたりするさまを見ると、得體の知れぬハニカミ心が湧いて來て、思はずも眼を瞑つて了つた。

間もなく、彼等は、おまはりの訓練にとりかかつた。さつきの藝當は餘裕をもつて、戯れ氣であつたが、今度は一同は肩肘を張つてマルの周圍をとりまき、棒切の鞭を振つた。

倉が、重々しい口調で――お、ま、は、り――おま、はり――おま、はり――と、蟬をつまんだ手の先で、マルの上に大きな輪を描くのであつた。マルは、倉の腕の先を見あげながら、首だけを動かすだけで、體は未だ動かなかつた。

「覺えの悪い畜生だな。えいッ、斯うするんだい。」



傳はむんすとマルの尻尾を掴んで、回轉のかちをとつた。マルは後脚をすくはれて、横態に轉けた。

「日が暮れてしまふぢやねえか。イイ加減に覚えやがれ——目マル！」

庄はマルの首輪をもつて振り廻した。

なるほど梢のクマ蟬やアブラ蟬のわんわんと鳴り渡る聲に交つて、蝸の、シロフォンを滑るやうな伴奏が八方から襲ひかかつてゐた。その間を縫つて、ミンミン蟬の條條たる餘韻が低く高く舞ひ亂れた。

「しつかりしやがれ——こん畜生奴！」

傳と庄は、マルの首と尻尾をつかんで、轆轤を回すやうに引きまはした。倉は、相變らず仁王立のまま、全身に力を込めて、

「お、ま、は、り、り——おま、はり、おま、はり、だぞ——」

と飽かずに繰返してゐた。犬ばかりが災難かを見ると、今はもう訓練者達の方も餘程の困憊と焦躁にあふられて、冗談ぐち一つ利く餘裕も失ひ、爛爛たる真劍の眼を輝すばかりであつた。

彼等は悉く瀧の汗を流してゐると見えて、眉毛や髯の鬚は流れて顔ぢうはおろか、いつの間にか陣羽織や合羽も投げ棄ててしまつて全身までが眞黒になつて、恰もアフリカ山中の矮人種のやうであつた。倉の刈り立ての虎斑頭と、傳の青い坊主と、棕櫚の葉か何かをしばりつけてゐる庄の頭が、薄暗がりの底で縦横に走つてゐた。鳥瞰である故、顔の様子は一層見わけ憎くかつたが、頭の具合で夫々の姿が私の眼下に出没してゐるうちに追追とそれらの渦巻は勢ひを増して、一體もう連中は何の目的で何を騒いでゐるのか見定めもつかぬ大騒ぎとなつた。人間の唸りか、獸の喚きか聞きわけも敵はぬ奇怪な騒ぎの埒場と化した縁の下は、恰も變化の摺み合ひでもあるかのやうな叫びや、罵りで凄まじい泥合戦だつた。キヤーンといふ犬の悲鳴が起つたかと見ると、

「畜生、引つ掻きやがつたぞ！」とか「うわッ！」とかと喚く人間の聲が梢から梢に陰陰と反響した。

マルは汀に投げられた餌を目がけて飛びついたが、網がとどかずに、仰向態にもんどりを打つた。



「食はせるぢやないぞ。——こつちへ投げろ——目を廻させて、お辭儀をさせてしまへ。」  
「尻尾をもつて、力一杯引すり倒せ……」

……マルは連続的な叫びをあげた。蟬の聲が此處を先途と鳴り響いて、森全體は世にも騒然たる狂躁音をはらんだ一個の共鳴箱と化して、今にも破裂しさうであつた。私の額からはじりじりとあぶら汗が流れて、もう目も見開いては居られなくなつた時、不圖私は、この巨大な共鳴箱が悪魔の騒ぎを抱いたまま、ふはふはと天へ浮きあがつてゆく心地に誘はれたかとおもふと、やがて打上花火の弾丸のやうに一直線へ天上へ向つて飛びあがつた瞬間、それは轟然たる音響と共に爆發した。それと同時に私は、あらん限りの聲を振り絞つて、  
「わあーッ！」

とばかりに叫ぶや、天狗のやうな羽ばたきをたてて、神樂殿の樂屋から、池のふちへ飛び降りたのだ。全く夢中の動作といふより他はなかつた。——そして私は、私のよりも凄まじい、わあアーツといふ悲鳴を感じた。

——見ると、眞黒な矮人種は、仰天のあまり、一齊に尻もちを突き、ギヤツ！ とつぶれた

かとおもふと、一刹那、ぴかりと眼をむいてゐたが、忽ちもう一遍、びよんと跳ねあがつて、目を醒すがいなや、更に、わッ！ と叫んで、狐よりも素早く風をくらつて逃走した。

——私は、追跡も適はなかつたのだ。また、そんな氣力もなく、別段に彼等を敵と攻めて戦はうなどといふ念力はさつぱりと消え去つてゐた。そして私は、ただ極端に異常な亢奮のあまり、五體も六感も海綿のやうにしびれて、脚腰もたたなかつた。

マルは、柱につなされたままグルグル巻きの自縛の繩に悶えて、パウパウと吠えたりしてゐた。逃げて行つた者共を憶むけしきもなく、切りに、その行方へ向つて吠えたり、何故か私の方は見向かうとしなかつた。

雁太が来るまでに、俺は何うしてもこの犬を自分のものとして押してしまはなければならぬ——私はそんなに思ひながら犬の傍らへ匍ひ寄つて行つた。それにしても、何とかして別の名前を改めて、つけたいものだ——と考へて、蟬の聲が益益落日の蔭でピッチを競うてゐる梢を見上げた。すると神樂殿の樂屋の軒先から池の上へ翼を伸してゐる百日紅の枝に、白つぽい浴着が一枚ふはりと懸つてゐるのを發見した。ヒヤリとして見直すと、それは今まで着てゐた



痴  
醉  
記

自分の着物で、私は裸であつた。帯はいつもゲルゲル巻なので、いつ何處に落したか覚えもなかつた。



J・K兄

「シブリア人と處女の話」の作者の名前は解らぬだらうか？　そして、矢張りこの作が、吾吾の悪魔を、作品のうちにとり入れた世界での最初の文藝作品であらうか？　それから「シブリア人と處女の話」といふのが本来の題名なのか、それとも「アグリタスとジャステイナ」が原名なのか、君の意見を訊きたい。アグリタスはジャステイナを意に従へるために終に悪魔の助力を乞ふのであるが、それも無駄になり、アグリタスは悪魔との規約を破つてその洞窟を去り、全く孤獨でジャステイナを訪れるのだが、悪魔は彼の變心を怒つて、何と叫ぶのであつたかね？　その罵りの言葉を是非とも訊きたいのであるが、不明であつたら君自身の創作で、その言葉を僕に與へて呉れ。

——僕は、憂鬱で堪らない。



K兄、また書くよ。

「シブリア人と處女の話」の次に吾等の悪魔の現れる作品は「ガンデルシヤイム寺院の會計係テオヒラスの誘惑」であらうか？ そしてこの作品は朗讀に價する韻文詩の由であるが、誰かの和文譯文はないだらうか。僕は、テオヒラスが職を失ふてシシリアの街を慟哭しながらさ迷ふところを、今日のやうに貧しく寄邊ない心の日に朗讀したならば定めし意に添ふであらうと思ふのだよ。

ホロース・ウキーサから、一六三七年のカルデロンの「或る魔術師の話」に至るまでの間には、一五〇七年のヨハネス・トリテミアスの書翰集、一五四八年のヨハンガストの「備忘録」マリニアスの「日記」、一五八八年ウキールの「彼との交遊」一五九九年ウイドマンの「ファウスタスの手記」等で、實在のファウスタスの傳記、逸話が集められてゐるが、彼を題材に選

んだ文藝作品は一つもないのかしら？ この間は文藝の没落時代だったのかな？

僕は讀んだ——

バイロン「マンフレッド」

ヨハネス・スパイス「ファウスタス傳」

クリスト・マロウエイ「ファウスタスの悲惨なる傳記」

レツシング「ファウスト」

ゲーテ「ファウスト」

ツルゲネイフ「ファウスト」

等と僕は、薄曇りのした空を見あげながら指を折るのであるが、未だ未だ澤山の脱落があることだらうな、ファウスタスに酷似した人物が登場する作品に關しては——。

悪魔との契約書は、紀元十三世紀以後に於ては、必ず血をもつて認めらるべく規定されてゐる由、君も僕も悪魔に従ふて、先づ第一貧困と戦ひつつあるが、僕は契約時の文面が成りたたぬのである、血は斯の如く惜まぬ者であるが——。



僕はこの頃、この部屋か或ひは「多くの人人は多様な彼方に赴くべし、而して知識は増さるべし」とか「自然界に向つて吾等は吾等の意見を押賣する」とかといふ厭に勿體振つた意味からANTICIPATIO、MENTISといふ屋號の、仲仲もつてエロテックな酒場に自分自身を見出さぬ日は、主にG・L・マイアム氏のレントゲン・スタヂオに出入してゐる。彼は、一言にして云ふならば、ベーコンの所謂「其自體に於ては弱小にして無要となる」——の「哲學と科學の王國」に兵士となつて、レントゲン映畫といふものの完成に没頭してゐるファウスタスの後裔である。

## 三

酒場「ANTICIPATIO」にて。

「J・K兄——」

とまた私は外國の友達に手紙を書いた。

「昨日、マイアム氏のスタヂオで、ファウスタスに關する挿話を見出したから通知する」

例のローマンカトリック派のヨハンガストの手記のうちに次のやうな一節があつた。

（私は一五四八年の復活祭の前夜バジル神學校の寄宿舎で彼と食卓を圍んだ。その時彼は私に、我國では決して見ることも許されぬ珍奇な鳥類の料理を御馳走した。私は、禮に充ちた言葉をもつて、如何して斯る鳥類を手に入れたかと云ふ質問を發すると彼は、怖ろしく不氣嫌な顔をした後に、やがてその兩眼に涙を溜めたまま黙つてしまつたので、私もそれ以上に追求するわけにはゆかなくなり、同時に、出所不明の食物は神の掟に従ふて口にするわけにはゆかなくなつた。すると彼は、間もなく氣嫌を取り戻し、朗らかな音をたてて掌を打つと次の部屋から、一頭の馬と、一匹の犬とが現れた。彼は、非常に得意さうに胸を張り出して、それらの動物を指差し、彼等は何なる類ひの事柄であらうとも自分の命するところであるならば決して逆らはず自分の最も忠實なる下僕である、貴兄の眼前で働かせて見せようか——などと吹聴したが、これも私としては神の掟に逆ふ事柄である故辭退した。が然し私の親友である天文學者のギオラヒラスは、彼がこの二頭の従者に命じて炊事の用をなさしめつつあるさまを見たとき



に傳へた。

(翌年の冬彼は悪魔に絞殺された。)

次の一文はスポンハイムの寺院長ヨハネス・トリテミアスが一五〇七年度中の書簡で、友なる某検査官に送つた通信文中の一節である。

(ジオルジマス・サベリカスなる人物は戸籍なき漂泊者にて、自ら魔術の王と稱して、神聖なる教理に戻る奇怪不埒なる説を流布し回る惨めな悪漢であります。この者、去月ガイレンヒーゼン市に現れ、同市の公會堂に於て、「キリストの奇蹟驚くに足らず」及び「哲人プラトン並びにアリストートルの著書を盡く焼き棄てるも、余の腦裏より容易に之を供するを得べし」なる二題目のもとに、十時間に互る講演を行ひたる由を同市の僧侶より聞きましたので、早速會見を申込みましたところ、小生の到着を待たずしていちやく遁走しました。その節彼が道道にポケットよりとり落したる名刺を拾ふた者の言に依りますと、彼は八通りの偽名を有し、その中にはファウスタスなる文字も見うけられたさうでございますから、勿論お訊ねの不埒なる科學者と存ぜられます。そのおつもりにて追跡なさるるやう至急お取り計らひなさるるが適

當と存ぜられます。)

(僕は當時彼と友達であつた。)

これはアンスパツハ市に當時在住した物理學者マリンスの、彼に關する述懐録の一部分である。

(彼はクンドリング生れで、クラコウの大學に在る頃より魔術に通じ、漂泊的學者となつた。彼は、何時も名状すべからざる憂鬱な相貌で、様様な不思議に就いて高言するのが癖であつたが、數年前ベニスに現れた時に、空中飛行の實驗を示すと吹聴して、或る烈風の凄まじい日に高塔の頂きから空中に舞ひあがり——その時彼の五體は突風に巻き込まれて空高く飛び、大膽にも悠悠と落着き拂つて三態の悪魔の姿體を示したので地上より遙かに見あげる者の眼には、正しく奇蹟の驗證なりと見られたが、忽ち運河の中に墜落して人事不省に陥つた。その後數年經て、ウンテンベルグの旅館に、更に驚くべき憂鬱な相貌で立現れたので、主人がその故を問ふと彼は、ただ一言、眠いのだ——と答へたのみ。そして、深夜になると突然凄まじい家鳴りが起つたので、宿の主がその寢室に来て見ると、彼は寢臺の傍らに俯向に伏して、悪魔のため



に絞殺されてゐた。)

——さよなら。」

と私は慌てて書いた手紙の封をしてしまった。私はこの手紙をもつと續けたかつたのであるが、宇宙の神祕に目眩んで昏倒しさうになつたからである。私は、論理的抽象觀念の超感覺圈から、惡魔に對する贖罪金を支拂つて、精神生活上の最下級の安住地であるべき可見世界に渡りをつけて再び矛盾と闘ふべき情熱に缺けてゐた。私は、私の恩師が、クラシカル、ヘレニズムの極美を讚嘆して、

「あれらの自己に對する信賴、現在の可見世界に於ける精神的創造の活動、祖先としての神神への純粹なる崇拜、藝術品としてのみの神神の讚嘆、力強き運命に對する歸依」——等の讚嘆詞に於ける神神を、鬼神デモイオネンと訂正して、自身の蓋然思想プロバビリティと争はずには居られなかつた。私は、私のファウスタスを再生せしむる爲にはセラピスやイシスの祕法を受得して、彼を絞殺した文明宗教と戦ひながら、怪奇な、そして華麗なる混沌藝術の地獄へ導かしめなければならなかつた。

「何うなすつたの、獨りで、お酔ひになつたの？」

ヘレンが私の肩に凭りかかつて訊ねるのであつた。彼女は、この酒場を訪れる多くのアグリタス達の「ジヤステイナ」である美しい酒注娘である。

「俺は、絶望の盃をもう一杯重ねる。そして、お前は、あのオルガンの前に坐つて、マルシアス河の悲歌を弾いて呉れ。」

「死んではいけないよ。——向方の隅にゐるお客様が、さつきからあなたの様子を見て、あれは何處の役者なのか、餘程六つかしい役でも配られたと見へて、可哀想に、酒場に来てまでも稽古に夢中になつてゐる、何を、何時、何處で演るのか訊いて来て呉れ——ですつてさ。……それはさうと妾は揅つたくつて仕方がない、あのグロキシニアの花鉢の蔭からモノクルをつけて凝つと此方を視詰めてゐる生眞面目さうなヴァンダイキの髯紳士が居るでせう、あの大學教授つたらお酒は一杯も飲めないのに毎晩妾のために此處に来て、何とかして妾の隙を見はからつては、妾の首筋から幾粒かの南京豆を妾の背中の中へ落し込んで、ああこれでさつぱりしたと眩きながら歸つて行くのが、道樂かと思つたら研究なんですつて！ 今も、うつかりしてゐたら、いきなりそれを背中の中へ投げ込まれてしまつたのよ。揅つたいと云つたらありはしな



い、とても凝つとしてゐられないわ、ね、一處に踊つて呉れない。」

「南京豆の一粒が、この床に落ちる時の微かな音が聞えるでせうか？」

と私は教授に質問した。すると彼は娘の一瞬の動作をも見逃すまいと眼をそばだててゐるところだったので、極めて迷惑さうに、軽く黙頭いただけであつた。

「先生——」

と私は、ワグネルもどきの聲色で更に言葉を續けた。「私は先生のやうな大學者と言葉を交すことが出来れば、夜を徹するも敢て辭さぬ者です。明日は復活祭で御座いますから、何卒あと二三の質問を御許し願ひたいものです。」

「……………」

「空に星あり、卓上に一個の薄暗きランプあり、一杯のほろ苦き酒あり、然して一冊の鍊金術教科書あり——さて、悲しめる詩人は孰れを選んで天の……………」

「おお、ヘレンの裾から南京豆が一つ滾れ落ちたぞ、わしは何を措いてもあれを拾ひあげなければならぬ。わしは、あれらの種子を拾ひ集めて、温室のフレイムの中に播くのである。わ

しはセラピス教の信者である、火烙りされた諸諸の種子も一度び神聖なる處女の肉體に温めらるるならば、再び芽を生じ、蔓を伸し、蔓は終に天上に達して神と人間との間をつなぐ實證唯理の綱となるであらう——の教義に基づく萬有神正論の信者である。見失はぬ間に拾ふて來なければならぬ、腕を離して呉れ給へ。」

「有り難う、先生。私も今、この鍊金術書はストーヴに投げ込みランプは吹き消し、門戸で私の出立を待つてゐる馬は氣儘な野に追放してから共に先生の仕事を手傳ひませう、そして私は私のファウスタスに貴重な種子を服用させてやらなければならぬ。」

「馬鹿なことを云ふな。あれを貴様に拾はれて堪るものか、この悪黨奴。」

「では、この審きは私達のヘレンに頼むことにしようちやありませんか。」

「悪魔の弟子野郎——神正論者の修業を邪魔だてすると、劍を抜くぞ。」

「恩師ファウスタスの命のためとあれば、寧ろそれは此方の願ふところだ。私は、斯る祕薬を索める機会に出遇ふために、このやうな惱ましい面貌を永年保ち續けて來たのだ。」

「ああ、わしは飛んでもない盗人野郎に、懐ろの中へ飛び込まれてしまった。何故俺は口を慎



しななかつたのだらう。」

私達が、鼻と鼻とを衝き突けて争ふてゐると、

「何て、まあ煩い漁色漢達だらう。ああ、面倒だ、燈りを消してやれ！」

とヘレンが叫んだかと思ふと、忽ち部屋は眞暗闇になつた。

二人は、思はず、アツと叫んで、床に四ツん這ひになつた。そして口口に、俺はダイアナの犬だとか、俺はフアスタスの馬だとか呟きながら祕薬の在り所を訊ねなければならなかつた。

「暗いうちに、ひとりで野蠻な踊りを踊り抜いて、背中の探つたい南京豆を振り落してしまはなければならぬ。」

と呟きながらヘレンは輕妙な靴音をたてて彼方此方と飛びまはり始めた。

「ヘレンは、一體何んな踊りをおどつてゐるのだらう……この靴音で想像するやうな踊りを、わしは未だ嘗つて明るみのうちで見たこともないが……」

眞夜中のやうな静寂の中で、教授が斯う唸つた後には、全くその靴音から娘の動作や表情を想像するのは困難である。恰も小聲で何事が囁くかのやうな微妙な甘美さに満ちた靴の音が響

した。

「ああ、俺は、この儘で満足だ……」

私は、一度ソファの上に這ひあがつたが再びドタリとだらしなない音を立てて床の上に轉げ落ちると、絞殺された悪魔のやうに下向にのめつてしまつた。(神が、悪魔の屍を上向きに置かざらしめぬのは、神が、吾らをしてメフィストの奴僕たらざらしめんが爲の誠めなり——と神學者ヨハンガストが、バジル神學校でフアウスタスに會見後、悪魔に絞殺された彼の屍の位置を指して、その談話録の中に述べてゐる。)

絶望の盃であほつた酒の酔が、にわか目眩ましい渦卷になつて私の五體を得態の知れぬ恍惚の空に導いた。私は、ヴェニスの中で三態の悪魔の姿體の見得を切つたフアウスタスの夢を追つた。……さあ、そこで、眞つ逆さに、水の中へなり、泥の中へなり轉落するのを待つばかりだつた。

私は、靜かに瞑目した。生温い風を切つて圓筒のやうなものの中を一散に轉落して行く氣合は、はつきりと解るのであるが、一向奈落の底に達しないではないか——などと遠くに娘の靴



音を聞きながら考へてゐると、不圖眼蓋の裏がぼんやりと明るくなつて來た。

シェードの周圍に氷柱のやうなヒラヒラがついてゐる古めかしい臺ランプが點つてゐるのだ。私は永い年月の間田舎のうらぶれた村の書齋で、このランプを點し、このやうな眼つきをして、未だ見ぬ花やかな世界に憧れながら孤獨の歌をうたひつつけた。あの、ランプではないか。私は、破れかかつた重く憂鬱な手風琴を取りあげると、重味を補ふための皮のバンドを十文字に背中に結びつけて、「奴隸の夢の歌」や「インヂアンの嘆きの歌」を演奏した。そしてまた「七つの星の歌」や「鍊金銀冶屋の勞働の歌」や「翼ある馬の歌」などを歌つて情熱の空を駆け回つた。嵐の晩には「メフェイストフェレスの登場歌」や「ジークフリード遠征の歌」を高唱して奇怪な幻と闘つた。また私は「早稻田の歌」や「バツカスの行進曲」を演奏し、意氣に炎え、終には狭小な可見世界に居たたまれなくなつて、春先きの或る日、歡樂をもとめて蜂のやうに都へ登つた。

斷末魔の瞬間には、過去の様な経験や人物を一時に思ひ返すといふ話であるが、私もこの時、今にも息が途絶れてしまふかと思ふと、そんな他愛もないランプの周圍に集つた過去の様

様な自分の憧れに満ちた表情が次々と現れては消えた。薄暗いランプの蔭で、おまけに飾りの氷柱がちかちかと光りを反射するので、表情の凹凸だけが暗闇の中に、明暗の線がくつきりと強い大寫しになつてぼんやりと浮び出るばかりであつたが、孰れもあの村の部屋にゐたままの自分の姿だけである。それにしても様な憧れに満ちた表情の動きは、同じ顔かたちでありながら何と底深く洞ろな相違に充ちてゐることであらう！ などと感心しながら私は、今床に打ち倒れてそんな夢を追つてゐる自分の表情を想像した。

#### 四

次の晩私は机の前で、何うしても先へ進むことの出來ない書きかけの小説原稿を破き、

「ああ、もう今年も暮れる。」

などと呟いてゐるところに、友達の酒木と鱒井が訪れて、

「これは日本一の美酒である。」



「味つて、賞めて貰ひたい。」

と一本の酒壺を差し出した。

「何といふ名前の酒？」

と私が訊ねると

「メイコン、迷へる魂、迷魂。」

と得意氣に答へた。

「何うして君はそのやうな銘酒を手に入れたの？」

私は、ヨハンガストもどきの口調で質問すると、二人はそのいはれを詳さに説明したのだ、私は納得して、共に健康を祝福する盃を高く挙げたのであるが、それはまあ何といふ不思議な酒であらう、常常強酒をもつて自認する私が、三つ目の盃を挙げた時は、もう魂が何處かの空へ飛んでしまつてゐた。

二人は、私が近頃ファウスタスにのみ現を抜かして、悪魔に絞殺されかかつてゐるのを感じて、ベルザックその他の自然派の作物を讀むことの忠告と、近いうちに共に小旅行を試み

ようではないかといふ相談に來たのであつた。

私は、それらの事を非常に賛成して、更に「迷魂」の盃を重ねた。そして、もう今日限りだと稱して私は、ハインリッヒ・ヒルゼルの書中にあるファウスタスの、各國の朝廷を遍歴する冒險旅行談を試みたさうであるが、間もなく私は熱に浮されて、ポロポロの部屋着のまま散歩に出かけた、呪はれた私は、二人の友達と何處で別れたのか更に記憶がなかつた。

「先生、私は「迷魂」と稱ばれる銘酒を服用して、適度に酔ふて來ました。間もなく私は自然派の作物を携へて旅行に出かけます。——今日は、お名残りです。」

そんな夜更けでも未だ研究に没頭してゐるマイアム氏のスタディオを私は訪れてゐた。

「おお、恰度好いところに來て呉れた。ヘレンが助手になることを承諾して、さつきから仕事にとりかかつてゐるところだよ。」

と云ひながらスキッチを入れると、目の前のスクリーンには一個の人體が現れた。レントゲン光線の中に現れた、その人體はスバルタ風の體操を始めてゐた。

マイアム氏は、やがてこれを映畫に完成しようといふ心を砕いてゐる前の晩もあの酒場で私と出



遇つたあのモノクルの教授である。自分は撮影技術のことばかりでなく様様な骨格の運動状態を見極めなければならぬのだ。やがて自分の期する撮影機が完成すれば白晝凡ゆる場所に野外撮影に出かけて一切の生物の運動上の骨格状態を撮影しようと思つてゐるのだが、それまでは、この當り前のレントゲンで種々なモデルを頼んだ上で、標本を撮つてゐるのだが、その標本畫のうちに未だ酔漢の運動状態だけが不足してゐる——と彼は兼兼私の醉態が稀に見る奇體なものであるからモデルになつて欲しいと望まれてゐた。そして私もこれまで幾度か酒をあやつて、この不氣味な光線の中に立つたのであつたが、何時の時でも私はいざといふ段になると酔が醒めてしまつて失敗に終つてゐた。

スクリーンの人體は、スパルタ體操を終ると、右手をあげて此方をさしまねいた。

「ヘレンが君を招んでゐるんだよ。」

G氏が斯う云ふので、私がスクリーンの向ひ側に入つて見ると運動シャツ一つになつて立ちただかつてゐる綺麗な彼女に出遇つた。

「まあ、好く来て下さつたわね。」

彼女は私の姿を認めるがいなや、いきなり私の首に抱きついて悦びの××を浴せた。私が斯んな好意を彼女から享けたのは初めてであつた。

「妾、もうさつきから心細くつて仕方がなかつたのよ。」

と彼女は私の耳にささやいた。「あの先生は、ただの變質者に違ひないわ。活動寫眞を撮るなんてことは皆な嘘ぢやないのかしらと思ふわ。だつて、妾を斯んなところに立たせて、踊らせたり、體操をさせたりして、自分は向方側で黙つて見てゐるだけなのよ。」

「技手は、今夜誰がやつてゐるのだらう。」

私が、それを務める時もあつたので訊ねると彼女は、

「そんなこと誰だつたか氣がつきもしなかつたけれど……さつきから彼のやつたら、昨夜妾が酒場で燈りを消してから、何んな踊りを踊つたか、それを是非見せて呉れつて諸かないのよ。」

と情けなさうに述べた。私は、G氏が彼女の云ふやうな平凡な變質者だなどとは思ひもしなかつたし、だから、先生は決して娘ばかりに興味を持つてゐるわけではない、僕の醉態に就いてなどもこれこれの關心を持つてゐると説明しようかと思つたが、今の彼女の言葉に私は



強く胸を打たれて、

「そして、踊つたの？」

と胸を震はせて訊き返さずには居られなかつた。

「だつて別段踊り様も何もありやしないわ。妾は、ただ昨夜だつて、あの時、出たら目の踏みをして南京豆を振り落してゐただけのことなんですもの。」

「……………」

私はG氏の胸中を推察した。そして、闇に描いた夢を飽くまでも實現させようとするG氏の熱心に同情と敬意を拂つた。

「ただ、斯うやつただけなのよ——と云つて妾は、仕方がないから烏賊が泳ぐ見たいに體をくねらせたり、繩飛びをする時のやうに飛びあがつたりするんだけど、お前は私を欺さうとしてゐるなんて云つて、何うしても信じないのよ。」

「……………ヘレン、近いうちに僕達と一處に旅行に行かないか？」

私は、何う云つて好いか解らなくなり、胸苦しくなつたので話頭を轉じた。

「ええ、行くわ、妾、あの先生のモノクルから逃れられるんなら何處へでも行くわ。」

「さうか——」

と私は腹の底で唸つた。そして私は祕かにG氏のモノクルを盗みとつたかのやうな怖れを覺へながら

「ちや約束しよう。温泉のあるスキー場へ行かうぢやないか……………」

と誘つた。

「ええ、はつきり約束しませう、先生に聞えないやうに——。嬉しい！」

とヘレンは思はず私の胸に顔を埋めた。

スキーと云へば、さつきヘレンが泳ぎとスキーに就いて経験があるとG氏に云ふと、G氏はおお自分は未だそれらの運動状態の標本も撮つてなかつた、それを頼むと云つて、本物のスキーを穿かせられて、幾通りもの姿勢や、また臺の上に載せられて、水泳のポーズも撮られたところである——とヘレンは付け加へた。

宇宙萬有の眞髓に向つて、學究の力をもつて、その神祕と闘はうとするのが念願であるG氏



であるが、何うして斯うまで深く人體のことばかりに拘泥してゐるのだらうか、近いうちに質問して見なければならぬ——私がフラフラとする脚どりでヘレンを抱きながら首をかしげた時、スクリーンの向方側のソファで一休みしてゐたG氏が、

「ライト——」

と技手に命じた。

灰白色の光線が私達の肉體を射透した。

「では、マキノ君、自由なポーズを示して呉れ給へ。」

G氏は私に呼びかけた。——いつの間にか私の「迷魂」の酔は醒めかかつてゐたが私は、もうこれで當分G氏とも名残りか！ などと思ひながら、

「オーライ、サー」

と答へると、光芒の圏内を手を振り脚を挙げしながらグルグルと歩きまはつたり、四ツん這ひになつてヘレンに飛びついたりした。すると、前夜の酒場の場合と全く同様なランプの幻が私の眼蓋の裏にありありと浮びあがつて來た。

南風譜



卓子に頬杖をして瀧本が、置額に容れたローラの寫眞を眺めながら、ぼんやりと物思ひに耽つてゐた時、

「守夫さん、いらつしやるの？」

と、稍激した調子の聲が、窓の外から聞えてきた。

(誰だらう?)

瀧本は、この時、見境へもなく、返事が出来るほど、心が晴れやかでなかつた。

「矢ッ張り、留守なのか知ら？」

と、窓の外からは呟いた。

それで、瀧本に——百合子だ……と解つた。恰で、他人と會話をするのと同じ調子の明瞭さで、稍ともすると和やかな獨り言を呟くのが、瀧本の印象に一番鮮やかな百合子の特徴だつた



から——。

「居るんだよ！」

瀧本は、慌てて窓を展いた。

純白の春の半オーバーと、同じ色のターバン・キャップを無造作に被つた、素直に丈の高い百合子が、

「おお、好かつた！」

と片手を舉げて微笑んでゐた。片方の手には、スーツ・ケースを下げてゐた。

「元氣の好い様子だね——お休みが餘ッ程嬉しいと見えるね。」

瀧本は、百合子の手から鞆をとりあげ、

「ここから、お入りよ。さあ、手を執つてあげよう。」

と、前身を窓から乗り出して、兩腕を差し伸じた。——「随分、重い鞆ぢやないか、ひとりで來たの？」

「ひとりで大丈夫よ。」

百合子は、窓を指して微笑んだ。窓枠は、百合子の恰度頃のあたりまでの高さだつた。

「その、花の植木鉢をのかして頂戴な。」

二三步後ろに退いてから、百合子は軽く勢ひをつけて、ひらりと窓枠の上に飛び乗つた。

「玄關で、何通も呼んで見たけれど、一向に返事がないので、もう空家になつてしまつたのか知ら——と思つたわ？」

「うむ……それは、ちつとも氣がつかかなかつたけれど、相變らず阿母との間が面白くなつて

——僕は、何時でも玄關には錠を降り放しにして置くんだよ。で、百合さんは、何時歸つて來たの？」

と、百合子は、それには答へないで、

「ね、守夫さん——」

と、仰山に眼を視張つて、問ひ返した。——「うちの兄さん來なかつた？」

「二三日前に、一度來たけれど……」

「それきり？」



「ああ、何うして？」

「ちや、矢ッ張り、妾と行き違ひに東京へ行つたんだ！　いいえ、そんなら、それで……」

百合子は、獨りで點頭きながら、窓枠に腰掛けたまま靴を脱ぐと——これは、そつちの方へ隠しておいてやれ——と、卓子の下の方へ投げ込んだ。

「僕には、何とも云はなかつたぜ。」

「さうでせう。まあ、いいわ。」

百合子は部屋に入ると、瀧本が今迄腰掛けてゐた回轉椅子に凭つて、

「田舎の春は好いな——妾、昨日から學校が休みになつたので、今朝、歸つて來たのよ、そし  
たらね——。」

と、至極長閑な調子で、含み笑ひをしながら續けるのであつた。瀧本は窓枠に乗つて膝を抱へてゐた。毎日毎日、窮屈な思ひばかり續けてゐたせいか、百合子の明るい態度が眼ぶしいやうであつた。

「只今ツて、お父さんのお部屋へ行つて挨拶すると、お父さんたら、まあ何うでせう、物をも

云はずに、ギョロツと、斯んな眼で——」

百合子は、滑稽らしくクスツと肩をすぼめると両手でつくつた眼鏡の形を顔にあてて、物物しい苦顔を示した。——「暫く、妾の様子を凝ツと睨んでゐたかと思ふと、いきなり、そんな妙な髪の方に家に居られては迷惑だ——と斯うなのよ。ええ、母さんも、ちゃんと傍にゐて……」

云ひながら百合子は、キャップを、つかみとつて壁に投げつけた。——クロースバヴの髪だつた。

「で、斯んな重い靴を持つて、此處まで來てしまつたの？」

「はじめ妾、冗談かと思つたわ、父さん——でも、斷然、そのままの顔つきぢやないの。妾、睨めつこをしてゐたわ、そしたら、遂遂妾が、笑ひ出しちやつたの——憤つたわ、父さん。——兄さんが、手紙でいろいろ云つて寄したけれど、それほどとは思はなかつた。」

「……………」  
瀧本は、そんな事件を、みちんも重苦しく考へないで、平氣でゐられる百合子に美望の念を



感じた。

百合子は、斷然、父親から離れる事に兄と話が纏つてゐる——と云つた。繼母、破産、父の焦躁、家出——と、凡そ暗黙たる周囲にかこまれてゐながら、決してじめじめとした考へに變はれることなしに、寧ろ喜劇的に所理してまふ百合子の態度に、瀧本は反つて教へられるところが多いやうな氣がした。

「妾、二三日此處に泊つて行つても好いでせう。少し、此方で遊んでゆきたいの。」

「……」

瀧本は、即座に返事も出来なかつた。百合子の、曇り氣のない顔を、ぼんやり眺めただけだつた。

「守夫さんは、何時頃東京へ行くつもり？」

「この仕事は、多分今月中には出来あがる筈だから……」

机の上に擴げてある翻譯の仕事は、瀧本は指さした。

「そしたら——」

と百合子は、言葉を絶らずに急速に云ひ續けるのであつた。「アパートを借りて、私達と一緒に生活しないこと？ 妾と、兄さんと、三人で……皆で、働くやうになつたら愉快ぢやないこと！」

「それは好いだらうな。」

父親が没なつた後の家庭上の紛擾と戦ひながら、斯んな處に堅苦しく籠居して、日増に厭世觀を高めて行く自分を思ふと、瀧本は、自身に怖れを覺えた。

「妾、お父さんが、そんなつまないことに因縁をつけて、とても不氣嫌さうに眉をひそめてゐるのを見て、酷く、がっかりしたわ。怖くも、口惜しくも何ともないの——ただ、もつとはつきり云つたら好ささうなものだと思つて、今度の妾達の新しい母さん——」

百合子は、云ひかけて、何の蟠りもなく、ふわッ！ と笑つた。

「あの母さんの氣嫌をとるだけのこと、逆に、いろいろと妾達に難癖をつけたりなんかするなんて、馬鹿馬鹿し過ぎるわ。そんなこと何うでも好い、兎も角、妾、あのお父さんの掣め顔だけが滑稽だわ。ナンセンスたら、ないぢやないの！」



思ひ出しても笑はずには居られない！と云つて、百合子は、父親の聲色などをつかひながら、腹を抱へて、傍らの寢臺に倒れたりした。

「家を出て……そして？」

「まあ、守夫さんたら、何うしたつて云ふのよ。何を、いちいち、妙に、考へ深さうな眼つきばかりしてゐるの——家なんて、もう、とつて出てゐるわけぢやないの。——學校だつて、もう止めるわ。それとも兄さんの働きで、行かれれば、続けるし……」

百合子は、二年程前に、やはり東京で女學校を卒業してから、今は語學の専門學校へ通つてゐた。——瀧本も二年前に、大學の理科を出てゐた。と同時に、父の死に出遇つた。——瀧本の母は、自分の經濟上の安全を計つて、新しい負債をつくり、負債だけを彼に譲つて、長男である彼を、半狂人的の遊蕩兒と吹聴した。——瀧本は、何故、思ひ切り好く郷里を棄てることが出来ないのか？自分ながら判断がつかかなかつた。

「ローラのことだつて、阿母にだけは未だに隠し通してある。親父は、二十年隠し通して、更に祕密を僕に譲つたわけだが——」

不圖瀧本は、そんなことを云つた。百合子達だけには、古くから瀧本は「祕密」を明してあつた。

「まあ、これ、ローラさんの寫眞——妾、見違へたわ——守夫さんのお得意の西部劇にでも出て來る女優かしらと思つたわ。」

百合子は瀧本の卓子から置額を取りあげた。

「去年の夏のだつて——」

ローラは、アメリカ人を母に持つ瀧本の妹である。そして今、七年振りて日本を訪れようとしてゐる。

瀧本が、家うちの話などを初めると、

「妾、そんな深刻めいた話、厭ひだわ。」

と事もなげに百合子は一蹴した。

「ローラを何ういふ立場に置いたら好いかしら、と思つて——」

「奇智ウキチが必要なのね。」



と百合子は、勿體らしく首を傾げた瀧本を冷笑した。瀧本の一見真面目らしい、責任感などは、結局何うすることも出来ない架空の感傷だ——と百合子は思った。母親の財産を掠奪してでもローラにだけは、物質上の分配をしたい——瀧本のそんな考へが百合子には無駄に思はれた。

「ママと一緒に来るのか知ら？」

百合子は、わざと白白しく云った。

「観光團に加つて、ひとりで来るらしい。親父が送つてゐた生活費の最後の分を、そのために貯へて置いたのだつて——」

「兄さんに會ふために、遙遙と海を渡つて来るなんて、それだけで、とても楽しいことだらうな——」

皆同じやうに、新しい生活の出發點に立つてゐるのだから、來てからの上で

「さうだ、妻がお友達になるわ。」

と百合子は、片づけた。——「守夫さん、相對性原理の説明をして呉れない。」

二

夕暮時になつたので二人は部屋を出て、海の見える縁側に出た。

「小父さん、今日は——何時妻が來たか知つてゐて？」

留守番の年寄が、庭にゐたのを見て百合子は聲をかけた。年寄は、驚いて、暫く見なかつた間に、すつかり立派なお嬢さんになつてしまつて、眼のあたりに見ても、聲をかけられるまではあなたとは氣づかなかつた——などと見惚れた。

「今夜、御馳走してね。手傳ふわ。妻、泊つて行くのよ。」

「御馳走は何にもありませんよ。」

「ちや、妻が何かつくるわ。小父さんは何かお好き？」

この家では瀧本と年寄の二人暮しであつた。瀧本の父親が、母と別居して久しい間住んでゐた海邊の家である。



百合子が、ぼんやりと暮れかかつて行く海を眺めてゐる瀧本の背後から、肩にぶらさがつてぐるぐる回つて呉れ——などと面白がつてゐるところに、

「はい、今日は——」

と云ひながら庭から入つて来た男があつた。そして百合子の様子を、不思議さうにジロジロ眺めながら、

「ちよつと——守夫君」

と瀧本を木蔭の方に招んだ。父親が没なつた後、母親の依頼で様様な家うちのことを整理してゐるといふ、五十歳前後の堀口剛太といふ遠い縁家先の者である。

「此處で關ひませんよ、私は——」

「では——」

堀口は幾分てれた調子で、

「こんなものを、此處の家の前に立てることになつたんだが、まさか、君が斯うしてゐる處に立てるのも餘りと思ふのだが何うしたのかね、お母さんは關はないと仰言るんだけど——」

と云ひながらトンビの袖の中から「賣地、賣家、興信銀行」と書いてある板切をとり出した。

「東京に行く日が解つてゐれば、それまで保留しても差支へはないんですが——」

「ちや置いて行きなさいな。何れ私が、立てて置ませうよ」

「それちや困るんだよ。私の責任上——」

「ちや、御自由になさいよ、何時出發しようと、餘計なお世話だ。」

二人の險惡な様子を眺めてゐた百合子は、苦しうにして逃げ出して行つた。

「君は、此處や裏の蜜柑山などを自分のものと思つてゐると大間違ひだよ。」

「——散歩だ。」

瀧本は、相手になることを止めて靴を穿いた。彼は、石段を夢中で駆け降りた。言葉や事柄は別にして瀧本は、堀口の姿を通して連想する母親の幻に敵はなかつた。

「何處へ行くの？ 憤つてしまつたの？」

百合子が追ひかけて来て、瀧本の背中を叩いた。

「憤つたわけでもないんだが——」



「ちや、悲しいの？」

「あんなこと云はれると、無理にも僕は此處に我ん張つてゐてやりたいやうな氣がしてくる——そんな、反抗心が自分ながら醜く思はれてならないんだ。」

「止めなさいよ——。妾、さつき、あんた達の睨め合つてゐる物凄い顔が、馬鹿氣て見えたので、いきなり、このラツバを二人の後ろで吹いて、吃驚りさせてやらうと思つて、ね、あんたのお部屋から持ち出して來たのよ。妾が、後にそつと忍んで行つたのを、ちつとも氣づかなかつたでせう。ところが、いくら夢中になつて吹いても、さつぱり鳴らないぢやないの、力一杯吹いても……」

百合子は瀧本のホルネットを携へて、何うしたら鳴るのか？と質問した。

「吹竹を吹く見たいに幾ら力一杯吹いたつて鳴りはしないよ、斯う唇を絞めて、先に唇を鳴しながら——」

瀧本は、一音階を急速に吹き鳴した。

「ああ残念だつた。怪し損つてしまつた。」

あの時、突然耳もとで、斯んなものを吹かれたら自分も堀口も、思はず飛び上つたであらう、薄暗がりの中で——と瀧本も、何となく残念に思つた。

海邊に向ふ松林の中を、二人は微風に吹れながら歩いてゐた。百合子が、何か唱歌でも吹いて見ないか？と云ふので、瀧本は、オーバ・ゼ・ウエイヴ・ワルツなどを、調子高く吹奏した。

「此方に向けてゐても、家の方まで聞えるかしら？」

「風があるから聞えるだらう。」

「堀口さんにも聞へたでせうね。それにしても守夫さんは、自分の仕事の他では、それが一番得意？」

「中學生のうちからだもの。」

「東京へ行つて仕事が見つからなかつたら、ダンス・ホールのバンドに入つたつて生活出來さうね。」

「自信はあるな。」



百合子を相手にしてゐると瀧本は、悩みも不安も綺麗に拭はれて行く爽快さを覺へた。松林を脱けて濱邊へ出ると、未だ、あたりは明るかつた。

「あらあら！」

と、瀧本の口を見て百合子は、笑ひながら顔を擧めた。「妾の口紅が、一杯そこに喰ツついでゐるわよ。——妾が吹いたのをそのまま使つたもので！」

「百合さんは紅なんてつけてゐたの？ 随分お洒落になつたんだな。」

瀧本は、手の甲で唇を撫でながら何氣なく苦笑したが、不圖、胸の震えを感じた。

三

翌朝瀧本は、堀口からの電話で起された。

「森さんの娘さん——いやいや、昨日の君の家のお客様は昨夜お歸りになりましたか？」

「百合子さんなら、居るよ。」

それが何うしたのか？ と云はんばかりに瀧本は云ひ返した。

「森さんの方から、其方に百合子さんを探しに行つた人があつたでせう？」

「誰も來ない——だけど、何のために貴方は、そんなことを私に訊くんです？」

「ふ——ん玄關に錠を降り放しにして置いて、居留守をつかつてゐれば世話はありませんね。」

仲仲、何うして、用意周到だよ。」

堀口は、厭味な嗤ひを附け足した。

「何だつて！」

瀧本は、思はず怒鳴り返した。——「失敬なことを云ふなッ！」

「凄腕だね。たうとう娘を誘惑してしまつて……」

「馬鹿ッ！」

瀧本は、震へて、喉が塞つた。

「森さんでは搜索願ひを出すと云つてゐるぞ——」

「此處にゐるのが解つてゐて搜索も何もないぢやないか——」



「つかまらないうちに逃げたら何うかね。……君の母さんが、其家は逢引の宿ぢやないから、出て行つて貰ひたいと云つてるよ。」

「俺の勝手だ。」

瀧本は、怒りのために全身震へて、今にも昏倒しさうであつた。

「登記所へ行つて見て来ると好いんだ、其家が誰のものか直ぐ解るよ。出て行け。」

「何うしても出て行かなかつたら、何うしようといふんだね。」

瀧本は、不思議な落着を覺へた。

「悪黨——女蕩し！」

「……」

瀧本は、言葉を失つた。

——「妾が出るわ。」

何時の間にか瀧本の傍らで百合子が、この争ひを聞いてゐた。百合子は瀧本の書齋の鍵を持つてゐたが、その手で受話機を引きたくつた。

「もしもし、妾、百合子ですが——」

と靜かに呼びかけた。

「堀口さんですか、昨日は失禮しました。……ええ、妾、泊つたわよ。今日も明日も泊るつもりですわよ。」

瀧本は傍に居られないで、座敷に戻ると、家中を彼方此方と無意味に歩き廻つてゐた。書齋の扉は開け放しになつて、ベットの毛布が床に半分落ちてゐた。——百合子がベッドの方が望ましいと前の晩云つたので、瀧本は鍵を渡して、あけ渡したのであつた。そして自分は、留守居の年寄に傍に来て貰つて、ずつと離れた部屋で寝た程、餘計な神經をつかつてゐるではないか。

「妾の父が見えたんですって——ちや、恰度好いわ、妾は、守夫さんと結婚する意志がある——といふことを云つて下すつても關ひませんわ。ええ、でも、一三年先のことになるかも知れないけど……そんなことは此方の自由ですもの……ええ、ええ、これだけの話でもう充分よ。」

それで、百合子は電話を斷つた。——と彼女は、次の部屋でまごまごしてゐる瀧本の傍ら



を、パジャマの袖で顔を覆ふやうにして、眼も呉れずに駆け抜けた。そして瀧本の書齋へ——  
彼女の寢室へ、慌しく駆け込んでしまった。

電話の、百合子の終ひの言葉は瀧本には凡そ思ひも寄らぬものだつた。信じて好いのかしら——と疑はずには居られなかつた。仲裁のための、前の日のコルネットの場合と同じやうな百合子の「ナンセンス嗤ひ」ぢやないのかしら——とも思つた。

瀧本は、そつと百合子の寢室の扉の前に来て、おして見ると、中から鍵が降りてゐた。

「百合子さん」

と呼んで見たが返事もしない。

仕方がなく瀧本が、庭をまはつて見ると、窓は閉つてゐたがカーテンに隙間があつたので、  
氣配を窺ふと、百合子は、ベッドに突ッ伏してゐた、床に膝を突いて——。そして、背中全體  
が切なささうに震へながら波打つてゐた。嗤つてゐるのか、咽び泣いてゐるのか！ 瀧本には  
判別し憎かつた。

#### 四

「百合子さん——」

もう一度瀧本は呼んで見たが、百合子は何時までも突ッ伏しつづけたまま顔をあげやうとし  
なかつた。

……だが、百合子が聲に應じて顔をあげたら、一體自分は何んな言葉をかけるつもりなんだ  
らう——不圖左う氣つくと、餘程理性を缺いたらしい自分のたつた今の舉動に後悔を知つて、  
そのまま窓下を離れた。

何時堀口達が踏み込んで来るかも知れぬといふ場合に、斯んなところを見つかりでもしよ  
うものなら、また何んな聞くに堪へぬ罵倒を浴せられるかも知り知らない。別段堀口達の思惑を  
顧慮するわけではなかつたが、自分達にとつて餘りに途方もない言葉を、あのやうに信じきつ  
た態度で放言する堀口を、百合子の前に見出すのは苦し過ぎる光景に違ひなかつた。



それよりも、斯んなところにうろろしてゐるのを百合子に気づかれなかつたのも何よりの幸せであつた——レディの寢室の氣配を窓の外から窺つてゐるなんて！

「そんな——」

瀧本は思はず苦笑ひを浮べながら、家の圍りを半周して表の方へ抜け出て來ると、遙かに海が見降せる庭先の芝生に出て寝ころんでゐた。

——「さあ、どうぞこちらから……いえ、もう、お關ひなく——。玄關と來たら、いつでもちやんと錠がおりてゐるといふ仕末なんですから。はッはッ……いやはや、どうも——熱烈なものでして、世間態も何もあつたものぢやありません。」

堀口だな——と思つて瀧本が振り返つて見ると、瀧本が見知らぬ中年の婦人をいんぎんな様子で案内しながら、何時ものやうに大手を振つて庭先へ廻つて來る堀口であつた。泉水を隔てた木蔭に寝ころんでゐたので彼等は瀧本に気づかなかつた。

堀口は縁側から座敷の中を覗くと、

「これは、何うも——」

と思はず儼しく顔を擧めて、伴れの婦人を顧みた。——其處には、早朝に瀧本が堀口の電話に起されて、飛び起きたままの寢道具が取り亂れてゐた。堀口が覗いた縁側の兩戸が一枚開いてゐるだけで、人の氣配の有無も判別し憎いほどの暗さであつた。

急に聲を潜めてしまつたので瀧本のところまでは言葉は達しなかつたが、堀口は不思議な笑を堪へながら胸を張り出したり、屹と眼を据えて、何かを囁きながら指差しをして、大業に點頭いたりした。——すると彼等は、更に何かをひそひそと耳打ちをしながら、足音を氣遣ふやうな姿で、南天の繁みの間をくぐつて裏の方へ廻つて行つた。

二人は百合子を見つけ出すであらう——と瀧本は思つたが、ただ、變な人達だな！ といふ心地がしただけだつた。そして彼等が、途方もない淫らな想像で勝手な好奇心を動かせてゐるらしいのに、馬鹿馬鹿しさを覺へただけだつた。

自分は、それにしても今朝、堀口にあんなことを云はれて、何うしてあんなに逆上したのだらう——と瀧本は、あの時の心的状態を回想して見ると、急に、わけもわからなく、百合子がいとほしく思はれて來た。——何も知らずに寢臺に突ッ伏してゐるであらう百合子を、カーテ



シの間から覗き見してゐるであらう二人の者の心持になつて想像すると、瀧本は酷く不健全な  
そして目眩しく甘美な陶醉に誘はれながら得體の知れぬ烈しい嫉妬感に襲はれた。

瀧本が二人の後から、裏庭に廻つて来て見ると、百合子は窓から半身を乗り出して、至極長  
閑な面持で、窓下の二人の者と何やら會話をとり交してゐる。——瀧本には意外な光景だつた。  
「守夫さん、何處へ行つて、いらしたの。妾、すつかり寝坊しちやつて、今母さん達に窓を叩  
かれて、吃驚して目を醒ましたところなのよ。」

瀧本の姿を見出すと同時に百合子は左う云つた。それで、窓下に立つてゐる堀口と伴れの婦  
人が瀧本の方を振り返つた。

と、堀口が極めて恬淡らしい豪傑氣なひとり笑ひと一處に、

「やあ！」

と云つて瀧本の肩を叩いた。「今朝は、何うも、つい言葉の勢で飛んだ失敬をしてみましたよ。  
悪く思はないで呉れ給へ。」

「どうも此度は、また百合子が——」

傍らの婦人が續いて挨拶した。

「森さんの奥さん——」

堀口が、百合子等の繼母を瀧本に紹介した。「君は始めてだつたかね」夫人は主人の代りに出  
向いて来た由などをつけ加へた。

「ぢや、二階で待つてゐるからね。」

堀口が瀧本へとも百合子へともつかず左う云つて夫人と一處に其處を立去つた。瀧本は堀口  
を寧ろ曇り氣のない愉快な人物であると思ひ直した。

「あれから、すつと起てしまつたの——散歩にでも行つてゐたの？」

「……直ぐ、あの時百合さんの後を追つて此處に来て見ると、ドアに鍵が降りてゐるやうだつ  
たから——」

「いゝえ、妾、鍵なんて降しはしなかつたわよ。」

では、あまり慌てて感違ひでもしたのだらうと瀧本は思つたので

「僕はその時百合さんが傍に居るなんてことは少しも知らずに、堀口さんと思はずあんな喧嘩



をしてしまつたけれど、若し、あれが、もう二三言續いたら僕は夢中になつて外へ飛び出して行つたかも知れなかつたよ。百合さんが傍から受話機を引つたくつて呉れたので——幸せだつたんだらうな。」

と、胸のうちに震へを覺へながら呟いた。

「そんなことになるだらうと思つて妾も、いきなり仲裁に入つただけれど、それにしても、やつぱし昨日と同じ原因で、あの張札かなんかのことで、堀口さんと、あんなことになつたの？」

堀口が何んな類ひの雑言を放つたか百合子は氣づいてゐないと見へる——と思ふと瀧本は、決してあの罵り合ひの理由を傳へるわけにはゆかなかつた。「百合さんには、あの人はあの時何んなことを云つたの？」

「何だか好くはわけがわからなかつたけれど、妾が此處に泊つてゐることを誤解してゐる見たいだつたわ。」

「——侮蔑を感じなかつた？」

瀧本は、おそろしく眼を視張つて百合子の氣色を窺つた。

「何うして……」

百合子はげげんな顔をして、軽く首を傾げた。——そして稍間をおいてから、掌で嗤ひをおさへながら、

「そんな、侮蔑なんて——そんなもの妾には解らないわ。」と云つた。瀧本は、訊ねきれぬものが多過ぎて、途方に暮れた。——寢室に駆け込んで、突ツ伏してゐる百合子の姿が、あのままで、何時の間にか薄ら甘い疑問の、そして夢のやうな畫になつて印象に残つて來た。白晝の架空に描いた幻のやうに見えたり、古風な物語の中のアカデミー派の挿畫の一つのやうに、眼の先の百合子の姿から遊離して、頭の一隅に映つて見へてゐた。

「兎も角一度家へ來るやうにツて母さんが今迎へに來ただけ——それはね、世間態なんですつて、此處に居ることが許されないんですつて——。」

「それは當然のことかも知れないね。」

「だから妾、黙つて従いて行くわよ。だけど直ぐまた戻つて來てしまふわ——歸るとか、歸ら



ないとか、そんなことで母さん達と云ひ争ふのがつまらないから、散歩のつもりで従って行くだけのことよ。變な云ひ方をするやうだけど、自分の自由性を自分ではつきり信じてゐるから——平氣だわ。」

瀧本には百合子の言葉の意味が、はつきりと解り憎くかつたが、

「ぢや今度は、あつちからいきなり東京へ行つてしまふつもりなの？」と訊ねた。

「ええ。」

と百合子は「今度は決して誰にも解らないやうに氣をつけて、また此處に来るつもりなのよ。」

さう云つて、いたづらさうに肩をすばませた。

「森からの便りを待つて、それから二人で東京へ出かけるかね。」

百合子の兄の武一のことを瀧本は云つた。

「ええ、昨日約束した通り——。ぢや行つて来るわよ。そして、夜か、明日の朝早く、變装でもして来るかも知れなくつてよ。そのつもりでね、今度は、しつかりかくまつて下さいよ。」

何だか、昔の物語見たいで妾面白くつて仕方がないわ。」

百合子は、戯談らしく胸を張つて瀧本に握手を求めた。

「芝居の——何か昔風の科白を知らない？　こんな場合の——」

瀧本は百合子の手を執つて、

「知らない。」と不安さうに呟いた。

すると百合子は急に眞面目な顔をして、

「いつそのこと、あんな事件を背景にして、芝居を演つてゐるつもりにならない。當分の間、當り前の言葉なんて皆な止めにしてしまつて、中世紀のことにでもしてしまはうぢやないの——さうだ、妾、ほんとに變装して来るから、守夫さんもそのつもりで澤山言葉を考へておいてね。」

そんなことを云ひ残すと百合子は靴を穿いて、窓から降りた。

「母さん、お待遠様——妾、もう外へ出ましたよ。」

玄關の方で百合子の聲がした。——瀧本は見送りにも出ず、ドアに鍵を降すと、そのままべ



ツドにもぐつてしまった。

五

その晩も翌朝も百合子の姿は現れなかつた。便りもなかつた。——瀧本は翻譯の仕事にとりかかつた。

町端れの河堤の櫻が咲きはちめて、夜櫻の雪洞が燭いたから花見へ行つて見ないかと近所の若者に誘はれたが瀧本は、晝も夜も自分の部屋に引き籠つてゐた。庭先に出て見ると、この村と隣りの町との境ひになつてゐる櫻の堤のあたりが、月夜の下に、明るくどよめいてゐるのが遙かに見降せた。

背後の丘を見あげると、花見へ赴く人達が提燈を振り翳しながら參參伍伍隊をつくつて降つて来る。百合子の家も、その丘の向ひ側であつた。

丘を降つた人人は瀧本の家の庭先から見える街道に達すると、恰度、花道にさしかかつたや

うに身づくろひを改めて、意氣揚揚と河堤を指して行くのであつた。

その晩も瀧本は、人の出盛る時刻になると庭先に出て、木蔭から街道を眺めてゐた。

ボール紙の鎧甲に身を固めた殿めしい武士が、馬に乗つて行つた。戀人と腕を組んで打ちはしやぎながら行く女装の若者もあつた。奴の行列もあつた。金棒引の木遣も聞えた。ピエロオもゐた。楯をふり翳した騎士もゐた。蛇の目の傘を構へて偉さうに見得を切つて行く定九郎の顔を注意して見ると、R村の水車小屋の主であつた。八重垣姫に扮した鍛冶屋の娘が、馬車から下りるのを見た。

逃げ出す機會を奪はれた百合子は、この夜櫻の晩を待つてゐたに違ひない——と瀧本は想像したのである。

それにしても何んな變装を凝して百合子が現れるだらう？　と思ひながら一心に彼が行列を見守つてゐた時、森さんから電話である——と年寄に呼ばれた。

「俺だよ。今、停車場に着いたところなんだが——」

百合子の兄の武一だつた。竹下と村井を一處に伴つて來たのだが、人通りが餘り多くて歩き



憎いから遅くなつて其方へ行かうと思ふ、それでこの邊のカフェーでも時を消したい、話が澤山あるから迎へに来ないか——といふのであつた。竹下は晝、そして村井は小説を志さしてゐる森と瀧本の共通の友達だつた。

瀧本は、百合子とのいきさつを最も簡単な言葉で傳へた後に、今にも來るであらうと待ち構へてゐるところだから行き憎いと斷ると、では俺達も假面でもかむつてお花見の堤を通り抜けて行かう——と云つた。

もう一遍庭先に出て見ると、もう大方花見の行列も出盡してしまつて、遙かの田甫道を練つて行く炬火や提燈の火が、海の上の漁火のやうに揺れながら遠のいて行つた。月光を浴びた茶畑が白く、ちらちらと波のやうに映つた。

——「お——い、守夫！ 見えるぞ。」

あれは竹下だと瀧本は聲の方を振り向いた。

「そんなところで、變装をして逃げ出して來るお姫様を待つてゐるなんて、圖圖しいぞ。」

村井の野次で、瀧本は思はず笑ひ出してしまつた。——瀧本は聲の方へ駆け降りて行つた。

「やあやあ！」——「何うしたと云ふんだい。」——「ちえッ、馬鹿だな。」

わけもなく、哄笑と一處に、四人の者は手を執り合つたり肩を突いたりした、ただ、それが久し振りに出會つた挨拶の代りであつたらしい。——見ると遠來の友達等は、登山家のいでたちで皆な夫夫はち切れさうなりユック・サックを背中につけてゐた。——昂奮して、とりとめもない亂暴な言葉を喚き會ひながら四人横隊になつて腕を執つたり肩を組んだりして石段を上つた。

「これで一先づ山を極めたといふわけなんだよ。——ブラボー。」

「旗を持つて來たぞ。朝になつたら掲旗式を行ふんだぜ。」

「守夫——お前にはラッパ吹きを任命する。」

何うも調子が高過ぎると思ふと、皆なは道道ビールのラッパ飲みをしながらやつて來たのだなどと氣焰を擧げた。

「お前が東京へ行くんなら、この家を俺達に引き渡せ、俺達が入つてしまへば、たたき壊されるまでは動きつこはないんだから。」



「俺達はここを陣營にして、ロビン・フッド生活を営む決心でやつて来たんだ。」

「竹下と村井は、生活と藝術に就いて皆さんに悩んだ上旬、自分達の藝術の樹立を念じて、生活は最も原始的に、パアパリステイクに片づけて——ネオ・ロビン派の道を進まうといふ決心なんだよ。東京では今のところ、單に生活に追はれるだけで、自分の仕事を盛りたてようとする豫猶が見出せないといふんだ。俺も二人の意見に賛成した——プラトンの體系に依る共和國をつくつて……」

武一の云ふところに依ると、竹下も村井も、そして自分も、あまりに豊かな理想にもえて出かけて来たのだから口では説明しきれない、だが、恰も今宵は、武者修業の首途にのぼつたジグフリードが、先づ森の鍛冶屋を訪れて、劍を打ちちぢめた意氣である——といふのであつた。

「で——武一、君は？」

「俺は東京の仕事さへ見つければ、此方からでも通ふけれど——まあ、そんな話は後にして呉れ。」

武一は瀧本と同窓の理科出で、瀧本と同じやうに未だはつきりと専門も見つからなかつたが、多分のプラトンの傾向も有つてゐた。

「それに俺には、やつぱし自分の手で片づけなければならない家の仕末もあるし——だが今度こそは愚圖愚圖してはゐないよ。もう、一切の感情は卒業してしまつたから、ロビンの荒療治で退治してしまふ。何れプロットに就いては守夫の頭も借りるだらう。……お前のオート・バイは使へるか？」

「あ、ガッリンさへあれば——」

「うちのタイキはゐるか知ら？」

森は自家の馬のことを訊ねた。

「お百合の話に依ると塚田村の篠谷に預けられてゐるさうだよ。」

「よしッ——掠奪してやる。——おい、竹下、篠谷といふのは業愁な金貸業者なんだよ。」

「俺はその男から金を借りたいな。」

竹下が、嗤ひながらそんなことを云つたのに武一は耳も借さず、



「ロープやテントなどは守夫のところにあつたな。こいつ登山なんてしたこともないんだが——皆な巧みに利用するぞ。」

と花やかに獨りで點頭いてゐた。

事事が、話題が、突飛過ぎて瀧本はいろいろと我點が行かなかつたが、久し振りで友達に會つたことの面白さに恍惚としてゐた。そして伴れ戻されて行つた百合子の話などをした後に

「敷き放しになつてゐた俺の寢床を見て、堀口が物凄しい表情をした時には、少々參つたね、泊つたといふことで、すつかり遅しい想像を回らせてゐるのは、あんまりデカダン過ぎると思ふんだよ。」

などと云ふと、村井と竹下が神妙に眼を視張つて、

「それあ愉快だ、ギックリとしたであらう堀口といふ男の衝動を想像すると、何となく好い氣味ではないか。」

「然し、それは空しいエロ風景だな。」

と叫んだりした。

武一は、あかくなつて話題を轉じた。

「村井は小説よりも寧ろ鐵砲の方が巧いと自慢してゐるし、竹下の腕力は三人前なんだ。そんなことが、悉く、お伽噺の中のチャムピオンのやうに現實で役に立つといふことになつてゐるんだ。守夫と俺は、田園の、かくれたるスポーツ・マンだし……」

「然も俺は料理の名人だ。」

と竹下が鼻を高くした。「下宿を追つ拂はれた村井と失業者の森を、俺のアパートで今日までちやんと、この腕で養つて來たんだからな！」

「これからは瓦斯や水道を止められる心配はないから、いくらでも腕は揮へるだらう。」

三人ともいよいよ行き所がなくなつたので、皆な持物を一切賣り盡した上旬、これだけの仕度を整へて出發して來たのだ、若し此處が不首尾であつたらキヤムプを續けるつもりだつた——といふことを村井が瀧本に説明したりした。——瀧本は、凡ゆる生活上の難儀をもつともせず踏み超えて、ひたすら自分の藝術の道に生きようとしてゐる竹下や村井の情熱と自信を尊く思つた。



今夜限り——などと約して、ビールの乾盃を続けながら、レコードをかけて男同志で踊ったり、「乾盃の唄」を合唱したりした。——竹下は、皆な顔をスケッチして、誰を、ロビンにし、誰をウキール、また誰をセント・ジョーンにしようか？ などと、はじめは冗談めかしく云つてゐたが、いつの間にか無氣になつて、

「瀧本だとか村井だとかと、これまでの名前と呼び合ふのは既成觀念につきまとはれて面白くないから、これから、何か別の名稱を吾々の代名詞としようぢやないか。少くとも、この生活の圏内では——」

などと途方もない提言を提出した。

「名前ばかりでなく、言葉もつくらう。ガリバー旅行記の小人國や大人國の言葉を参考にし、よしッ、そいつは一ト月のうちに俺が拵へるよ、先づ幾通りかの暗號を——」

と森が賛同すると、村井も膝を打つて、

「俺は、この附近の地理を調べてから、俺達にとつてだけ所用な個所に古代アテナイの花の名前を引用した符號をつけよう。」

と調子づいた。

少しばかりのビールの酔で皆なが他愛もないロマンチストになつてゐたところへ、裏の瀧本の部屋の窓を注意深く叩く音が瀧本にだけ聞へた。と彼は弾かれたやうに飛び出して行つた。

——「これを森さんから頼まれて来ました。」

見知らぬ若者が、聲を秘めてさう云ひながら、小型のバスケットを一つ瀧本に渡すがいなや返事も待たずに忍び去つた。

「百合子が来たのか？」

「違ふ。こんなものが届いた。」

瀧本が、皆なを凝視を集めてゐるバスケットを卓子の上で開くと、一羽の鳩が入つてゐた。

「おやッ、これは俺の鳩ぢやないか！」

森は思はず叫び聲をあげると同時に、懐しさに堪へられぬ眼で小鳥を掌の上にとり出すと、翼に頬を寄せた。——「好く生きてゐたものだな！」

彼の眼には不圖涙が溜つた。——それは、彼が我家にゐる頃飼育してゐた傳書鳩の一員だつ



た。

手紙を、瀧本は籠の底に見出した。勿論百合子からの手紙だった。

——あの時何気なく歸つたら、父が不在で堀口が日夜滞在してゐる、父から書類の整理を依頼された由である、繼母は何故か私の行動に就いて凡ゆる監視の眼をそばだててゐながら、表面では寧ろ氣嫌をとつてゐる、何故に私がそんなに必要なのか解らないが、外へ出ようとでもすると母と堀口とで威嚇の氣色さへ示して絶対に許さない、同時に異様な生活を見出してゐるのであるが、それは會つた時に話した方が好いと思へたら話す——といふやうな意味を誌した後に、

「眞に古めかしい物語の通りになつてしまつたわ。で、あなたはあの時あたしが云つたやうなほんたうのナイトになつて、この次の此方からの便りの指定に従つて、その晩、ハルツの塔に幽閉されたお姫様を救ひ出しに來なければならなくなつたのよ。一先づ、そちらの消息をこの鳩に托して報じて下さう。」

と書いてあつた。

## 六

「空しく里に歸りて楯の蔭にあり。」

森武一は、唇を噛みながら斯んなことを書き誌してから「St. Patrick」と署名した。

「では、俺は——」

村井は、重い劔でも執りあげる身構へ見たいにシャツの袖をたくしあげながら、

「Sebraの意氣込みだ。」

と名前を連ねた。

「昔、勇士ありけり、その名 St. Anthony をとなん稱びて、勇氣に恵まれ、婦女を敬ひ、智謀に富む、長じて南方の騎士の旗下に馳せ青き炎の城を探るべく……」

竹下は、奇妙な文句を暗詠しながら物物しく筆を執つて「The Coming of St. Anthony」と書いて性急な咳拂ひを續けた。



パトリックと云へば、翼のある白馬に打ちまたがつて、地獄の魔王から「如意の劔」を奪ひとるクリステンダムの「赤靴下」だ。クレテの海底に埋没したカーピルの女王の腰帯を素めに水底を掻き潜る長呼吸の選手の名だ、セブラは——。

——何うも、冗談なのか、眞面目なのか瀧本には、これらの「シルバー・ナイト」の鼻息のほどが解らなかつたが、自分の番になつたので、同じく單に無言の健在の意を知らせるだけのつもりで自分の名前を誌すと、傍らから武一が早速見とがめて、

「そんな呑氣な名前なんて書き入れて、若しも堀口の一味にでも——」

と、鋭い注意を與へた。前にも俺は傳書鳩を彼方の森で打たれたことがあるぢやあないか、それ、この前の總選挙の時だつた。疑り深い彼等はそれを反對黨へ送る祕密通信か何かと間違へて……」

「選挙の時だつたが、然しあれは篠谷の太一郎がお百合に宛てられた手紙を變な風に感違ひして、ネーブが飛んだ犠牲になつてしまつたわけさ。」

「酷い奴だな。——此頃彼奴は蜜柑畑のリブを追ひ廻してゐるさうだが、消息を聞かないか

ね？」

「聞かない。」

と瀧本はかぶりを振つた。蜜柑畑の働き手である此處の家の留守居の年寄の娘が、リラの花のやうな感じだといふので彼等はさう稱んでゐたが——。蜜柑の季節になるとカーキ色のシャツで、まるで少年のやうな姿で、畑の手傳ひをしたり、口笛を吹きながら御者臺に乗つて問屋へ運ぶ荷物の馬車を驅つたりしてゐる八重といふ娘である。「八重なら大丈夫だよ。太一見たいなあんなでれでれた野郎が、變に云ひ寄つたりすれば、あの鞭でひつばたかれる位のものだよ。」

「……ネーブのことを思ひ出すと俺は、何うしても太一の奴と……」

武一は、もう今ではこの一番ひより他に残つてゐない傳書鳩を籠から取り出して、可憐で堪らなさうに頬を寄せてゐた。

瀧本は、いつか武一が血に染つたネーブの骸を拾ひあげて、泣いて——何う慰める術もなかつたあの日の事を思ひ出した。篠谷の伴の太一郎がステッキ銃でねらひ打ちにしたのである。



銃聲を聞いて——ネープの姿を見送つてゐた武一と瀧本の眼に、同時に、ネープが燕のやうに腹を反して轉落する態が映つた——二人が駆けつけて見ると

「僕は野鳩のつもりで打つたんだよ。」

太一郎が脚下のネープを指して寧ろ得意さうに呟いた。——武一は、たらたらと血潮がしたり落ちるネープを懐中の手に乗せると、素肌の胸に直接に當てて、彼女の體温を見守つてゐただけだつた。

「君は——」

と瀧本は思はず理性を失つて太一郎の肩をつかんだ。「さつき僕等がこれを飛ばさうとしてゐるそばを通つて——解つてゐた筈ぢやないか！」

「この邊には鳩は多いからね。」

太一郎は皮肉な抗辯を試みたが、唇は微かに震へてゐた。——

「僕はこの通り官札を持つた遊獵家なんだから……云へば、まあ、それは氣の毒なことをしましたな——と、それだけの挨拶で済む筈だよ。」

「遊獵家だつて！」

その言葉に瀧本は、無比な憤りを覺へて、力一杯つかんでゐた肩先を壓した。「鳩についてゐた手紙は何うしたんだ。君は、その手紙を見る爲に、斯んな酷いことをしたんだらう。」

その頃武一は瀧本の處へ鳩の籠を運んで來ては、自家までの傳達の練習をつけてゐた時分であつた。——武一の家の屋根で、百合子がそれを待つてゐる役だつた。だから、此方から飛す時に別段用もなくとも何かしら通信文を認めて送つたりしてゐた。屋根の上で、それを百合子が讀んでゐるところを、太一郎は何時と遠くから眺めて、餘外な感違ひを起して好奇心を持つたのである。

その時のは何んな内容だつたか瀧本も忘れたが、

「うむ——それは……」

太一郎が狼狽の色を露にして、

「手紙とは知らなかつたさ。妙なものがついてゐると思つて見ただけだよ。そこに棄ててあるよ。」



草むらの蔭を指差したので、瀧本が腕を離して、そつちを探さうとすると、

「あッ、違へた——僕は、うつかり懐中へしまひ込んでゐた！」

と慌てて太一郎が飛びのきながら示した紙片を見ると、表に瀧本が徒らに大きく書いた百合子の宛名があつて、そして、もう封が切つてあつた。瀧本が更に責め寄らうとすると、もう太一郎は五六間も先へ逃げてゐて、振り返つて、

「好い氣味だ。鳩位ゐのことで泣きツ面をしてゐやがら——。今にもつと物凄い痛手を喰はしてやるから覺へてゐろ！」

などと、いわれもない罵りを浴せて、一散に駆け出して行つた。夢中になつて瀧本は追ひかけようとする、ネーブを抱いたまま草の上に倒れてゐる武一に氣づいたので、武一の方に駆け寄つた。

裏山の樺林の一隅には、その時武一と瀧本が慥へたネーブの墓が今も在る筈だ。

「で、守夫は、St. David と云ふことになつてゐるんだよ。」

獨りで黙頭きながら武一が指命したので瀧本は、わけも知らずに左う書き換へた。

(これは後になつて瀧本は讀んだのであるが、それらの名前は村井の、彼がいろいろな古典の騎士物語や神話中の人物を引用して、それに自分達の心象、経験、憧憬等を假托しながら創作した新しい浪漫派の歴史小説中のことになぞらへてゐたのであつた)

メデューサと稱ふ女惡魔の従妹であるポラスは夫を殺し、新しい夫を迎へるために、先の子供であるパトリックを邪魔にした上句玄關番の「惡龍」に命じて、彼を殺さうとした南方の騎士の一員に加はる念願でパトリックが或日、家を棄てて旅路に上つたところを龍は闇の森蔭で待伏せした。龍はその兩眼を、パトリックがその下を眼指して進路を運ばなければならぬオリオン座の星のやうに輝かせて、巧みに誘き寄せた。南方の騎士の館は、オリオン座を横切る銀河のほとりに位してゐる。——思はぬ眼近にオリオンの星を見出したのでパトリックが雀躍しながら駆け寄つた時に、龍はいきなり火焰の洞窟と見紛ふ口腔を開けて迫つた。が、パトリックはその時、寧ろ自ら進み寄つて、一氣に、最も身輕な三段飛びで、身を翻して化物の肚の中へ飛び込んでしまつた。だから五體には化物の齒型一つら残なかつた。ポラスの玄關番は、思はぬ失策をしてしまつて眼を白黒させながら思案したが、肚の中のパトリックを



殺すためには自分も死ななければならぬといふ手段より他に、何んな考へも浮ばなかつた。彼は、このままではポラスの館に歸るわけにも行かず、死ぬ決心は決してつかず、泣きながら彼方此方の山山をうろつき回つてゐた。その間にパトリックは、揺籠よりも快い龍の腹の中で充分の眠りを執り、適度のオーミングも役にたつた。龍は腹の中の重味を持ち扱つて愚圖愚圖してゐる間に、激烈な神経衰弱に襲はれて、青い湖の傍まで差しかかると列車が停止するやうにしづかに悶死した。パトリックは龍の腹から逼ひ出て、湖の岸で顔を洗はうとする

と、水の中に、久しい前から行衛知れずになつてゐた妹のアニマスの顔が映つてゐた。後ろを振り仰ぐと、バベルのやうな高塔がそびえてゐた。塔の頂上の窓から、アニマスが半身を乗り出して、救ひを呼んでゐるらしかつたが聲はとどかなかつた。

二人は、幼い頃にエチプトから來た家庭教師の星占ひの博士に教へられた、體操に依つて表示する象形文字の信號法を思ひ出して、自由な會話を始めることになる……

閑話休題、パトリックは、龍の腹に眠つた間に「争はずして惡魔を退治する術」を感得した楯を持たぬ騎士の名前である。ダビッドはパトリックの友達で、アニマスの戀人である。

海の上からは發動機船の圓かなエンヂンの音が悠やかに響いてゐた。白雲の影ひとつ見あたらぬ澄みきつた青空であつた。

そこで武一は、出來あがつた「メッセージ」を傳書鳩のハンスに結んで、  
「さあ、飛すぞ！」

と一同に合圖した。——黨員達は胸先に十字を切つてハンスの行手の安全を祈りながら、交その翼に接吻を贈つた。——やがてハンスは武一が徐に眼上にささげた掌の上で、疾る黨員達の心を壓鎮めるかのやうな沈着な羽ばたきと共に、青空を指してゆらゆらと舞ひ上つた。そして黨員達の頭上に、圓光のやうな輝かしい螺旋線の輪を描きながら、R村の方角を見定めると丘の彼方を目指して流星の勢ひで姿を没した。

皆は、何んな事件が起らうとも朝の幾時間かは夫々自分のための仕事にたづさはるといふ掟の下に、プラトン流の共和生活を始めたところなので、この第一日の朝も斯うしてハンスを見送つてしまふと、急に黙り込んで家の中へ立ち戻つた。

竹下は、スケッチ・ブックを携へて水車小屋の見える街道を横切つて行つた。村井は、瀧本



の書架から二三冊の詩集をとり出して、また庭に出て芝生に寝轉んでゐた。夏の砂日傘サビカサを立てて、彼は、その影で、

「マイエーの蠻族は草を追ふた、妻と子と家畜を従へ、一袋の銀貨を腰につけ——」  
などと、詠ひながら創作の構想に耽つてゐた。

瀧本は、自分の部屋に来て机に凭つたが、空け放された窓から見える明るい丘をぼんやり眺めてゐた。——見ると、ジクザクの山徑を脚速く昇つて行く人形のやうな男が此方を振り返つて帽子を振つた。——武一である。瀧本も手を振つた。

間もなく武一は頂きに達すると、雲ひとつ見えない青空をスクリーンにして武張つて大の字に腕を挙げ、熱い意気を示すかのやうであつた。——丘に反射する雨のやうな陽が眼ぶしく明る過ぎて、武一の姿だけが、見霞むデライト・スクリーンの真ん中にぼつんとシルエットになつて映り出てゐるので、一體何方を向いてゐるのか見定め憎かつた。が、一息つくとそのまま向ひ側に降りて行つたので、此方を背にしてゐたことが瀧本に解つた。武一は、丘の向ひ側の村にむかつて、武張つてゐたわけである。ハンスの行手を見定めに行つたのだらうと瀧本は

思つたが、それにしては大分力の容れ具合が凄じ過ぎる！ と軽い不安の念に打たれた。

俺は今のところ君達のやうに自分の仕事を持たぬ身であるから、その時間には、獨りで思つたままの事を遂行してゐる——武一は、さつきそんな事を云つてゐたが？——と瀧本は思ひながら、翻譯の仕事を展開してゐた。彼の仕事は、星學大系といふ出版物の一部分であつた。

## 七

八重の家は水車小屋に並んだ村境ひの、馬蹄の中に塚本と誌したくぐり戸のついた鍛冶屋である。父親は蜜柑畑の仕事を持つて殆んど瀧本の方に寝泊りをしてゐるし、兄の七郎は漁場にとめて、これも三日置き位にしか戻らなかつたから、この三人暮しである塚本では店は大方休業にして八重も漁場へ手傳ひに行つたり、夜は父親の方へ泊りに行つたりしてゐた。

八重と父親は幾日振りかで、荒れ果てた工場に戻つて來た。篠谷から、早急に仕事を頼まれたからである。ラッキイの鐵杵を打たなければならなかつたのである。七郎に暇のない時は、



八重が合槌を打つことに慣れてゐた。七郎に暇がある時は父親が他の仕事に赴いたから、この頃では工場の助手は殆んど八重ひとりの受持であつた。

「森の鍛冶屋ツてえのを覺へた、父さん？」

「何だい。それあ？」

「守夫さん達が好くレコードで演つてゐる。妾あれがとても気に入つて、すっかり覺へてしまつたわ。それで、この間借りて來たのよカバン見たいな蓋音機と——。仕事をしながら、あれを掛けたら面白いだらうと思つて——森に住んでゐる貧乏な鍛冶屋が、朝は鳥と一處に目を醒して、トンテンカン、トンテンカン……鳥の鳴き聲に合わせて大働きを始めるところなのよ。」

「ああ、あの騒騒しい樂隊か、チェツ、馬鹿にしてゐやがら！が、まあ結構だよ。借りて來たのなら掛けて見るが好いさ。こいつは何しても今日中に仕上げてしまはなければならぬから。」

父親は煙管をくわへながら鞆をあをいでゐた。薄暗い土間に焰がゆらぎはじめた。

「ね、父さん、表の障子を閉めて頂戴よ、仕事着に着換へるんだから。」

八重は毛緑のジャケットを脱ぎ、そして素裸になつて、壁にかかつてゐた男用のメリヤスのシャツをかむり、スカートを短くたくしあげながら脚のかたちに分けて、胸からダブダブのパンツが續いてゐる仕事服を穿き肩先で備掟を掛けた。そして、バンドも何もついてゐない古い學生帽を兩耳をかくす位に深くかむつて（火の粉が飛ぶからである。）父親に代つて鞆の前に安坐をした。

「お前をな、篠谷で小間使に欲しいといふ言傳がもう大分前にあつたんだが、俺は冗談ぢやないと思つて、まあ態好く斷つては置いたんだが、あの太一郎の了見が俺には解らないよ。」

父親が突然そんなことを云つた。

「鍛冶屋の娘が、そんな小間使ひなんて……お行儀ひとつ知りはしない。——この格好を見に來るが好いわ」

八重は腕が足りないので、バック臺でボートの練習をしてゐるやうに前後に大きく體を屈伸させながら鞆の把手を動かしてゐた。

「ほんとうだ！」



父親は、架空の影をセセラ嗤ふやうな苦笑を浮べ、娘に好意の眼を向けてゐた。

「然し、お前、斯んな暮しを不服に思ふことはないかね、稀には、いつの間にか、もう年頃なんだからな。」

「不服——それあ不服だつてあるわよ。」

八重は鞆の把手と一處に、わざと床とすれすれになる位に仰け反つて、

「あらまあ、父さんたら、妾が不服だなんて云つたら、あんな心配さうな顔なんてしてゐるわ。可笑しいな！」

と笑つた。八重は、ふざけて、氣取つた演説口調で

「何んな生活にだつて、幾分の不服や憂鬱といふものはつきまとふのが當然であり、ただこれを如何に取り扱ひ……ハツハツハ、學校で修身の先生が仰言つたのよ。」

などと戯れながら、起きあがつた。

「あらまあ、つまらないことを云つてゐるうちにすつかり火が出来過ぎてしまつたぢやないの。」

「篠谷の鐵杵を打つのは此方も不服だ。」

父親と娘は反對の位置に取り換つた。眞赤に焼けた鐵片を金床の上に取り出して父親がコツコツと金槌で叩いてゐる間に八重は、仕事場に續いた疊の居間に逼ひあがつて、蓄音機を廻しはじめた。其處の壁の上には、もうすつかり茶褐色に變つてゐる七郎のと並んで八重の高等小學校卒業の優等の免狀が額に入つてゐる。卒業生の記念の寫眞も並んでゐる。

「さあ、出来たよ。」

父親が合圖すると、八重は力一杯の兩腕で持ちあげる槌を執つて向ふ前に構へた。父親が調子をとつて小槌を振りあげ、蹄鐵を續け打ちにした後に、そら來たツカーンと金床を打ち鳴らすと、大上段に振り翳されて合圖を待つてゐた八重の槌が火花の中に振り落された。——二つの槌の音が入れ交つて、狭い工場には忽ち活氣が滿ち溢れた。

「レコードが恰度合ふぢやないの。あれが森の鍛冶屋なのよ。」

「なるほどな——。この勢ひなら午までには大方仕上るせ。厄介拂ひだ！」

二人は踊つてゐるやうに面白く調子づいて、切りに仕事を忙いでゐた。



恰度それと同じ時刻であつた。七郎が濱邊で網干しの仕事にたづさはつてゐるところに、鷗打ちの散歩に來たといふ太一郎が、ステッキ銃を羽織の蔭にぶらさげながらやつて來て、手まねぎした。

「うちの誂へものは一體何時出来るのかね！」

七郎は聞いてゐなかつたので、知らない旨を答へると太一郎は、憤ツとして、

「君の親父は恩知らずだな。」

いきなり左う怒鳴つた。

「だけど八重は、そんな小間使ひなんて、そんな柄ぢやない、當人が何うしても訊かないんだから……………」

七郎は、まるで芝居のやうな話だ！と思つて、思はず横を向いて笑つてしまつた。恩知らずなどと何を楯に云ふのか七郎は知らなかつたが、八重を、先づ行儀見習ひとして奉公に出しゆくゆくは嫁にするかも知れない——なんて云ふ馬鹿馬鹿しい篠谷の申出を眞面目に諾ける筈はないと思つてゐた。太一郎の、小間使ひの話に瀆されて、飛んだ破目におとし入れられた漁

場の仲間の者の娘に就いての事件を七郎は知つてゐる。

「やあ、ラツキーが、もう來やがつた。——これから歸りがけに君の家に寄つて行くんだが馬蹄は間に合ふかしら？」

太一郎は、篠谷の下男に引かれて渚を歩いて來る馬を眺めて、また念をおした。

「だから私には解らないと……」

七郎は其方を眺めながら

「あれは森さんの馬ぢやないですか？」と呟いた。

「無論さ。」

太一郎は得意さうに小鼻を蠢めかせた。「武一の奴が、馬鹿な自惚れを出して、お前んこの親父の借金證書に判などを捺しやがつたから、彼奴の知らない間にラツキーを金利の代償に分取つてやつたまでさ。」

「一體その金利とかは幾ら位の……………」

「百圓ばかりのことなんだが、君、拂へるかね。尤も、今年の競馬でラツキーには相當儲けさ



せるつもりなんだが——。」

太一郎は、にやにやしてゐた。七郎は、そんなことは夢にも知らなかつた。第一、自分の父親が篠谷に負債があるなんてことも初耳である、そんな借金がある位なら父が自分に話さない筈はない——と思つた。不圖七郎の頭に、わけもなく自分の家の壁に掲げてある寫眞が映つた。尋常科を出る時の記念の寫眞だから二十年も前の姿だが、その中には武一も守夫も、そして太一郎も居る、皆なはあれから中學へ行き自分は高等小學へ進んだ——部屋の中にそんな額より他に何の飾りもないためか、始終それを見あげて、皆の子供の顔かたちを今でもはつきり覺へてゐる——何うしたことか七郎は急にそんな幻が、昨日のことのやうに眼の先にチラついて來た。幻と、見竝べて見ると、眼の先の成人の太一郎だつて、はつきりと昔の面影を宿してゐる……

「ぢや私は、これから武ちゃんのところへ行つて、事情を聞いて來ませう。」

何故俺は、この太一郎にだけ斯んな言葉づかひをしなければならなくなつたのだらう、何故太一郎ばかりが獨り奇妙な傲慢の館に立てこもつて仲間脱れになつてゐるのだらう——俺は無

教育の漁夫なために、斯んな都合もない意久地無さに襲はれるのか知ら——然し七郎は、たつた獨りで小舟に乗つて何うしてもつかまへることが出來ない過ぎ去つた日の夢を追ひかけてゐる見たいな、取りとめもない雲のやうな寂しさに襲はれてゐた。漁夫である自分が、無性に悲しくなつて來たりするのであつた。理屈は、さつぱり解らなかつた「馬鹿な、今更武一に訊いたつて何うなるものかね。——それよりか、八重を奉公に寄せば此方ちや三年分の給料を先に拂ふといふ條件つきなんだよ。」

奉公だけなら耻ではない、武一に迷惑が掛つてゐるのなら一層太一郎の申出を享け容れてしまはうか？——七郎は、簡単に左う思つたが、渚で洗はれてゐるラッキーを見ると、まるで馬と妹とを取り換へる見たいな矛盾を覺へ、思はず吃つと太一郎の顔を睨め續けるより他に言葉を失つた。

「考へるところはなからうがな、今の君の立場として見れば……。武一に相談して來るなんてそんな君、意久地の無い話ツてあるものかね。それに君は今や塚本家の當主なんだぜ。主人公が自分の家の負債に就いてさつぱり無我夢中だなんて、そんな事が他人に話せる類ひのものだ



らうか、君の考へひとつで何うにだつて整理のつくことだし、加げに相手は僕の場合なんだから色色と好都合ぢやないか。それよりも君、うかうかしてゐると法律上厄介な話にもなるからな！」

法學士なんていふ肩書を誇示する太一郎に斯んなことを云はれると七郎は、何だか得體の知れない怖ろしい影がいつの間にか自分の後から翼を擴げて忍び寄つてゐるかのやうな不安に襲はれた。

「で、八重が君の家へ奉公へ行きさへすれば何も彼も綺麗になるといふわけなんだね。」

「さうさ、ただの奉公だよ。何も妾に寄せなんて云ふわけではない、君の親父は何か感違ひして、やがて俺の嫁にでもするのか、それでは境遇が違ひ過ぎるからなんて恐縮してゐるんだが尤もな話だよ冗談ぢやない、親父こそ自惚れた、誰が八重となんか……。たださうでもしなれば君の格好がつくまいと此方は心配して、寧ろ餘計な世話を焼いてゐるまでのことさ。」

「……有り難う。だが、その話は今此處で決めなければならぬほど、その期間とかが……？」

七郎が鼻のやうな眼をして斯う訊ねると、さすがに太一郎はてれた嗤ひを浮べた。

「期間といふのは、つまりその負債の方のことだがね……」

「ぢや八重の話とは別なんぢやないか、そいつを返しさへすれば済むんだらう。」

「それは済むさ。然し君も實に解らん男だね。既にもう半年も前にその期間はきれて、それで武一が間に入つて騒いでゐるといふ始末なんだよ。」

「ぢや俺は、今月一杯に金は返すよ。何云つてやがんだい。」

七郎はカツとして思はず怒鳴つた。太一郎が、金と妹とを關連させて云ひ寄つてゐたことはつきりと解ると、無性に肚が立つて來て勝手にしると思つた。

七郎は、大波にもまれる舟の中にある時のやうな、激しい感情を辛うじて壓へながら砂を蹴つて其場を立去らうとした。太一郎が、袖をとらへて何か云はうとしてゐたが、聞えもしなかつた——軽く振り拂つたつもりだつた腕が、太一郎の肩先に當ると、バネで弾かれたやうに彼は突き飛んで尻持をついた。

七郎は振り向きもしないで、我家を指して陸へのぼつて行つた。——すると太一郎は、渚に



ある馬方を聲を擧げて呼んだ。

「漁師を怒らせてしまった。彼等は野蠻だから、徒黨を組んで逆襲して来るに違ひない。逃げなければならぬ。」

彼はラツキーにまたがると、渚に添うて駆け出して行つた。——まづたく、この邊りには篠谷に反感を持つてゐる多くの率直な漁夫がゐて、今も七郎が砂を蹴立てて立ち去ると、相手が太一郎であつたことを認めた網干の連中は仕事を止めて、がやがやと圓陣をつくつたところであつた。そして、一目散に遠ざかつて行く太一郎を見ると、一勢にワーツといふ閑の聲を擧げた。その嘲笑を追跡と聞き違へて太一郎は夢中でラツキーの腹を蹴つてゐた。

遙かの松林のスロープから、網干の風景をスケッチしてゐた Anthony の竹下り、驚いて鉛筆をおいて立ちあがつた。

「塚本君ぢやないか、何うしたんだ？」

竹下は、鬼のやうな格好で兩眼に涙を一杯溜めた七郎が松林を脱けて行かうとしてゐる姿を認めて、追ひすがつた。

八

武一を先に立て、瀧本等三人は、また森の屋敷へ忍び込む途すがらであつた。これは既に幾度目かの夜盗である。

一同の物腰態度は稍圓熟の境に達して、脚どりと云ひ、咳拂ひの具合と云ひ、道往く人に出遇つた時の、何氣ない挨拶を交して素知らぬ風を装ふ話振りと云ひ、凡そもう何處にも怯えた氣色のない堂堂たるロビンフッドの徒黨であつた。

彼等は村の青年團から劍術道具を借り出して竹刀で各自の背に荷ひながら丘を越へた森の村の青年團と試合に赴く風を装つてゐたのである。實際、向ふへ行き着いて見て、森の屋敷の固めを踏み越え損つた時には、其處の村の道場で、堀口や篠谷方の若者を相手に激しい勝負を渡り合つて鬱憤を晴すのが當だつた。此方は偶然にも揃つた初段級の腕達者ぞろひであつたから、彼等に負をとつた驗はなかつた。就中竹下の面取りの早業と村井の刀捌きの目醒しさでは



R村の連中は悉く眼視つて、一體彼奴等二人は何處からやつて来た天狗なんだらう。ついでこの邊りに見たこともない達人ではないか。吾吾のチームに若しもあれ位のが二三人居たら何處へでも遠征して近在に覇を唱へてやるんだが——と囁き合つてゐた。この近在では軟式野球よりも遙かに剣道の方が隆盛で、年年春秋のリーグ戦になると村中がその争覇戦に熱狂するといふ有様であつた。

「今夜もお揃ひでお出かけですかね。この分では秋のベナントはH村のものだといふ評判ですから、まあ精精練習して来て下さい。」

「R村でも負ん氣で、毎晩の練習時間を十時まで繰りあげたさうですぜ。」

すれ交つた野良歸りの人達が彼等の姿を見ると、頼もしさうにして斯んな言葉を掛けた。

やあやあ！ など、晴晴しさうに手を振つて行き過ぎるが、此方にとつてはそれどころではなかつた。——以前瀧本はあの海邊の家にあつた實生活に用のない様な道具類などを、間もなく彼處を引きあげるつもりだつたので武一に謀つて、森の家の土蔵に預けて置いたのであるが、今やこれを再び持ち出して賣却しなければならなかつた。翌月になればもうローラが到着

するといふのに瀧本の生活の方針は丸で有耶無耶だつた。武一も亦、就職の目當がつかずこの先百合子を保護するためには、何うせもう父親が顧みてゐない藏の中の巻物とか金銀とかを運び出して兄妹の上京後の當分の生活費に運用しなければならぬ破目だつた。土蔵は篠谷の手に依つて個人的に封印されてゐる状態だつたから、この行爲は或種の犯罪に相違なかつた。その上また瀧本に就いては、それらのものに至るまでの所有權云々に關して堀口剛太が、邪な監視の眼を輝かせてゐるので、何うしても彼等は夜盜の手段を執るより他に道がなかつた。それで今になつて見ると百合子が、あの屋敷に伴れ戻されてゐることは、味方にとつては幸ひになつたわけである。百合子は土蔵の鍵を祕藏して夜夜彼等を導き込む役目を果しつつあつた。堀口や繼母や篠谷もこれに目をつけて、鍵の在所を家探ししてゐるさうだつたが、そして彼等も亦百合子に依つてそれを尋ね出さうとあせつてゐたが、百合子は飽くまで空呆けて、

「それはお父さんでなければ解らないわ。G町へ行つて訊いていらつしやいよ。」とはねつけるだけだつた。森の主は、この屋敷に見限りをつけて三驛ばかり離れたG町へ移つて、隠遁の夢をもくろんでゐるだけだつた。そして決して此處に脚踏みしようとはしなかつた。



堀口と繼母が百合子を此處に伴れ戻した理由は自づと了解されたわけだつた。

「ねえ百合さん、あんたが鍵の所在に就いては前前から解つてゐるからと父さんだつて左う仰言つてゐるんですよ。整理上とても困つてゐるんですよから、そんな意地悪をしないで渡して下さいよ。」

「それさへ教へて下されば太一郎君の方だつて、一切もう隠便にして、先づラッキーをあなたにお返しすると云つてゐるんですよ。競馬だつてもう目近に迫つてゐるし、ラッキーがとり戻せるんなら、斯んな得なことはないぢやありませんか。」

堀口や太一郎は、可笑しい程神妙になつて斯んな風に百合子に迫つた。そして自分達の眼のとどかぬ時は、笹谷側の雇人達を屋敷の中に配置して百合子の動作を監視せしめた。森家の雇人と彼等との間にも百合子を中心にして絶え間のない暗闘が繰り反された。

「お前さんといふ人は、何うして左う強情なんだらう……」

時時訪れて来る繼母も堀口達と一處になつて、百合子に詰め寄つた。「お父様からのそれがお言傳だと云つてゐるのに——藏の鍵なんてお前さんが持つてゐたつて別段役にもたつわけでも

ないのに……」

百合子には彼等の内心の業慾がはつきりと解つてゐるので、瀧本等の場合がなくてもそんな甘言に乗る筈はなかつた。さんさんに、意のままに、業慾者連を騙ることが出来るのが思はぬ愉快となつた。

「ええ、——」と百合子は故意に素直らしく首を傾げたりした。

「前には妾が、お藏の鍵の番だつたけれど、東京へ行つてゐる間は兄さんに渡して置いたのよ。」

未だ百合子が云ひ切らぬうちに堀口等は、

「それあ大變だ！　ちや早速武一君を伴れて来て……」などと慌てて、目配せをするといふ始末だつた。

「それはもう妾がとうに兄さんに訊ねたわよ。兄さんはお父さんに渡してあると云つてゐたわよ。」

「恰で話が合はんな！」



堀口は、思案が盡きて腕組をするどくつたりと首垂れてゐた事もあつた。

「お父さんは、ひよつとすると、あんな風な癩癩持ちだから河の中へでも棄ててしまつて知らん顔をしてゐるのかも知れなくつてよ。」

百合子が自分も不安さうにして斯んな事を云つた時には、堀口等は思はず異口同音に、失敗たなあ！と長太息を洩したものである。それから彼等は寄寄相謀つた揚句、合鍵を鑄造することに決したが、何しろ二百年も前から傳はる錠前なので到底今日のものでは役に立たぬことが解つて改めて、入念の家探しに没頭してゐる時だつた。

森の屋敷は鬱蒼たる針葉樹林に取り巻かれて、大昔の面影をその儘傳へたピラミッド型の斜面を持つた草葺屋根を二棟に分つ館を中心にして、池を圍らせてゐる。館の奥の間には、道中の大名が宿泊する「鶴の間」と稱ぶ簾のかかつた上段の部屋があるかと思へば、見るも怖ろしい丸太格子に區切られた牢屋があり、その壁には悪人の背上に百叩きの責苦を加へた拷問の鞭が、百年の年月の経過も知らぬ風情に、急用の役にも立たんと云はんばかりに掛け放されてゐる。また眼を庭園の彼方に放つならば晝も薄暗い崖の邊りからは源を遠く五里の山奥の古沼に

發した堂堂たる水勢が勢ひ餘つて瀧と溢れたかの如く、不斷にきらびやかな水煙を放つてゐる態を見出すことが出来る。瀧は満満たる水を池に湛へて、舟を浮べ、水鳥を遊ばせ、期節になると雁を呼ぶ——池の水は更に庭の中へ招び込まれて、床下を鯉が泳ぐ泉水となつて離の茶屋から書院の窓下を流れ饗宴の廣間の前に來て悠やかな渦を巻いてゐる。放飼ひに慣れた一番ひの丹頂が悠悠と泉水の合間に遊び、橋を渡つて築山の亭のほとりで居眠りをしたり、翼を伸して梢に驅り空に呼應の叫びを擧げたりしてゐる書院の裏手にあたる中二階造りの納戸部屋から藏前に至る徑は凡そ十間あまりの長廊下が泉水の末端を跨いで掛け渡され、現在でも廊下の往來には昔ながらの朱塗の雪洞を鑿してゐた。「南方の騎士」達は、登山用のロープを用ひて堀側の木の枝から藏の裏手に降りると、鶴の小舎の蔭に身を潜めて、納戸の窓から合圖する百合子の雪洞の揺れ具合に従つて仕事に取りかかるのを順序としてゐた。納戸から三階になつて屋根裏の一角に達する階段を登り詰めると、草葺を四角に凡そ一坪程に切り展いた封建時代の展望臺に達する。武一は此處を鳩舎に用ひてゐた。若しも彼等の潜入に不首尾の日には、百合子は此處に赤旗を掲げた。旗は鳩の訓練用に使ふものだつたから、誰も怪しむ者はない筈であつ



た。赤旗を見出した日には彼等は、その儘村の道場に赴いて劍術の練習に終り、折好く夕暮時の鳩舎に赤旗の影が見えないとなると一同の者は塚本の鍛冶屋店に引き返して、暮色を待つた後に出發するのであつた。萬一の場合を慮つて劍術道具に身を固めて竹刀をひつさけて忍び込むのを常例としてゐた。

「堀口と太一が今迄お酒を飲んでガヤガヤやつてゐたけれど、すつかり寝込んでしまつたからもう大丈夫だよ。」

納戸の窓から差し出された雪洞の灯が大きな圓を描いた。首尾好しとばかりに躍りあがつて乗り込んで行つた夜盗達を、眼下に、百合子が廊下の窓から雪洞を翳して乗り出しながら囁いた。十日ばかり前の薄曇りのした晩で、期節外れの螢が時たまに瞬いてゐた。洋服の上からひつかけた牡丹色の羽織の袖で灯りのゆらめきを氣遣ひながら、顔のまはりをぼんやりと明るくしてゐる百合子の斷髪の姿が、あたりの様子と却つて不思議な調和をしてゐる見たいな、繪のやうな奇異の感に打たれて瀧本は、茫然と見惚れてゐた。

「うたたねなんだらう。何時目を醒すか解りやしなからう。」

武一が念を壓すと、百合子は急に豊かな得意さうな微笑を湛へて、

「それがね、大丈夫なのよ。妾が試しに顔に水を吹つかけても身じろぎもしないで二人とも死んだ見たいよ。……ペロナールを粉にして、そつと徳利の中に溶し込んでやつたのよ。それがすつかり利目が廻つしまつてたの！」

と説明した。皆なは百合子の氣轉に舌を巻いて思はず會心の顔を見合せた。その間に、蔵の前ですすみ寄つた百合子は、難なく扉を開けながら、未だ片隅にうろろしてゐる仲間を促した。そして、一同を中に招じ入れて扉をもとのやうに閉ぢると、

「さあ、もう大丈夫よ。何んな聲で話し合つても平氣だよ。」

と百合子は雪洞を高く差しあげて、これ位の大きな聲を擧げても平氣だといふことを披露するため、反響を面白がる子供のやうに——「こんばんわ！」などと叫んだ。それが屋根裏の邊に響いて、こだまとなつた。

蔵の中には、様様な鳥類や獸の剝製が何十個ともなく彼方此方の棚や長持や鐵櫃の上などに處關はず置き並べてあつた。それらのコレクションは百合子等の父親の青年時分からの丹精で



ある。森氏は自家に飼つた動物が斃れると、その姿を剝製にして保存させるのが習慣だつた。

鎧櫃の上で、翼を擴げてゐる大鷲は、裏籤の巴丹杏の梢で森氏が十年ばかり前に生捕りにしたものである。大鷲は青大将と格闘して氣絶したところを捕獲されて、築山の亭に久しい間飼はれてゐたことを瀧本は憶えてゐるが、何時死んだのかは知らなかつた。大黒柱の蔭にたたずむ一番ひの丹頂は、これは未だに庭先に遊んでゐるのかとばかり瀧本は思つてゐたのに、何時の間にか剝製になつてゐた。塙を乗り越へて鶴の舎の傍らに隠れてゐたが、今が今迄瀧本はその舎が空屋であつたといふことは知らなかつた。長持の上には何時か武一が飼つたことのある大木兎や、太一郎に打れたネーブの仲間達、それから瀧本が、い、わ、れ、を、知、ら、ぬ、一、頭、の、狐、が、野兎、山鳥、家鴨、その他様様な家畜類と無茶苦茶に雑居してゐる。瀧本にとても深くなつてゐたセントバーナードの「ジャツキ」が大きな花瓶の傍らに立つてゐた。瀧本は、立ちどまつて思はずジャツキの頭に手を觸れずには居られなかつた。また傍らの鶯うぐいすの籠をのぞいて見ると、その中には百合子達の亡くなつた母のベットであつた「タチバナ」が、枝から枝へ飛び降りようと身構へてゐた。百合子が子供の頃に飼つた悪戯鸚鵡の「ミンミー」が鹿の角の刀掛け

にとまつてゐるかと思ふと、古典版のブリタニカの書棚の前では印度産の大孔雀が、見事に翼を擴げてゐた。これは嘗て森氏が友達の海軍將校から贈られたもので、村に着いた當座は見物人が群がり寄せて大變な騒ぎであつた。

それらの物體の影が、百合子の揺り動かす雪洞に伴れて伸びたり縮んだりした。さうかと思ふと、金目にならぬガラクタには眼も呉れずに踏み越へて行く夜盗達が、懐中電燈をピカピカと振り回しながら脚元を照らしたり、隅隅を見とどけたりする毎に、それらの動物が闇の中から稻妻を浴びて飛び出すかのやうに映つた。——彼等は、二階から三階へおし上つて今日こそは最も運び出し憎い重荷を持出さうと決めたのである。

瀧本は階段の昇り口で見菜を切つてゐる仁王の像の傍らから、手にする電氣の光りを放ちながら動物達の躍動する影を飽かずに眺めてゐた。

そして近頃の不思議な生活を今更のやうに考へたり、恰で形のない綺麗な妙にうら寂しい夢に誘はれたりしてゐると、頭の上から、

「何を獨りでそんな處で考へ込んでゐるの、それとも何が目星しいものが見つかつたの？」



と百合子が呼びかけた。——振り仰ぐと、百合子は恰度仁王像の肩から灯りと一處に覗き出てゐた。

「皆なは三階で休憩ですつて——それでね、お腹が空いてしまつたからパンを取りに行くついでに、ブラック・ドラゴンの寢息を窺つて来る使命を享けたのよ。途中まで一處に行つて見な

571

百合子が左う云ふので瀧本が、其由を三階へ向つて聲を掛けると、

「おーッ。」

と武一が呼應した。「——乾盃をしようぢやないか。何とかして来いよ。」

「さあ、早く早く！」

百合子は瀧本の手をとつた、「斯うすれば灯りなんて要らないわ——焦れつたいわ、こんな雪洞なんて……」

——扉を内に引くと、月の光りが、とても明るく流れ込んだ。振り返つて見ると、光りは恰度鶴の脚元の邊まで達して、白い翼だけがはつきりと浮び出た。手を執つたまま、驅けて長廊

下を渡つた。それでも、歩きながら斯んなことを話合つた。

「妾——昨夜からちつとも眠れなかつたわ。」

「百合さんの不眠症なんて信じられないやうだが。——それで、ペロナールなんて持つてたんだね。だけど、あんなものを常用すると毒ださうだぜ。」

「いいえ、違ふわよ。それはあの人達に……」

と云ひかけ百合子は、急に立ち止ると、瀧本の胸に凭りかかつて

「ね、斯んなやうなところ何かの芝居にありさうぢやないの——科白よ。」

と戯れた。「一服盛つてやるつもりで、わざわざ取り寄せて置いたのでございますわ。」

そして彼女は、瀧本の胸に顔をおしつけて堪らなさうに失笑を懐へた。それから彼女は、これから行つて見て未だ二人が寝込んでゐたら一層のこと、そつと牢屋の中へ投げ込んでしまはうか、眼を醒して驚く奴等の顔を見てやりたい——などと云つた。

書院の前まで来ると、百合子は再び雪洞に灯を入れて、暫く瀧本に其處で待つてゐて呉れと云ひ残して、ふわふわと驅け出して行つた。何處にも灯りひとつ見えない長い廻り縁を傳つて



行く百合子の姿は恰で宙を駆けてゐるやうに見えた。それまで氣づかなかつたが羽織の下の百合子の服は、眞ッ白な長い袴だつたので、それが灯りの影に煙りのやうに飄りながら汀の廻廊を折れ曲つて見る見るうちに闇の中へ吸ひ込まれて行つた。——自分に氣がついて見ると瀧本は未だちやんと劍術道具に身を固めて、面を被つてゐたから、その鐵格子を透して眺めるせいにか、稍ともすると一つの物のかたちが二つにも三つにもなつてチラチラした。彼は竹刀を小脇にして欄干に脚を掛けたまま、暗闇の中で百合子の復命を待つてゐた。

五分、十分……と凡そ二十分近くも待たされたかと思はれる頃ほひ、其處から恰度泉水を越へて眞向にあたる遙かの部屋が、突然はツと明るくなつた。丸窓のある——「あれは百合子の部屋ぢやないか」と瀧本が呟いた時、向ふの端から順順の座敷に灯が燭つて、直ぐ眼の先の茶室までが急に明るくなつた。瀧本は思はず身を退いて、書院の中へ秘れた。彼は激しい鼓動に襲はれながら、竹刀の束に手をかけてゐた。——と、また座敷中の灯りは一時にスキツチを切られて、丸窓だけが大提燈の様に向方の闇の中に浮んでゐた。

窓から姿を現したのは百合子だつた。

「もう誰もゐないのよ。——あの人達二人は急に氣分が悪くなつてとつくに歸つてしまつたんですつて——葡萄酒を見つけたから皆なを招んで頂戴な。」

で瀧本が藏中へとつて返さうと、渡り廊下のところまで来ると、あまり此方が時間をとつたことを案じて武一達も降りて来たところだつた。武一は、袋に入つた薙刀を擔いでゐた。そして、

「こいつは、何とかいふ古刀で、柄の處處に金などが巻いてあるから相當なものだらうと思つて持ち出して来たよ。竹下は白磁の觀音の像だ。落すと割れてしまふから——」と、後の竹下を振り返つたのを瀧本が見ると、彼は長さ三尺ばかりの大きさの箱を縦に、子供を背負ふたやうに十文字に細紐で背中にくりつけてゐた。

「村井は？」

「……あいつは錦繪に見惚れてゐて動かうともしない。呼んで来て呉れ。」瀧本が藏の三階へ上つて行くと、村井は行燈の傍らで、面も何も脱ぎ棄てて、素晴らしい興奮の眼を輝かせてゐたが足音を耳にすると、慌てて灯りを吹き消した。



「俺だよ、村井！ 何うしたんだ？」

瀧本は懐中電燈をつきつけた。

「百合さんぢやないかと思つて吃驚したんだ。——おい、この猛烈な繪を見ろよ。……驚いたなあ！」

——グロテスクな戯畫の巻物だつた。村井は、瀧本の眼の先でそれらの巻物の數數を手早く繰り展げて行つた。その手の先は微かに震へてゐた。極彩色の、現實離れのした綺麗な男女の滑稽な痴態の有様が村井の繰り展べる巻物の中で行列を成してゐた。

「つまらない——」

と瀧本は云つた。瀧本は、斯る類ひの草紙は、餘程豫猶のある場合に美術的に觀賞する以外には、興味もなかつたので、靜かに村井の腕を引いて、母家へ促した。

「先程俺達が此處へ来て見ると、これが——」

と村井は尙も未練がましく、散亂した草紙類を振り返りながら、

「このまま、此處に行燈の下に展げ放しにしてあるんだよ。つい先程まで確に誰かが眺めてゐ

たに違ひないといふ風に、……」

彼は、恰で酒にでも酔つてゐるかのやうに常規を脱れた聲の調子だつた。「それあ、お前、誰だと思ふ、いや、誰が、此處で、これを眺めてゐたと思ふ？」

「そんな事何うでも好いちやないか。お前は大方何うかしてゐるぞ、馬鹿だな！」

瀧本は、仕末の悪い酔つ拂ひをあしらひ兼ねるやうに手古すつた。

「ああ、俺は實に惱ましい、この次に此處に踏み込む俺の唯一の目的は、ああしてあの行燈の下で……」

そんなことを唸つて恰で生體ないかのやうな酔つ拂ひ見たいな村井を瀧本が漸く引張つて、渡り廊下の處まで来ると、雪洞をかかけて飛んで来た百合子に突き當つた。

「まあ、あんた達は何を愚圖愚圖してゐたのよ。皆なが待つてゐるのに——」

すると村井は、酷く狼狽して、

「いいえ、あの……珍らしい剝製があんまり澤山あるので——」



しまつて、

「東京へ行く時にはあのミンミを籠ごと持つて行かうぢやないか、アパートの裝飾に丁度好いぜ」と、幾分後暗い見たいな思ひを秘しながら空呆けると、いきなり百合子は、

「嘘つき！」

と叫んで、晴晴しく嗤つた。そして、非常に大きな聲で、

「いやあな人達！ あんな繪を夢中になつて見てゐるなんて……ハツハツハ！」

左う云つて腹を抱へながら駆け出して行つてしまつた。

瀧本は得體の知れぬ不安に襲はれた。と、村井が、太い吐息と一處に「困つたな、守夫……」と、これも、眞ッ赤になつて、出そびれてゐた。

「今日は一晚中騒いでやれ。家もそももあるものか。おーい、お勝手の者——ほんとうの酒を持つて来て呉れ。主人がお客様を伴れて歸つて来たんだぞ！」

座敷の方から武一が、荒荒しく喚きたててゐる聲が響いてゐた。彼方此方に灯りが點いて、人人が行き來する影が慌し氣に障子に映り出した。——百合子の丸窓を見ると、駆け込んで來

た彼女が、羽織を脱ぎ棄てて露はな腕に何か箱のやうなものを抱へて、また走り出て行く姿が映つたりした。

x

x

x

其後、これが初めての訪れである。あの晩の、餘りにも野蠻な酒宴から様様な失策を演じた後なので、一同は、今宵こそは一層心を引き締めて仕事に掛らなければならぬと注意して、R村へ差かかつた。

「おゝ、白い旗だ。しめたぞ。」

丘の上に駆け上つて、望遠鏡を眼にあてた竹下が後ろを振り返つて呼ばはると三人は、一勢に腕を擧げて、ブラボーと叫んだ。

暮れかかつた盆地の一隅に森家の墓がそびえ立ち、展望窓には、たしかに白い旗が飄つてゐた。そのあたりを二三羽の野鳩が悠やかな圓を描いてゐた。——村井は、竹下から眼鏡をとつて、凝つと土蔵のあたりを見極めてゐた。遙か彼方の紫色の山山は、夕映えの僅かな餘光を浴びて頂きのあたりを黄金色に輝かせてゐたが山裾一帯は見渡す限り茫漠たる霞みの煙りに閉ざ



れて、森家の土蔵の白壁だけが黒い林の中に一點、窓のやうに輪廓を遺してゐる。

今度は瀧本が眼鏡を村井から奪つて、眼にあてたが、もう薄闇が一面に棚引いてしまつて盆地は涯しもない海原のやうだつた。——乾盃乾盃！ 皆なが無茶苦茶になつてしまつてあの晩のことは半ばは有耶無耶で何も思ひ出すことは出来なかつたが、左うしてゐると瀧本のレンズに、大寫しになつた百合子の不思議な艶かしさを湛へた姿が、夢になつて、ほのぼのと浮びあがつて來た。——ミンミーがよみがへつて、剝製の仲間達の間を歩き廻つてゐるかと思ふと、やがて、ジャッキも木莖も大鷲も徐ろに蠢めき出して、溜息や、羽ばたきの音が起つた。

九

あの頃のローラは一體いくつ位でであつたかしら？ たしか自分が大學へ入つて間もない頃で、父親の友達であつたアメリカ人のR氏の家庭にローラと共共寄食して、横濱から、東京の學校へ通つてゐたが、今見ると、たとへ妹とは云ふものの無闇に齡などを訊くのは差控へずに

は居られない、もうちゃんとしたレディになつてゐて——瀧本は少少勝手の違ふ心地に誘はれてゐた。その上、子供の頃の面影もそれほどはつきり思ひ出せなくなつたが、髪の毛のすき透るやうな鳶色の具合、眼の玉の碧さ、そして皮膚の白い陶器に似た艶の態は、相當の注意を向けて眺めても混血兒とは解らなかつた。そんなやうなことで彼女が何か片身の狭い思ひでもしてゐるのではなからうかなどと愛へた驗しもあつたが、凡そ他の西洋人達の中に見比べても見境ひのつかぬのを知つて、瀧本は、自分で可笑しく思ひながらも祕かに胸を撫で降した。もう一つ別に、彼に安易さを覺へさせたのは、彼が心配したやうに「生活」を求めて彼女が訪れて來たのではなくつて、全く單純な觀光客として、小さな觀光團に加つて、序でに、眼色の變つた兄貴にも會つて行かう——位ゐの、全く安樂な状態で、遊びに來たのであるといふことだつた。一行と一處に歸國しても關はないし、都合に依つては自分だけ瀧本の許に幾月でもとどまつても差支へないといふ話であつた。

瀧本が、この頃の自分の生活のかたち、に就いて最も手短かに説明した後に、今では皆なで森の屋敷を占領して、日本の *old Romance* の時代を髣髴するやうな空氣の中で學生らしい日日



を送つてゐる——といふことなどを傳へると、ローラもその仲間に加はりたいたいと云つた。

一行は日光から松島を見物して、引き返して關西へ赴くところだつた。横濱と東京で二三日行動を共にして一端村に引き返してゐた瀧本は百合子を誘つて、國府津驛で、一行に別れを告げて村へ来る筈のローラを待つた。

「ローラさんは日本語が出来る？」

「大分拙くなつたが、直ぐに慣れる程度だよ、あの位までは——。前には此方こそRさんの家庭や英語ばかりだつたんだが、今度會つて見ると恰で僕が、それが出来なくなつてゐるのに驚いたよ。それに比べるとローラの日本語の方がすつと確かだつたよ。」

「妾も日本語でないと困るわ。だけど英語だと、とても日本語ぢや云へさうもない感情的なことが——平氣で云へるのは面白いと妾思つてゐるのよ。」

「例へば何んな風に？」

「何んな風と云つても困るけれど……」

と百合子は愛嬌に富んだ首を大業に傾けて何か思ひ付いたことを云つて見ようとする思案の

眼を擧げたりした。

間もなく列車が到着したので二人は會話を斷つて、用意をしてゐると、ローラは窓から伴れの人達と一處に半身を乗り出して切りと手布を振つてゐた。鳥類の群が到着したやうな騒がしさであつた。六尺豊かな赦顔の紳士が、ローラを横抱きに兩腕に載せて悠悠と人人を分けてプラットホームに降りて來ると、瀧本には到底聞きとれなかつた早口で愛嬌めいたことを云ひながら——さあ、どうぞうけとつてお呉れ、私達のローラを——さう云つて瀧本の胸先に突きつけたので、瀧本も亦紳士と同じやうに兩腕の上に享けなければならなかつた。瀧本があかくなつてローラをうけとると、列車の中の人達が一勢に鬨の聲を擧げた。そして、慌しく幾人も人達が次次に降りて來てローラの額やら頬やら唇に激しい接吻の雨を浴せてチヨコレートの包や花束などでローラの胸を埋めた。中には、さめざめと涙を滾してゐる年寄りの婦人もあつた。

あとでローラが云つたのだつたが、これでもうローラは一行の者とは再び日本では會はないであらうといふことだつたので、あのやうに皆なが、事の他感情に走つてゐたのであるさうだつた。道理でつい此間埠頭場で彼等を迎へた時に比べると全で趣きが變つてゐた——と瀧本は



氣づいた。花束や菓子の箱などに埋れたローラを抱きあげてゐる瀧本を中心にして、突差の間に、記念の撮影などして、一行の列車は西へ向つた。

あの時ローラを抱き降ろして来た肥つた紳士は、ローラの街のミドル・スクールの博物の先生でウキルソンといふ博士ださうだつた。一年ばかり前からローラは、ウキルソン先生の標本室に助手を務めて、自活の道を立ててゐたさうだつた。

支線の車に乗り換へると、ローラも涙に濡れた顔を直すためにグニテイ・ケースを膝の上に取りあげると一心になつて鏡をのぞきはぢめた。

「妾のフランク——」

とローラは瀧本を稱んだ。この前に會つた時に、二人の父親がアメリカ人の友達の間でフランク・タキモトと稱はれてゐたことを思ひ出して——これからはお前のことを左様稱ぶよ——とローラが勝手に決めてしまつたのだつた。その時瀧本は、村井の小説の話を持出して、この頃村では、互の名前をパトリックだとか、セブラ、オーソニー、そしてダビットだとかに稱び代へてローマンズの夢に耽つてゐるところなので、今度は自分がフランクとなつても驚きもし

ない——などと突然大きな聲で、わけもなく嘖ひ出しながら點頭いたりした。

「此方側に回つて、妾がお化粧をする間、これをおさへてゐて頂戴な——」

ローラが化粧箱を叩くので、瀧本はシートを向ふ前に座り直して額ぶちでもささげる見たいに鏡をその顔の先に持ちあげた。——そして瀧本は、しげしげとローラの顔を眺めてゐた。ローラの碧い瞳に、自分の顔が小さく映るのが窺はれさうになる位に眼近に、ぼんやりと娘の顔を眺め続けるのであつた。

……さうしてゐると瀧本は、止め度もなく不可思議な人生の、奇抜な因果觀念に襲はれてななかつた。異様な冷たさを湛へた不意の新しい血潮が激しい勢ひで身内を流れはじめたかのやうな變な震えを覺えた。さうかと思ふと、全く心には何の衝動もなく、ただ珍らし氣な人形に接してゐる見たいな白白い心地に誘はれたり、夢遊的な面白さに驅られたりした。そしてただ妹といふ常識的な觀念が何うも切實に響いて來ない憐れつばいやうなもどかしさに追はれて敵はなかつた。

「ローラさん、日本語を用ふのは骨が折れますか？」



さつき瀧本が話したのと違つて、ローラはあまり日本語を用ひないので百合子が左う、大分に教室的英會話風に訊ねると、ローラは氣の毒さうな顔をして、殆んどもう忘れてしまつたら、これから精精ブラクティカルに聞き覚えたい希望を持つてゐる、どうぞ親切な教へ手になつて呉れ——と心細さうに云つた。

「素養があるんだから、忽ち上達するだらう——それに、僕達の仲間の會話には、地方色が無いから、聞いたままを、そのままテキストにすれば大丈夫だらうよ。」

瀧本は自信あり氣な口調で、そんなことを呟いた。

日驛で降りると、塚本の七郎がラツキーに曳かせた馬車を持つて迎へに出てゐる。

「皆なは？」

武一や竹下達のことを瀧本が訊ねると、皆なは森の家で歡迎宴の仕度をして待つてゐる——  
「うちの親爺も八重もお手傳ひで大騒ぎだよ——だけど今から出掛けて行つたら竹下さん達には多分途中で遇ふだらう。」

七郎は妙にとり濟してゐた。そして、凝とラツキーの轡をとつてゐた。——荷物は別の車で

送ることにして、出發しようとする、七郎は、瀧本に馭者臺に乗れと云ふのであつた。

「ラツキーの奴は、どうも俺の云ふことを巧く訊きやあがないんだ。篠谷に行つてゐる間に大分駄馬になつたらしいぜ。」

「車を曳かせるのも亂暴だな。」

競馬用だつたのに——と瀧本は思つた。

「もうどうせ今年からは競馬には出さないつて云ふんで、篠谷ちや野良になんて伴れ出してゐたさうだよ。俺は、それを聞いた時には太一郎達が何か新しい魂膽を回らせてゐるんだらうと思つたが——」

二人が、荷物の支配などをしながら篠谷に對する憤懣からついつい荒つぽい言葉を取り換してゐると、何時の間にかローラが傍らに來てゐて、瀧本と七郎が、

「よしッ、もう二度とラツキーは渡しつこないから！」

「あんなべら棒な話つてあるものか！」

さう云つて言葉が止絶れると、ローラは酷く熱心な眼を輝かせて、さつきから二人の會話を



非常に注意深く聞いてゐるのだが、さつぱり意味が解らない、二人は何か争ひを始めたのか？  
 「あいつ」といふのは「彼」の意で「俺らはなあ！」といふのは「自分が考へる處に依ると」といふ意味だと百合子が教へたが、その他の「べら棒奴」とか「あん畜生奴が」等と云ふのは（それがまたこの時非常に屢屢二人の間で使はれてゐた）一體何詞に屬するのかわか？ と瀧本に質問した。一體瀧本は、何事に依らず説明をするといふ業が酷く不得意だつたが、この時は七郎から篠谷の噂を聞いて向つて腹が立つてゐて凡そローラの心持とはうらはらだつたせゐか、面倒臭さうに、それは單なる感投詞だ！ と答へただけであつた。

ラッキーに車を曳かせるのを思ふと瀧本は、いろいろと胸が痛んだが、百合子は關はぬと云ふし、それに踵の高い靴を穿てゐる二人の娘に村までの道を歩かせるわけにも行かなかつたので、上着を脱ぎ棄てて馭者臺に乗つた。

「ちや俺は先へ行つてゐるぜ。若し途中で太一郎にでも會つたら、ラッキーの話なら塚本に來れば解ると、若し向方で何か云つたら左う云つて……」

七郎は自轉車で走つて行つた。

## 十

驛から森のR村までは海に臨んだ崖道に沿つて、山裾が翼になつて彎曲してゐる。蜜柑や麥畑の丘の下をうねうねと迂廻しながら、三つの部落を過ぎた後に、北へ、山へ向つて二里ばかりの田圃道を辿らなければならなかつた。——午迄には未だ餘程の間がある眞夏のきらびやかな朝の明りのうちだつた。白い雲の峯が水平線の上に一塊りになつてぼつかりと浮んでゐた。山裾を回つて裏側の道へ向ふ時は恰度崖道が海の上に向いてゐるやうなかたちになつて、沖合の雲を脚下に見降せるのであつた。瀧本は、なるべくラッキーの脚竝みを和やかに保つて、座席の者と話を交しながらすすんで行つた。ローラは次次に展開されて來る新しい風景を口を極めて賞め讃へながら——

「去年のロメリアで、先生達と一緒にレーキ・サイドへ行つた時に見た景色に似てゐる。」などと云つた。



「ロメリアつて何なの？」

「ハハハハハ、それは方言だつたかも知れない、失禮——。ピクニックと同じ意味なんだけれど、もう少しお祭り気分が濃厚の、あたし達の町の行事ウツリイキなのよ。やつぱり斯んな馬車を、花などで飾つて幾臺も連ねて、それこそお爺さんもお婆さんもお婆さんも若者も、娘も、皆な夫夫得意の樂器を一つ宛抱へて浮れ出すのよ、面白いこと！」

「まあ——。ローラさんの樂器は何なの？」

「タンバリン——去年の時に、お友達とおそろひでジブシーになつてよ。……さうさう、あたしが幼い時分にフランクはホルンを吹いてゐたけれど今でも續けてゐて？」

「……さうだ、あのラツバは持つて來て置きたいな！」

と瀧本は呟いた。「續けてゐるよ。ねえ、百合さん？」

「あの時——」

と瀧本の背後で百合子が云つた。堀口と争つて海邊へ追れた時のことを百合子は思ひ出したらしかつた。……「この頃、あの時一度聞いたただけだけれど……」

百合子の口紅が、ラツバについてゐたのを知らず口にして百合子に笑はれた時のことを瀧本は思ひ出して何やらヒヤリとする思ひに打たれて口を喊んだ。あの時考へた「結婚」の妄想はさまざまな事件に追はれてゐるうちに自分ながら烏耶無耶になつてゐたが、百合子の胸には何んな風なかたちで残つてゐるのかしら？ と瀧本は思ひ起してゐた。

やがて小さな岬を廻つて中途の村に着くと、村端れの休み茶屋の前に出たので瀧本が馭者臺から飛び降りてラツキーに水を與へようとすると、不圖堀口に出遇つた。

「やあやあ御苦勞様！」

堀口は酷く愛想の好い態度で、瀧本達を迎へた、「停車場まで迎へに出なければならなかつたんだが、時間が少々早過ぎて、遅れて済みませんでした。大變だつたらう。でも、まあ、此處で遇へて好かつた。あの……」

と堀口はローラの名前を訊くのであつた。瀧本は大分勝手の違ふ心持で、名前だけを通じると「さうさうローラさんか——。さあ、まあ、ちよつと降りて一ト休みして下さい。」

馬車の傍らに進み寄つて、ローラと百合子に次次に腕を差しのべて、いんぎんに茶屋の奥へ



案内するのであつた。

「守夫君、ローラさんは日本語は何うなの？」

「出来るでせう、一ト通りは——」

「そんなら好いが、若し巧く行かなかつたら君通譯して呉れないかね。」

ローラは、酒樽などが据えてある店の腰掛に百合子と並んで、あたりをきよろきよろと見廻しながら、此處は何う云ふ類ひの家なのか？ など、百合子に訊ねてゐた。百合子が、酒場とホテルを兼ねて、そして村人達のクラブにもなつてゐるところだ——などと説明してゐた。

「ローラさんですか、私は瀧本の縁家先の者です。」

堀口が、ローラの長い旅の勞を丁重にねぎらつたが、相手にはさつぱり通じぬ模様だつた。

堀口は、てれて、これあ困つたな……と苦笑しながら、

「おい守夫さん、何とか云つて呉れよ。」

と助けを求めた。瀧本は、不圖堀口に對する積る鬱憤を晴すのは斯んな時だと思つたので、

ローラに向つて、

「この男は——」

と、様子だけはおだやかにして、堀口を説明した。「怖るべき悪人としてお前に紹介するが、吾吾のフランクが亡くなつた後に、一切の吾吾の權利を奪つて、吾吾を窮地に陥入れようとしてゐる憎むべき人物なのである。心に思つてゐるままの事を決して口に出して云はぬ稀大の嘘吐きである。要心せよ。」

「有りがたう。」

と堀口は云つた。百合子は、笑ひを懐えるために唇を噛んでゐた。

「見よ、彼の面上に漂ふ眞實味に缺けたる微笑の有様を——。」

と瀧本は續けた。「彼方に見えるあの青青とした蜜柑畑の丘、そしてあの丘の下にある吾吾の家や畑や、または町の銀行に預けてある吾々に屬すべき幾種類もの株券——それらの財産の凡てを、他人の名前に書きあらためて——」瀧本は「母」と云ふべきところを「他人」と云ひ換へたのである。

「更に余をこの地から放逐せんと計てた邪惡の心の持主である。そして、お前が、余の妹であ



るといふ事實は知らぬ筈なのだけれど——」

「守夫君——」

と堀口は瀧本の手を引いて「斯う云ふことをローラさんに云つて呉れないか——。たつた一人で斯んなところへ訪れて来て定めし心細いことだらうが、此處はあなたの第二の故郷も同然のところだし吾吾がついてゐれば決してもう心配することは要らない、優しいお母さんもゐる、親切な私といふをぢさんもゐる——どうぞ、もう、何の遠慮もなく何時までも居て呉れるように——と。」

「あなた達は一體ローラのことを何う思つてゐらつしやるんですか？」

瀧本は思はず氣色ばんで、堀口の前からローラをさへぎつた。

「何も彼も私には好く解つてゐるさ。第一もうローラさんが着くといふ電報は君達よりも先に此方が受取つてゐるし……」

ローラの額には憂ひの色が浮んでゐた。瀧本は、感情になど走つて、堀口のことをあんな風に説明したりしたことを後悔した。

堀口が、彼等を、親類の人達も集つてゐることだから真直ぐに實家の方へ向ふやうにすすめたが、瀧本は、

「森の家へ行くことになつてゐるから——彼方で皆なが待つてゐるから——彼處で待つてゐる者だけが僕の友達であり、親類なんてのは何の用もないから——」

そして今はもう、森の家が、自分達の家なんだから——などと云ひ張つてゐるところに、武一と竹下と村井が八重も一處に伴れて、馬車でやつて來た。亢奮した瀧本の眼から涙が滾れてゐるのを見て一同は驚いた。

ローラは自分の方に背を向けて堀口と何か云ひ争つてゐるフランクの背中を見てゐたので何も氣づかなかつたが、店先に止つた馬車から降りて來る若者達が、何かただならぬ氣色で、彼の周圍に駆け寄ると、左右からその腕を支へて堀口の前を離したので、はじめて彼の顔に氣づいた。

「フランク！」

ローラは突然左う叫んで、瀧本の胸に縋りついた。



「どうも私には、さつぱり解がわからんよ。」

堀口は、首を傾げながら隅の腰掛けに凭つた。——「守夫君の心持が解らんのだよ、折角ローラさんがやつて来たといふ場合に、何を一體感違ひしてゐるんだらう、困つたなあ！」

瀧本はローラを抱いたまま、突然——涙が止め度もなく滾れ落ちるのを知つたが、何だかもう得體の知れない感情に掻き亂されて、泥酔の奈落に轉落して行く見たいな没理性状態に走つて、聲を擧げて泣いた。ローラも泣き出した。瀧本は、さつき彼女を停車場で抱へた時と同じやうに兩腕にのせたまま、馬車の中に戻ると、更にまた泣けた。

「ローラ、わたしのローラ——堪忍してお呉れ！」

彼は、そんなことを叫んでローラの胸に顔を埋めた。そして、しつかりと抱き絞めてゐると急に、犇犇と、妹に對する底知れない慈しみの情が泉のやうに湧きあがつて来た。このまま、波にもたそばれて底知れぬ水底へ沈んでゆく心地がした。

一同の者は手の降しようもなく呆然と、馬車の周囲をとり圍んで首垂てゐるばかりだつた。

……「然し、それぢや、世間へ向つての義理合上から私達の面目が……」

「混血兒の妹がやつて来たなんてことは、あんまりパツとさせない方が、それこそあなた達の世間態は綺麗でせうがね。何うせ、今迄だつて、さつぱりと秘し通して、ここまで濟んで来たといふ場合に僕達にはあなた達にも、このいきさつは何も解られてゐないと思つてゐたんですもの？」

「冗談ぢやない、十年も前から解つてゐることぢやないか！」

「……然し、ローラさんの今後の問題は何も彼も守夫に負はせて置けば——いや、それが當然の話で——」

「それはまあ今後の別問題として、今日の場合だ、何うしてこのまま君の家へ行つて旅装を解かせるなんて、そんな無茶な話を吾吾が黙つて見過して居られよう！」

「然し……」

「いや然し……」

堀口と武一が切りに口論を交へてゐた。

こちらの馬車は、その間にもう徐に走り出してゐた。瀧本の馬車の馭者臺には百合子が、そ



して先へ立つた空馬車には八重が、互に何やら呼應し合ひながら、手綱を振つて駆け出した。竹下と村井が追ひかけて来て、別別の車に飛び乗つた。

「行つてしまへ行つてしまへ！ 百合さん俺が代らう。」

「行つてしまへば、それつきりだ——八重ちゃん俺が手綱を持たう。」

武一も追ひついて来て八重の馬車に飛び乗ると、空を切つて鞭を鳴した。二臺の馬車は追ひつ追はれつのかたちで街道を駆け抜けると、再び断崖の中腹を縫ふ螺旋状の徑道にさしかかつた。

瀧本は、夢から醒めたやうに顔をあげると悲し氣な眼で空を仰いだ。ローラは彼の胸に凭りかかつたまま、

「そこにある人達は悪人ぢやないの？」

と竹下達を指して、小聲で囁いた。瀧本は、思はず笑ひ出してしまつた。

「おい竹下、俺がね、堀口のことを悪人だとローラに紹介したところ、ローラつたら君達もその仲間で、此方が、ハンド・アツプに出遇つたのかと思つたんだつてさ。」

「なるほど——」

と竹下は神妙に點頭いた。「見渡すところ凄惨な田舎だからな。ローラにして見れば、西部に來たやうな感じだらうからね。」

「大丈夫だよ、ローラ、これは皆な——僕達のキャンプの仲間なんだから——云はば、吾々の危難を知つて救助にやつて來た義勇軍の面々さ。」

瀧本が左う云ふとローラは、ほんとうに安心して竹下に會釋した、ロココ風にさへ見へるはにかみを含んだ様子で——。そして、漸く胸の震へが治つたが、さつきはフランクが餘り意久地がないので、これでは到底フランクを頼つてはこんな怖ろしい田舎などには滞在出來ぬと思ふと急に情なくなつて、それで泣いてしまつたのだ、それにしてもあの時のフランクの様子は何うしても自分には了解出來ないが——などと云つた。

馬車は、賑やかな笑ひ聲を載せて明るい麥畑の中の道をすすんでゐた。

「ローラさん、フランクは、ほんとうはとても強いんだから大丈夫だよ。」

半ば瀧本をからかふやうな調子で竹下が、フェンシングのチャムピオンなんだからね！ な



どと云ふと、ローラは生真面目に眼を輝やかせて、そんなら何故さつきの無頼漢を疊んでしまはなかつたのか？ と訊ねた。とうとう堀口は正眞の無頼漢になつてしまつたわけである。家庭上のことや堀口のごとに就いては、もう何もローラには説明しまい——と瀧本は思つた。

「それや百合さんかローラが、いざ無頼漢に奪はれるとなれば、大活劇になつて——俺の譽れをお前に見物させてやることも出来たんだが、救助隊の來方が早過ぎたわけさ。」

「でも、この邊では屢屢斯う云ふ野蠻な事件が起るの？」

ほんとうに西部劇映畫の世界にでも來たかのやうにローラが飽くまでも生真面目なのは瀧本達も少少てれ臭かつたが、

「それあ、あるさ！」

と云ふより他はなかつた。「都會生活者には到底想像もつかない素晴らしい蠻風がいくらでも遣つてゐるよ」

「ウキルソン先生に見せてやりたい。先生は考古學にも趣味を持つてゐるから。——それにしても、さつきの蠻人の——」

とローラはまた堀口を題材にした。「容貌は、お前達と違つて、眼の凹んだ具合や鼻の嶮しい感じ、そして、笑ひなのか、憤りなのか區別のつけ憎い表情のあんばいは、日本人といふよりも寧ろギリヤーク族に似てゐるが、この地方にはヤマト民族と種別を異にした移住民がゐるのではないか？」などと學究的な質問を放つた。

瀧本は思はず頭を掻いて、

「その種の研究は未だ経験ないが——些細に験べたならば或ひは新事實を發見するかも知れない。さう云つて見ると、彼の無頼漢一味の頭腦の働きは吾吾と餘りに違つてゐる、彼等の血液は確に類を異にした原始性を交へてゐる。」と云つた。そして「その種の研究は別の日に話合ふとして、ローラよ、お前を悦び迎へてゐる吾吾のためにロメリアの歌でも教へて呉れないか？」

と話頭を轉じた。そこでローラが瀧本の肩に凭りかかつて青空に眼を擧げながら、何か歌ひ出さうとした時、一同は、遙かの後ろから、聲を限りに呼びかけて來る物音に氣づいた。

「おーい、待つて呉れ！」



振り返つて見ると堀口を先に立てて四五人の男がキャベツ畑の畦道を傳ひながら一勢に双手を舉げて、夢中で呼ばつてゐた。

「あッ！逆襲して来た！」

ローラは悲鳴を舉げて瀧本の胸に突つ伏すと日本語で「あんちくしょめが！」と叫んだ。ギラギラとした逆光線をまともに面上に享けて青い畑の向ふから、大口をあけて叫んでゐる堀口等の表情が、嘗て覺えたこともない猙獰さを溢らせて、寧ろ怪奇的に、鬼のやうに瀧本の眼にも映つた。

十一

竹下は、シーズンの製作に、海邊の風景を選んで、麗かな日だと午前から百合子やローラやそして八重達を誘つて、馬車で海邊へ通つてゐた。村から海邊までは、河添ひの田圃道に添つて一里近くの道程だつたが、娘達はビーチ・パチヤマのまま、ギターや手風琴などを抱へて

繰り出して行くのであつた。

「村井——もう起きたのか？一處に出かけないか？」

村井の部屋となつてゐる蔵前の中二階の窓が開け放しになつて朝陽が窓掛けに射しかかつてゐるのを、庭先から竹下が見あげて聲をかけた。微風をはらんだカーテンがふわふわとゆらいでゐたが村井の姿は現れなかつた。

「バトリック——起きろよ。」

竹下は切りに呼びかけてゐたが——村井は危く寢臺から落ちさうな姿で、ぐつすり寢込んでゐるところなので、百合子やローラも一處になつて呼びかけたが、無論、無駄であつた。

友達が編輯してゐる雑誌に「南方の騎士」の第一稿が載りはじめてゐたので、この頃の村井は、その續稿の執筆で徹夜を續けてゐる状態だつた。村に居る間に彼は、その創作を完結してから、皆など一處に意氣揚揚と東京へ引きあげる決心だつたから——。

寢臺の傍らには、しほりを挟んだ古典の傳奇小説の本やら、畫集の類ひやらが四散してゐて、卓子のまはりには書き損じの原稿が破かれたり丸められたりして飛び散つてゐた。



「誘惑の沼とセント・ジョージ」

(第三章)——卓子の上の原稿には鷺ベンの太文字で、そんな表題が誌してあつた。鷺ベンの先をナイフで削りながら、文字を書くのが村井の趣味だつた。

「いくら呼んだつて駄目だよ、村井はもう少し前に眠つたばかりなんだもの——」

泉水を隔てた書院の窓から瀧本がまぶしさうな顔を出して、

「やあ、今朝は素晴らしい天気だな！」

と水水しい空を見あげた。

「だから、フランクも俺達と一處に海へ行きませんか？」

ローラが窓側に駆け寄つて瀧本の手を執つた。——「ああ、間違へてしまつた、また！——

俺……ちやなかつた、妾達と一處に。」

ローラの日本語では、何時も圍りの者は笑はされたが、別段訂正しようとする者もなかつたので彼女は、男達の會話をそのまま模倣して屢屢突拍子もない言葉を使ふのであつた。

「だけど僕も、ほんの少ししか眠つてゐないんでね……」

瀧本も、村井と競ふて徹夜することが多かつた。「星學大系」の翻譯を、夏のうちに片づけ、矢張り皆など一處に間もなく新しい生活を目指して東京へ出發する筈だつたから——。

「斯んな綺麗な天気は、おそらく一ト夏のうちに三度とは見られないであらう素晴らしいさだぜ——  
—行け行け！」

と竹下はすすめるのであつた。「村井の奴も無理矢理に引きづり起して来いよ。」

「武一は？」

「兄さんはね——毎朝とても早くからラッキーを伴れ出して、競馬場へ通つてゐるわ——馬車は八重ちゃんところのリリイが曳いてゐるのよ。」

草競馬の季節が近づいたので武一は、これが最後だといふ意氣込みで、ラッキーのオーミンダに餘念がなかつた。その懸賞競馬にラッキーを出陣させて、皆なの出京費を儲けるといふ意氣込みだつた。村井の「南方の騎士」にしろ、瀧本の「星學大系」にしろ相當の報酬が得られる筈なんだから、もう隠退することに決めたラッキーを今更レースになんて出さない方が好からうと皆なが忠告するのも諸かず武一は、堀口や篠谷達への手前にも、何うしてもラッキーを



勝たさずには置かない——と無闇に躍起となつてゐるのであつた。

篠谷の太一郎は新しい馬を購入して、競馬場の人氣を引きさらつてやる——といき巻いてゐるといふ噂だつた。堀口も亦近頃新しい馬の持主となつて、何某といふ騎手を手込めにして大儲けをしようとしたらむでゐるといふことであつた。道理で、近頃彼等は、この家の土蔵のことにも、ローラに關する遺産の横領に就いての戦略にも（或ひは、此方側がそれに關しては餘りに恬淡に放擲したので首尾好く占領し終せたものか——）頓着なく、馬で、氣狂ひになつてゐるといふ話であつた。

「リリイは出さないの？」

瀧本が不圖訊ねると、

「ええ——」

と八重は、點頭きながらうつむいてしまつた。瀧本が追求すると、理由は好く解らないけれど、太一郎や堀口が何か七郎に向つて怪すやうなことを云ひに来たので——といふやうなことを苦笑を浮べて八重が云つた。

「ラッキーの代りに、リリイは、今は此方に任してあるが——ほんとうは、もう篠谷の持物に變つてゐるんですつて！」

「そんな馬鹿なことはない。七郎が好人物だと思つて、彼奴等は何處まで人を喰つた眞似をするんだらう。——ラッキーを取り戻すためには、ちゃんと、あの——」

と瀧本は思はず口走つて、

「俺達が蔵から持ち出した鎧櫃やら巻物を賣つた金を……」

云ひかけて、何も知らない八重に向つて亢奮の氣色を示し過ぎたことに氣づいて、

「ねえ、竹下——酷いことをする人達だな、どこまでも——」

と、汀の石に腰を降して鯉を眺めてゐる竹下呼びかけた。

「何うしても俺は、太一郎といふ奴を擲らすには居られなくなつた。」

竹下は立ちあがつて、腕を瀧本の眼の先へぬツと突き出した。

「關はず、此方でリリイを出すことにしようぢやないか。」

瀧本は微かな震へ聲で唸つた。



「然し、それがもう太一郎の持馬と變更されてゐるとしたのなら何んなものだらう？」

竹下の聲は不安に戦いてゐた。

誰も氣づかなかつたが、さつきから八重の父親が泉水の向ふ側で水の上の落葉を拾つてゐた。

そして此方の話を聞いてゐたと見へて、網の竿で水を叩きながら

「なあに——若しあなた方がリリイを使ふんだつたら御自由ですとも——決して、未だ篠谷に譲り渡したわけぢやないんだし……そんなら今のうちだ。」

と獨り言のやうに呟いた。

「よしッ——ぢや、俺が、リリイの騎手になつて、太一郎と戦つてやらう！」

瀧本は、窓から、未だ朝露に濡れてゐる庭石の上に飛び降りながら叫んだ。

この村の競馬といふのは主に、その馬の持主が騎手になつて出場するといふ——奇妙な風習であつた。馬も亦、決して専門の競馬用のもではなくつて、普段は野良に出て田を耕したり、馬車を曳いたりしてゐる労働馬を竝べて、一種獨特の地方色に富んだ競技を戦はすのであつた。それで、それ程の老體でもなかつたが騎手になることの出来ない堀口は、祕かに騎手の

物色に餘念がないわけなのであるが、それは明らかに反則行爲の筈である。騎手は、持主か、でなければ、その家の家族の一員でなければならぬ掟であつたから、時には花らしいユニフォームを着けた年頃の娘が騎手となつて競技場に現れることも珍らしくはなかつた。八重や百合子も、嘗ては晴れのレースに出場した經驗を有つ身であつた。

「リリイか、ラツキーなら——妾も、もうすつかり慣れたから獨りでも乗れる。」

競馬のいきさつに就いては了解し憎かつたらしいローラは、騎手になるといふ意味からではなしに、そんなことを進んで云ひ出し、何時か皆なで轡を竝べて昆蟲採集に行つた時のやうに今日もこれから、めいめいに馬に乗つて海邊へ行かうではないか——

「山を一ト回りしながら——」

と誘つた。

その朗らかな提言で瀧本と竹下の亢奮は靜まつたが、瀧本は、早速「騎手」の練習に取りかかつて見たかつた。ローラは、ウキルソン先生にデヂケートする目的で、このあたりの野生植物やら昆蟲類の標本を作ることを主な仕事としてゐた。



娘達が乗馬服に着換へる間に竹下と瀧本と八重の父親が、街道に出て、何時ものやうに知り知ひの水車小屋から「ワカクサ」、蜜柑山の倉庫番から「アサカゼ」、「ミドリ」そして酒造家の厩から「ドリヤン」などといふ馬を借り出して来た。

竹下はギターとランチ・バスケットを携へてアサカゼに、ローラは捕蟲網を纏してリリイに百合子は海水着の袋を鞍につけてワカクサに、八重はローラの採集箱を肩にかけてミドリに、そして瀧本は空身でドリヤンにまたがった——蟬がかまびすしく鳴き立つてゐる森を抜けて河堤に出た、朝の運動を終へて戻つて来る村中の「競馬馬」が、此處彼處に颯爽たるいななきを擧げて、恰で何處かに馬市でも開かれるかのやうに、街道も河堤も山徑も間斷もなき程凄まじい人馬の往來であつた。——この村には何んな貧しい家にも少くとも一二頭の馬を飼育してゐない所はない——馬の村であつた。競馬の季節が近づくと、村中の人人は一切の野良仕事を放擲して、それぞれの飼馬の訓練に寧日なき有様であつた。懸賞競馬に優勝すると凡そ一ヶ年分の生活費が賞金として獲得出来るといふ仕組であつたから、季節が迫るに伴れて村全體が競馬の熱に浮されて、様様な暗闘やら策略やらで渦巻いて異様などよめきが漂ひはじめるのが慣ひであつた。

であつた。

此方の一隊のやうに、斯んな切端詰つた時期に幾分の餘技のないでたちで練り歩いてゐる光景は寧ろ人人の眼に謎の感を與へるかのやうであつたが、今日は、先頭に立つた瀧本の何時にない颯爽たる様子が、恰度往來の馬を伴れた村人の眞剣な眼付きに匹敵して決しておくるところのない殺氣を含んでゐた。——何處の馬の今年のコンディションは何うだ？ といふ觀察をするために往來の人人は互ひに疑念に富んだ眼を擧げて、互ひの馬の様子を窺ふのであつたから、事更に、敵方の油斷を盗むために吞氣らしく馬車を曳かせたり、枯草を積んだりしながら祕かに、着着と訓練の鞭をふるつてゐる權謀家も多かつた。だから、瀧本達の一行が、そんな装ひで隊伍を組んで行くところを反つて意味あり氣に打ち眺めて、

「仲仲、何うも御精が出ますな！」とか、

「騎手のそろつたところは見事だが——」

馬の数が足りないであらう！ などと嘲りを送る者もあつた。

「騎手が足りないで困つてゐる篠谷や堀口なんていふ大盡があるかと思へば、他所の馬を借り



出して……」

河の淵で馬の體を洗つてゐた男が、瀧本の方を向いて、そんなことを云ひかけた時、

「これがね——君！」

と瀧本は傲然として云ひ返した。「都合に依つたら俺達の組ちや、この同勢がこのまま今年の競馬に出るかも知れないんだぜ、此方の云ひ分次第では馬も悉く吾吾のものになるといふ事にもなつてゐるんだから——」

「お前さんは、この馬が、今度堀口さんが買った馬だつてことを知らないのかね？ 馬は相當なんだが乗手がなくつて、堀口さんは血眼になつてゐるといふところさ——」

はぢめ堀口は八重を物色したのであつたが、それが失敗したので今では、瀧本の實家の名前を持つてローラを呼び返して騎手に仕立てようと計畫してゐる——などといふことを男は瀧本に告げた。村では、騎手は男よりも寧ろ娘の方が歓迎されはぢめてゐた、この二三年以來——美しい娘が、きらびやかな男姿のユニフォームをつけて競馬場に現れると觀衆は萬雷の拍手を浴せて、しやにむに彼女に投票を送つて、恰でレヴウ見物のやうな騒ぎに酔ふのであつた。その

人氣に壓倒されて大概の男達は色を失つて敗北してしまふのが例で、近頃はもう殆ど騎手は娘に限られてゐるといふ状態であつた。女流スポーツが近年世界的の人氣を負ふてゐるやうに、年毎にこの村からは花らしい女流騎手が出現した。女學校でも運動課目の分科として、乗馬を奨励して、選手の養成に餘念がなかつた。

瀧本は、それに、たつた今氣づいた。これは自分が騎手になつたつて始まらない！と思つた。

瀧本は、大分後れて呑氣な脚どりでぼかぼかと従いて來る後ろの百合子達を振り返つて「これから、競馬場へ行つて見よう、兎も角俺に従いておいでよ。」

と合圖して、河堤を急に左に折れて丘を昇りはぢめた。

「……ええ、さうなんです、村井は或る誘惑と戰つてゐるんです。」

「まあ！——それにしても、一體、それは——誰を戀してゐるといふんだらう？」

百合子と竹下は、そんな言葉を、馬首を並べて取り交しながら瀧本の後を追つてゐた。ローラは八重と轡を並べて、切りに日本語に關する質問を提出してゐた。

竹下は話を續けてゐた。



「此方は、つまり男が四人——そして、吾吾のカタリーナ嬢が三人——四人と三人……」

「馬鹿馬鹿しいわ、四人と三人ぢや駄目ぢやないの！」

百合子は、殊更に聲を擧げて馬鹿馬鹿しさうに哄笑してゐた。竹下が傳へようとしてゐる村井の所存——四人の男達のこの頃の理想の一端は、四人と三人のこのままの生活を、形式を變へて都會に移しても、そのまま理想の共和生活が保たなければならない筈なのだが、そして四人の騎士は、三人のカタリーナが醸し出す明朝な煙りに、誰が誰にといふ區別もなく、青春の熱烈な戀愛の感情に満足を覺へながら最も健全な生活が得られることに自信を持つてゐるのであるが——そんな、云はば夢のやうな陶醉状態が何時まで続くか——

「村井は、空想のうちで結婚の誘惑に驅られはぢめたのです。」

「まあ、面倒な云ひ方をする人達だわね——はつきり誰ツて？ 解らないの。」

「村井は、百合さんに戀してゐるんでせう。」

と竹下が思ひ切つたやうに云ひ放つた。

「それは違ふわ——」

百合子は、自分の言葉の矛盾してゐるのに氣づかず、

「それは守夫さんだわ。」

と云つた。

「ところが——」

と竹下は續けた。「百合子さんと云ふ代りに村井は、ローラと云ひ換へても、八重さんと云つても——關はないんだつて……」

百合子は何の憂色も浮べずに

「大分話の方向が物騒になつて來たわね。」

竹下さんも、それで——村井さんと同じいけ、圖、しい理想派といふわけなんぢやないの——と云ひ放つて先へ驅け抜けた。

「それが、つまり、今、彼が書き續けてゐる仕事の主題となつてゐるわけなんです……」

竹下は百合子を追ひかけたが響がうまく並ばないで、聲を擧げて、

「つまり吾吾の理想生活の發端といふのが、個性を超越した渾然たる夢の……花やかな圓形鏡



技の——」

などと意味の好く解らぬやうなことを朗讀する見たいに歌つてゐた。

乗手を置き去りにしたりリーとミドリが竹下の後から坂を昇つて行つた。——ローラと八重は河原に降りて蜻蛉を追ひかけてゐた。

馬を洗つてゐる男の傍に何時の間にか太一郎と堀口が現れて、娘達の様子を眺めると二人は

「やあ、好い處に居るぢやないか！」

と顔を見合せた。

「八重——」

と太一郎が呼んだ。何故か彼は何時でも八重の名を呼び棄てにした。ローラさんはもう、リーに慣れたかね。」

「ええ、慣れましたわ。」

八重の代りにローラが何か感違ひでもしてゐる見たいな顔つきで、早くちの英語で答へてゐた。「今も皆なで行列をつくつて、驅けて來たところですよ。」

「此方のものだよ。」

太一郎が眼を輝かせて堀口に囁いた。

「私の馬をおし貸しませう。」

「八重は俺のお乗りよ——競馬場へ行つて遊ばうぢやないか——ローラさん、珍らしい蟬をとつてあげますよ。」

太一郎と堀口は瀧本達が競馬場へ向つたことを知らぬ様子であつた。

## 十二

武一がラツキを驅つて、馬場を廻つてゐるところに瀧本達が來て——此方も三人のカタリイナを出場させて選手権を争つてやらうではないか、無論三人とも勇んで承諾したから——といふことを告げると、

「左う決まれば——」



と武一は雀踊りして叫んだ。「東京へ引き上げた後も季節毎に村に歸つて——堀口達を牽制しつづけてやる事が出来る。百合子は、この頃こそ騎手にならなかつたが、誰にも負けをとつたことのないブリリアント・チャムピオンなんだから——」

「八重さんとローラさんも、此頃では妾に負けない名手だわよ。」

「男達の働きよりも、一年一回のカタリーナ達の収入の方が斷然リードするなんてことになりさうだな——ハツハツハ……」

竹下は無性に痛快さうに哄笑した。「東京の郊外に早速——ヴェランダつきのバンガロウを借りるとしよう。そいつが俺達の合宿所になるといふわけだ。」

堀口と太一郎が、ローラと八重の轡をとつて、其處に到着した。

「僕達は夫夫馬を所有することが——決つたので——」

堀口等に先立つて竹下が云つた。「ドリアンとリリーとラッキーが僕達の所有になつて——そして騎手が三人……」

「それではね——」

堀口が疾る胸を強いて押し鎮めるかのやうな落着いた見得を切つて口を開いた。「私達の二頭とそつちの三頭とを合併して、三人の騎手を順順に乗せて、今、三回に分けたレースを行つた上で、騎手の争奪に埒を明けることにしようぢやないか。」

「感情上の仲違ひも、それで、はつきりと結末がつくだらう。」

と太一郎は何か不平さうに呟いた。

「好からう。」

武一と瀧本が同時に答へた。

「ローラさん——事件が、何となくお伽噺めいてゐる見たいんだけど、不安を感じる必要はありませんよ。」

ローラが、ぼんやりと堀口達の顔を見守つてゐるのに武一が氣づいて、

「全然遊戯のつもりでゐれば好いんだから——」

などと氣を配ると、ローラは上着を脱ぎ棄てながら、

「あたし達の町のロメリア祭の時にも恰度それと似た風習があつて、それは馬ではなくつて、



娘達が驢馬に乗つて競走をする——あたしも幾度か、その選手に選ばれて出場した経験があるから、勝てる自信だつてある！」

と勇み立つてゐた。「それにしても、好くも似た風習が此處にもあると思つて、先程から感心してゐたところなのよ。」

「都では聞いたこともないが、これは寧ろ最も近代性を帯びたスポーツぢやないか……」  
竹下は有頂天になつて、

「堀口さん、賭けをしようぢやありませんか、——ね、武一、此方は例の土藏の鍵を提供しようぜ。」

などと、まことしやかに云ひ出すと、堀口は瞬間ギョツとして、

「土藏の鍵はあるんですか？」

と問ひ返した。

「ありますよ、ちやんと僕が保管してゐますよ。」

瀧本は皮肉を込めて答へた。——「太一郎君は塚本の借金證書を賭けたら何うかね。」

「ロメリアの競技の時も、やつぱり賭けが行はれます。」

此方は冗談半分だつたところにローラが生真面目な註をさしはさんだので、堀口と太一郎は赤くなつて、

「ちや僕等は、この二頭の馬を賭けるとしよう。」

「負けたら、また買つて来るだけだ。」

と堀口が弱音を吹いたが、塚本の話と、土藏の鍵のことは紛かしてしまつた。鍵の存在の有無に關しては、信用してゐないらしく、此方側の提供物を追求して來たので、瀧本は今度こそは真面目になつて、厩の横に避けて圓陣をつくつた。

「この地方では現在でも物物交換の習慣が残つてゐるのか知ら？」

ローラは瀧本に、そんな類ひの質問ばかり浴せるので、少少煩ささを覺へて、

「さうだ——この地方はアメリカならば、さしづめ西部地方に相當するのだから……」

「百合さんの家は、酋長の家柄なんだらうか？」

「まあ、待つて呉れ——」



彼は苦笑して、武一と竹下に向つて、

「騎手を提供すると云つたならば、餘り野蠻過ぎるかしら？」  
と相談すると二人は言下に否定して、

「折角八重さんを奪ひ返したばかりのところぢやないか。」

「そんなことを云つたら、奴等は無氣になつて——ほんとうに娘達を奪ひかねないからな。」  
と慄然とした。

そして、やはり、土藏の鍵と一決した。——三人は、目星しい物品は大方これまでも生活のために賣り盡してゐるガランとした藏の中を同時に思ひ浮べた。

「剝製の標本類だけだね。」

武一が面白さうに呟いた。

——然し彼等の相談が一決して、再び競技場に来て見ると、堀口と太一郎の姿は何處にも見あたらなかつた。——一同は、思はず顔を見合せて得體の知れぬ心地に打たれてゐると、八重が、

「あれあれ、彼處に！」

と叫んで、背後の芝生に覆はれてゐる明るい丘を指さすので、一勢に見あげると、馬を連ねた二人が烈しい勢ひでジクザクの小徑を駆け昇つてゐた。その姿が、黄味の強い絨毯に似た芝生に影を吸ひとられて、黒く、シルエットのやうに扁平になつて忙しく動きながら間もなく丘の頂きに達すると、青空を背景にして、此方を振り返つてゐた。聲はとどかなかつたが二人はそろつて片手を高く空に挙げると、何か口口に叫んだらしかつた。そして、見る間に丘の向ひ側に姿を没した。

百合子とローラと八重は、シャツの腕まくりをして馬に乗ると、戯れらしくそろつてスタートを切つた。ゆるく驅けたり、急にスピードを出したり、さうかと思ふと曲馬の眞似でもして遊ばうと話し合つたらしくピョンピョンと鞍から飛び降りて、驅ける馬を追つて横乗りで飛び乗つたり——夢中の競走をはじめたりして、いとも自由に夫々の馬をあしらひながら止め度もなく嬉嬉として、小さな圓形の馬場をはね廻つてゐた。

三人の男は、丘の中腹に段段となつてゐるスタンドで横隊に肩を組んで竝んだまま、群衆の



やうになつて凝つと娘達の遊戯を視詰めてゐた。——水水しい光が、挿鉢型の丘にとり巻かれ  
た盆地の競馬場に八方から降りそそぐ瀧のやうに集中して、キラキラと渦を巻いてゐる上に、  
その水煙りに似た陽りを蹴散らして魚のやうに飛び回つてゐるので、何れが誰れやら男達の眼  
には一向區別もつかかなかつた。いつか村井も其處に現れて瀧本の隣りに凭りかかつてゐたが、  
誰もそれに気づかなかつたのか、それとも綺麗な風景に見惚れてゐるためか、飽くまでも無言  
のまま夢見るやうな眼をそろへて光りの渦巻きを見降してゐた。

これが「南風譜」——（田園篇）の終局の場面である。

間もなく村井の「南方の騎士」が脱稿され、竹下の新たに取つかつた「馬と娘」と題する  
五十號大の製作が完成して、翻譯の仕事を持つた瀧本と、新しい就職口を求める森武一と、そ  
して八重とローラと百合子と——秋の東京へ、豫定の通り出發して、理想の共和生活にとりか  
かつたといふこと、竹下の「馬と娘」がシーズンの人気を一身に集めたといふ愉快なエピソード  
を附け加へて置かう。

南風譜

定價壹圓八拾錢



著者 檢印

著者

牧野信一

發行者

京都市左京區下鴨泉川町六  
中市 弘

印刷者

京都市神田區錦町三ノ二  
菅生定祥

發行所

甲鳥書林

配給元

京都市左京區下鴨泉川町六  
振替京都一六八二二番  
日本出版配給株式會社



橋本英吉富	武者小路實篤 樂園の子等 再版	北原武夫門	尾崎士郎 九十九谷	林芙美子 歷世 再版	丸岡明 風に騒ぐ葦のごとく	窪川稻子 扉 再版	横光利一 菜種 再版
近刊	一四六判裝 一圓四錢 製美本 送料十錢	新菊判著者 箱入二圓 送料十錢	新四六判中川 箱入一圓八十錢 送料十錢	箱入二圓 上質紙美本 送料十錢	一四六判上 箱入一圓八十錢 製美本 送料十錢	箱入六判上 箱入一圓八十錢 製美本 送料十錢	箱入六判美 箱入二圓 裝上質紙 送料十錢



